宮本武蔵（八）

吉川英治文庫

吉川英治文庫

55

宮本武蔵（八）

講談社

目次

さしえ　石井鶴三

宮本武蔵
(八)

円明の巻（つづき）

春・雨を帯ぶ

一

鳥の啼く音も、啼くところ聴くところによって異う。又、人の心によってもちがう。
高野の奥の高野杉には、天上の鳥という頻伽の声が、澄みぬいている。ここでは、下界でいういずも、ひよどりも、あらゆる雑鳥も一様に迦陵頻伽のさえずりであった。
「縫殿介」
「はあ」
「……無常だなあ」
迷悟の橋とかいう反橋の上に佇んで、老武士は、供の縫殿介という若党を顧みた。
どこの田舎の老い武士。――一応はそうとしか見えない手織木綿のごつい羽織に野袴という旅拵え。――けれど大小が図ぬけていい。立派な差料である。それから供人の縫殿介なる若党の骨

がらもよく、いわゆる雑人ずれのした渡り奉公人とはちがって、子飼からの躾がみえる。

「――見たか。織田信長公のお墓、明智光秀どののお墓、また石田三成どのや、金吾中納言様や、苔むした古い石には、源家の人々から平家の輩まで。……ああ数知れぬ苔の人間が」

「ここでは、敵も味方もございませぬな」

「一様に皆、寂たる一つの石でしかない。さしもの上杉、武田の名も夢のような」

「変な気がいたしまする」

「どういう心地がするの？」

「何だか、世間の事がすべて、有り得ない嘘のような」

「ここが嘘か。世間が嘘か」

「わかりません」

「誰がつけたか、奥の院と外院との、ここの境を、迷悟の橋とは」

「うまくつけましたな」

「迷いも実。悟りも真。わしはそう思う。嘘と観たら、この世はないからな。――いや御主君に一命をさし上げている侍奉公の身には、かりそめにも虚無観があってはなるまい。わしの禅は、ゆえに、活禅だ。婆婆禅だ、地獄禅だ。無常におののき、世を厭う心があって、侍の奉公が成ろうか」

といって、老武士は、

「わしはこっちへ渡る――さあ、元の世間へ急ごうぞ」

足を早めて先に立つ。

年のわりに足が慥かである。襟くびに兜の錣ずれらしい痕もみえる。山上の名所や堂塔の美もすでに一巡し、奥の院の参詣もすまし終ったものとみえ、その足どりはもう真っ直に下山口へかかる。

「よう、出ておるな」

下山口の大門まで来ると、老武士は遠くからつぶやいて、ふと迷惑そうな眉をひそめた。そこには、本山青巌寺の房頭から学寮の若僧たちが二十名以上も、列を左右に割って、待ちうけていた。

老武士の見送りにである。老武士はそんな手数を煩わすことを避けるために、すでに今朝立つ時、金剛峰寺で一同にわかれの辞を尽して出たのであるから、重ねて又、ここで大勢の見送りをうけた事は、好意には感謝しても、かえって微行の身には、有難迷惑と思ったにちがいなかった。

——が、そこの儀礼やあいさつの取り遣りも済まして、九十九谷という谷間谷間を眼の下に、降り道を急いで来ると、やっと、気もらくになり又、彼のいわゆる娑婆禅や地獄禅も必要とする——下界のにおいや、その身自身の人間くさい心の垢も、心にいつか戻っていた。

とある山道の曲りかど。

「あっ。あなた様は？」

出あいがしらに、体つきの大きな色の白い——といって美少年では決して無いが——卑しくない若侍が眼をみはって立ちどまった。

二

や、あなた様は？

と声をかけられて、老武士と若党の縫殿介も、はっと足をとめ、

「どなたで御座るか」

訊ねると、

「九度山の父から申しつかって、使いに参りました者にござりますが」

と、その若侍は、いんぎんに礼儀をした後、

「もし、間違いましたら、おゆるし下さいまし。道の辺で失礼にございますが、尊台はもしや、豊前小倉よりお越しの、細川忠利公の老臣長岡佐渡様ではござりますまいか」

「え。わしを佐渡と——」

老武士は、さも愕いたらしく、

「かような所で、ご存じの其許は、いったい誰じゃ。——わしはその長岡佐渡にちがいないが」

「ではやはり、佐渡様でございましたか。申しおくれましたが、わたくしは、この麓の九度山に住居しておる隠士月叟の一子、大助めにござります」

「月叟。……はて？」

思い出せない顔すると、大助は佐渡のその眉を仰いで、

「もはや父が、疾くに捨て去りました名にござりますが、関ケ原の戦いまでは、真田左衛門佐と名乗りおりました者で」

「やあ?」
と、愕然(がくぜん)、
「では真田殿――あの幸村殿のことか」
「はい」
「其許は御子息か」
「はい……」
と、大助は、その逞しい体に似合わず、はじらい顔に、
「けさほど、父の住居へ、ふと立寄りました青巌寺の坊さまのおうわさに、御登山のよしを知り、御微行とは伺いましたなれど、他ならぬ御方の稀々(たまたま)な御通過――それに道とてもこの麓のお通りがかり、何も、おもてなしは御座りませぬが柴の門べで、粗茶一ぷく、さし上げたいと父が申しまする。そのためお迎えに参じましたので――」
「ほ。それはそれは」
と、佐渡は眼を細めて見せたが、供の縫殿介(ぬいのすけ)をふり顧って、
「――せっかくな御好意であるし、どうしたものか」
と、諮(はか)った。
「さようで」
と、縫殿介も、うかとは答え兼ねていた。大助は重ねて、
「なお、およろしければ、まだちと陽は高うござりますが、一夜お泊りでも下されば、願うてもない仕合せ。父もさだめし欣ぶかと存じますが」

――考えこんでいた佐渡は、何やら心をきめたように、われとわが身へ頷いて、

「では、ご厄介に相なろう。泊めていただくか否かは、その時として。――のう縫、ともあれ、お茶をひとつ」

「はい。お供いたしましょう」

主従は、それとなく、眼を見あわせて、大助の案内に従って行った。

ほどなく九度山の里だった。その里の民家からは少し離れて、小高い山の瀬に倚り、土止めの石垣をたたみあげて柴垣をめぐらした一構えがある。

ちょうど土豪の山屋敷といったふうな作りだった。しかし、柴垣も門造りも、背が低く、風雅を失っていない。隠士の家と聞けば、成程と、どこか床しい閑雅があった。

「門前に、父が出て、お待ちしておりまする。――あの茅屋でございます」

大助は指さした。そしてそこから客を先に立て、自分は後に尾いて、わが家の前へ近づいた。

三

土塀の囲いのうちには、朝夕の汁へ摘み入れる程な菜だとか、葱などの野菜が畑に栽ってある。

母屋は、崖を負い、座しきから九度山の民家の屋根や学文路宿が低い彼方に見える。曲り縁の横は青々と竹林が水のせせらぎを抱き――その竹林の向うにも、住居があるとみえて、二棟ほどな家が透いてみえた。

佐渡は、通されて、閑雅な一室に坐り、供の縫殿介は、縁の板の間に、端居して畏まってい

た。
「おしずかだのう」
佐渡はつぶやいて、室内の隈にまで眼をやった。――主の幸村とは、土塀の門を潜る時もう会っている。
しかし、案内をうけて、ここに坐ったきりで、挨拶はまだ交わしていない。改めて、客の前に出直して来るのであろう。茶は、息子の大助の嫁らしい婦人が今、しとやかに置いて退がった。
だいぶ待つ……
しかし、飽かなかった。
ここの客間の、何くれとない物すべてが、主の席にない間も、客をなぐさめている。庭ごしの遠い眺め、水の姿は見えないが水のせせらぎ、茅葺屋根の廂先から咲いている苔草の花。
又、客の身近には、これとて綺羅な調度は何一つないが、さすがに上田城三万八千石の城主真田昌幸が次男の果て――そこはかとなく燻じる香木のにおいも民間にない種類の名木らしい。柱は細く、天井は低めに、侘びたる荒壁の小床には、蕎麦の一輪ざしに、梨の花が一枝、投げてあった。
梨花一枝春帯雨
「…………」
客の佐渡は、白楽天の一句を想い起し、そして長恨歌にうたわれた楊貴妃と漢王との恋など、声なき嗚咽を聞く心地がしていたが――ふと、眼はそこに懸けてある一聯の書に、はっと打たれた。

五字の一行物である。筆太に、濃い墨で、どっぷりと大胆に――が、どこか無邪気で、稚いところをみせ、一気に、

豊国大明神

と書きくだしてあるのである。そしてその大字のわきに小さく「秀頼八歳書」としてあった。

――道理で。

佐渡は、それへ背を向けて坐っている身を畏れて、すこし座の位置を横へ移した。名木を焚きこめてあるのも、客のために今遽かに焚いたのではなく、朝暮に、ここを浄め、これへ神酒を捧げる時のものが、いつか襖にも壁にも沁みているのであろう。

「……ははあ、さてはやはり、噂にたがわぬ幸村の心がけよな」

すぐ佐渡は、そこへ思い当ったのである。九度山の伝心月叟事――真田幸村こそは油断のならぬ漢である。あれをこそ、まことの曲者とはいうべきだろう。いつ風雲によって、どう変じるかも知れぬ惑星だ。深淵の龍だ。――と世間の噂はなかなかに喧しく、よく耳にすることなのである。

「……その幸村が」

と、佐渡は、主の肚を悟りかねていた。本来、努めて、隠すべき事を、客の目にふれるような所へ、何で懸けておくのだろうか。――ほかになんぞ大徳寺物の墨跡でも懸けておいたらよかりそうなものなのに。

――その時、板縁をふんでくる人のけはいに、佐渡はさり気ない眼をそらしていた。さっき門前で、無言のまま出迎えた、体の小兵な、肉づきも痩せ形な人物が、袖無羽織に、短い前差ひと

こしを差して、至極、腰ひくく、
「失礼いたしました。せがれ奴をさし出して、お旅先を心なきお引留め、おゆるしを」
と、詫ぶるのであった。

四

ここは隠士の閑宅。主は牢人。
元より、社会的の地位は取りのけられている主客の間とはいえ、客の長岡佐渡は、細川藩の家老である。陪臣である。
伝心月叟と今は名まで変えたりとはいえ、主の幸村は、真田昌幸が直子、その実兄の信幸は、現に、徳川系の諸侯のひとり。
その幸村が、あまりに腰ひくい挨拶に、佐渡は甚だしく恐縮して、
「お手を。……お手をお上げくだされて」
と、頻りに辞儀を返し、
「――さてもきょうは、計らざるお目もじ。お噂を耳にするは常々ながら、ご健勝のていを見て、よろこばしゅうござる」
佐渡がいえば、
「御老台にも、愈〻」
と、幸村は、客の恐縮がるままに寛ぎを示して、
「御主人、忠利公には、おつつがもなく、先頃は江戸表より御帰国とのこと。よそながら祝着の

いたりと存じおりました」
「されば、今年はちょうど、忠利様の祖父の君にあたる幽斎公さまが、三条車町の御別邸でおかくれ遊ばしてより三年の忌のお迎えと相成るので」
「もうそうなりまするか」
「かたがた御帰国。この佐渡も、幽斎公、三斎公、ただ今の忠利公と――三代の君にお仕えもうす骨董物となり居ってござる」
この辺まで、話がくだけて来たところで、主客一緒に、ははははと笑い合って、どうやらお互いに、世事を離れた閑居の主客らしくうち溶けてくる。迎えに出た大助は初めて知った客であったが、幸村と佐渡とは、きょうが、初対面ではないらしい。四方山のはなしのうちに、
「近ごろは、和尚にお会いなされますかな。花園の妙心寺の愚堂和尚に」
幸村が訊くと、
「いや、さっぱり、御不音をつづけておる。……そうそう、幸村どのを初めてお見かけ申したのは愚堂和尚の禅室でござったな。お父上昌幸どのに侍かれて。――てまえは妙心寺地内の春浦院を建立の主命で、あのころは絶えず訪れておったもので。……いや、だいぶ以前のことじゃ。あなたもまだ、お若かった」
と、佐渡の追懐が、なつかしい思い出として語られるし、幸村も、
「あの頃はよく、暴れ者が、角を撓めるために、愚堂和尚の室にあつまりましたなあ。和尚も亦、諸侯と牢人、長者と若輩のさべつなく、相手になってくだされた」
「わけて世の牢人と、若い者を愛された。――和尚がよくいった事でお座った。――浮浪の徒

は、あれは浪人じゃ。真の牢人とは、心に牢愁のなやみを抱き、意志の牢固な節操をもった者じゃ。……真の牢人は名利を求めず、権に媚びず、世に臨んでは、政治を私に曲げず、義にのぞんでは私心なく、白雲のごとく身は縹渺、雨のごとく行動は急、そして貧に自楽することを知って、的を得ざるも不平を病まずなどと……」

「よう御記憶ですな」

「だが、そうした真の牢人は、蒼海の珠のように少ないともよく嘆かれておった。しかし又、かつての史を閲すれば、国難の大事に当って、私心なく、身を救国の捨て草にした無名の牢人は、どれほどあるか知れぬ。じゃに依って、この国の土中には、無数の名なき牢人の白骨が、国柱となっておるが……さて、今の牢人は如何に、などとも仰っしゃった」

佐渡は、語りながら、幸村の顔を、敢て直視した。だが幸村はその眼を感じないもののように、

「左様。そのおはなしでふと思い出しましたが、あの頃、愚堂和尚の膝下にいたひとりで、作州牢人の宮本なにがしという年少の者がおりましたが、御老台には、御記憶はございませぬか」

五

「作州牢人の宮本といえば？　……」

と佐渡は、幸村の訊ねを、そのままつぶやき返して、

「武蔵の事じゃないかな」

「そうそう。宮本武蔵。――武蔵と申しました」

「それがどうしたので」
「当時まだ二十歳に満たない年少でしたがどこか重厚な風があり、いつも垢汚れた服装して愚堂和尚の禅室の端に来ておりましたが」
「ほ。あの武蔵がの」
「では、お覚えでございましたかな」
「いや、いや」
佐渡は、かぶりを振って、
「てまえが心に止めたのは、つい近年で——それも江戸在府中のこと」
「江戸におりますか今は」
「実は、御主命もあって、それとなく尋ねてはおるが、どうも居所が知れぬのでお座る」
「あれは見所がある。あれの禅は物になろうと、愚堂和尚が申された事があるので、それとなく、私も見ておりましたが、そのうち忽然と去ってから幾年もなく——一乗寺下り松の試合に、彼の名を、うわさに伝え聞き、やはり和尚のお眼はたしかなものと、思い合せていましたが」
「てまえは又、そういう武名とは異なって、江戸在府のころ、下総の法典ケ原と申す土地で、土民を育成し、荒蕪の地を開墾しておるめずらしい心がけの牢人があると耳にして、会ってみたいと、探してみたところ、もう土地におらぬ。——それが後で聞けば、宮本武蔵という者と聞き、いまだに心に留めているのでお座る」
「何せい、私の知るうちでは、あの漢などが、和尚の申す、真の牢人。いわゆる蒼海の珠だったかもしれませぬ」

「主殿も、そう思われるか」
「愚堂和尚のお噂に、ふと思い起したのですが、どこか心の隅に残るだけのものはある漢でしょう」
「実はその後、手前から主君忠利公に御推挙はしてあるのじゃが、蒼海の珠はなかなか会い難うて」
「武蔵なら、私も、御推挙申してもよいと思いまする」
「――とはいえ、そういう人物となると、仕官の先にも、ただ禄ばかりでなく、自身の目ざす働きばえに、望みを抱いているにちがいない。――案外、細川家よりの迎えよりも、九度山からのお迎えを、待っておろうも知れませぬぞ」
「え？」
「はははは」
佐渡はすぐ笑い消した。
だが今、不用意のうちに、幸村へいった佐渡のことばは、必ずしも、不用意な言とはいえない。
悪くいえば主の肚をさぐろうとして鋭鋒の先を、ちらと見せたものと取れる。
「……お戯れを」
と、幸村も、笑い顔だけでは反らしかねて、
「なかなか、若党ひとり、今では召抱えられる身ではなし――何で名だたる牢人衆などを、九度山へ迎え取りましょうぞ。もっとも、先でも来もいたしますまいが」

言い訳に落ちるとは知りながら、ついいい足してしまったのである。佐渡は、この機と、
「いやいや、お包みあるな。関ケ原の合戦に、細川家は東軍に御加勢、徳川方と旗幟はすでに鮮明でお座るし——又、其許におかれては、故太閤さまの遺孤秀頼君が、唯一の味方とお頼みの人とは世上にかくれもないことよ。……最前もふと、床のお懸物を拝すにつけ、ふだんのお心がけも床しゅう覚えていましたわえ」
と、壁の秀頼の書を顧みながら、戦場は戦場、ここはここと、胸をひらいていったのであった。

六

「そう仰っしゃられると、この幸村、穴にも入りたい心地がいたす」
と彼は、佐渡のことばを、思いのほか迷惑そうな態で、
「秀頼公のその御書は、太閤さまの御影と思えとて、大坂城のあるお方より、わざわざ下された物とて、粗末にもならず、懸げてはおきまするが……すでに太閤さまも亡き今日では」
と、さし俯向いたまましばし声をのんで又、
「——遷りゆく世はぜひもござらぬ。大坂の御運がどうなるか。関東の勢威がどこまでゆくか。賢者でのうても、今は誰の目にも見えて来た時勢。——というて、遽かに節を曲げて、二君に仕えもならず——というのが幸村のあわれな末路。おわらい下されい」
「いや、御自身でそういわれても、世間は承知いたしますまい。あけすけに申そうなら、淀殿や秀頼君より、年々莫大なお手当もひそかに貢がれ、この九度山を中心に、其許が手ひとつ挙げれ

ば、五千六千の牢人は物の具とってすぐ馳せあつまるだけの手飼の衆もあるとやら——」
「ははは、根もないことを……。佐渡どの、人間、自分以上に、自分を買われている程、辛いものはございませぬ」
「じゃが、世間のそう思う方がむりもない。お若い頃から、太閤さまにも、側近くおかれて、人一倍お目をかけられた其許。その御恩顧やら又、真田昌幸が次男幸村こそは当代の楠か孔明かと、嘱目されておられるだけに」
「おやめ下さい。そう聞くほど身が縮みまする」
「では、誤聞かな？」
「願わくは法の御山のふもとに余生の骨を埋め、風流は身にないことながら、せめては田でも殖やし、子の孫を見、秋は新蕎麦、春は若菜のひたし物を膳にのせ、血ぐさい修羅ばなしや戦のことは松吹く風と聞いて長命をしとう存じまする」
「はて。御本心で」
「近ごろ、老荘の書物など、暇にあかして読みかじるにつけても、この世は、楽しんでこそ人生。楽しまずして何の人生ぞや、などと悟りめかしておりまする。……お蔑みではあろうなれど」
「……ほほう」
真にはうけないが、佐渡は真にうけた顔して、わざと呆れ顔をつくって見せる。
——かかるうちもう半刻。
主客の間には、幾たびか茶がつぎ代えられ、そのたび大助の嫁らしい女性が見えて、何くれと

はなく気をくばって退がってゆく。
　佐渡は、菓子台の麦落雁をひとつ摘んで、
「だいぶ、いらざるお喋べりをして、おもてなしにあずかった。……縫殿介、ぼつぼつお暇しようか」
　板縁を顧みていうと、
「あいや、もうしばらく」
　と、幸村はひきとめた。
「――嫁とせがれどもが、あちらで今、蕎麦など打って、何やら支度しておるそうな。山家とて、ろくなおかまいも成りませぬが、まだ陽は高いし、学文路へお泊りとすれば御悠りでよい筈。まず、暫時は」
　そこへ大助が、
「父上。どうぞお越しを」
「できたのか」
「はい」
「座敷も」
「あちらへ設えておきました」
「そうか。では……」
　と、客を促して、幸村は、縁づたいに、先へ立った。
　せっかくの好意、佐渡もこころよく後について行ったが、その時ふと、不審な物音を、裏の竹

林の彼方に聞いた。

七

その音は、機を織る音かとも思えたが、機よりも大きな音で、調子もちがう。
竹林を前にした裏座敷に、主人と客に供える蕎麦が出ていた。
酒の瓶子も添えてある。
「不出来でございまするが」
大助がいって、箸をすすめる。まだ人馴れない嫁が、
「おひとつ」
と、瓶子を向ける。
「酒は」
と、佐渡は杯を伏せて、
「こちらがよい」
と、蕎麦に向う。
強いてはすすめず、大助も嫁もほどよく退がる。——その間も、竹林の彼方から、機に似た音がしきりに耳につくので、佐渡は、
「あれは何の物音で」
と、訊ねた。
幸村は、客にきかれて、客の耳ざわりになっている事を、初めて気づいたように、

「お。あの音でおざるか。あれはお恥かしいが、生活の援けに、家族どもや子飼いの召使どもにやらせておる組紐打ちの細工場で、紐打ちの木車を掛けている音でござります。……自分たちは、職業でもあり、朝夕耳に馴れていますが、お客には、おうるさかろう。……早速、申し遣わして、木車の機を、止めさせましょう」

手をたたいて、大助の嫁をよびかける容子に、

「いや、それには及ばぬ事。お職所の邪げしては、かえって居辛うおざる。平に、平に」

と、佐渡は止めた。

ここの裏座敷は、母屋の家族たちがいる所に間近いとみえて、出入りの者の声や、厨の音や、どこかで銭をかぞえる音や――前の離室とはだいぶ空気がちがっている。

（はて？……。こうもしなければ食えないほどな境遇だろうか）

佐渡は怪訝ったが、まったく大坂城からの貢がないとすれば、落魄れた大名の末路はこうもあろうかと思わぬでもない。家族が多い、農事には馴れない、ある限りの品は、売喰いしていつかは尽きてしまう。

あれこれ、思いすぎたり、惑ったりしながら、佐渡は、蕎麦をすすった。だが蕎麦の味から、幸村の人間を、噛みわけることはできなかった。総じて、

（漠とした漢――）

という感じであった。十年ほど前、愚堂和尚の膝下で知った頃の印象とは、どこか勝手がちがっていた。

しかし、こっちで独り角力を取っているまに、幸村は、自分を通して、細川家の意志なり、近

状なりを、雑談の端からでも、嗅ぎ取っているかも知れない。
——探りがましい事は、彼の口からは、塵ほども、訊かれていないが。
訊かないといえば、第一、自分が何の用務を帯びて、高野山へ来たのか。——それすら幸村は訊ねようとはしない。
佐渡の登山は、元より主命なのである。故人の細川幽斎公は、太閤在世中にも、侍して青巌寺へ来たことがあるし、山上に長くいて、歌書の著述などを書いていた一夏もあるので、青巌寺にはその折のままになっている幽斎公の直筆の書物や文房の遺物やらが何かと置いてある。その整理と、受取の打合せに、ことし三年の忌会を前に、豊前の小倉からわざと身軽で来たわけだった。
——そんな事も、幸村は糺そうともしない。迎えの大助がいったとおり、門前を通りすがりの客へ茶一つの饗応をするのが、裏も表もない彼の真意であり又、好意としか思えなかった。

八

供の縫殿介は、先程から縁端に畏まったままでいたが、奥へ通された主人の身が、不安でならなかった。
いくら表面は歓待しているようでも、ここは、敵方の家である。徳川家にとっては、油断のならない大物として、注意人物の第一に視ている人間の家。
紀州の領主浅野長晟は、そのために徳川家から特に九度山の監視をいいつけられているとも聞えている。相手が大物だし、つかみようのない幸村という人物なので、手古摺っているという

わざも予々聞くところだし、
「……よいほどに、お帰りなさればよいのに」
と、縫殿介は、気を揉むのだった。
この家にどんな詭計がないとも限らないし、又そんな事はないとしても目付役の浅野家から、徳川の方へ、細川家の藩老が微行の途次に立寄ったと報告されるだけでも徳川の心証を悪くしよう。
関東と大坂のあいだは、事実、それほど険悪なのである。そんな事にお気づきなさらぬ佐渡様でもないのに。
――などと縫殿介は、奥のほうばかり窺って、案じていたが、ふと、縁の傍らの連翹や山吹の花が、ゆさと大きく揺れたかと思うと、いつか墨をながしていた空から、板廂をかすめて、ポツリと雨が落ちて来た。
彼はふと、
「よい機――」
と、思いついて、縁を下り、佐渡が饗応されている部屋の方へ庭づたいに歩み、そこから、
「雨が来そうでございます。御主人様、お立ちなれば、今のうちにと存じますが」
声をかけると、先刻から話にとらわれて起ちかねていた佐渡は、心きさたる奴と、直ぐ応じて、
「や、縫か。……何、降って参ったと。今のうちなら濡れもしまい。どれどれ、早速お暇しよう」

幸村へあいさつして、気短に立ちかけると、幸村も、せめて一夜はお泊りをとある所だったが、主従の気もちを察してか、強いてともいわず、大助と嫁を呼んで、
「お客に、蓑をさしあげい。そして大助は、学文路までお送り申しあげて——」
といいつけた。
「はい」
大助は、蓑を持ってくる。それを借りうけて、佐渡は、門を辞した。
迅い足の雲が千丈ケ谷のふところや、高野の峰々から空を翔けてくるが、雨はさしたる事もない。
「ご機嫌よう」
幸村とその家族たちは、門の辺りまで、客を送っていった。
佐渡も、いんぎんに礼を返し、そして幸村へは、
「いずれ又、雨の日か、風の日か、お日もじいたす日もお座ろう。ご健勝に——」
と、いった。
幸村は、ニコとうなずいた。
やがて又。
やがて又。
お互いに馬上長槍の姿を、その時ふと描いて胸につぶやき合ったであろう。だが、塀ごしの杏の花は、しとどに散って、送る主と、去る客の蓑を、惜しむ行春の斑にしらじらと彩った。
大助は、送って行きながら、その途々、

「さしたる降りはありませぬ。晩春の空癖で、山には一日一度ずつ、きっとこんな疾風雲が通るのです」
と、いった。
だが雲脚に追われて、おのずと足も急いで来ると、やがて学文路の宿の入口あたりで、彼方から駈けて来る一駄の馬と、白衣の山伏に行きあたった。

九

荷駄の背には荒菰を蔽いかけてある。そしてがんじがらみにした男の体を鞍の上にくくしつけ、両側から柴の薪束を抱き合せてある。
山伏は、先に駈け、旅商人ていの男が二人、ひとりが手綱を持ち、ひとりは細竹を持って、馬の尻を打ちたたきながら、急ぎに急いで来たのだった。
――と。その出合いがしら。
大助のほうは、はっと眼を反らし、わざと連れの長岡佐渡へ、何か話しかけたが、その眼に気づかず、山伏のほうは、
「おうっ、大助様っ」
と、弾み声で、呼びかけた。
にも関わらず、大助はなお、聞えぬふりをしていたが、佐渡と縫殿介とは、異な顔をして、すぐ足を止め、
「大助どの、誰か呼んでおりますぞ」

と教えつつもそれへ眼を注ぐ。

ぜひなく、彼は、

「おお、林鐘坊どの。何処へ」

さりげなくいい寄ると、山伏は、

「紀見峠からいっさんに――これから山のお屋敷へ直ぐ参ろうと思って」

と、声高に立話をし始め、

「先頃、知らせを受けていた怪しげな関東者を、奈良で見つけ、やっと紀見の上で、生擒ったのでござる。人なみ優れて、面だましいの剛気なやつ、月叟様の前にひきすえて、泥を吐かせたなら、関東方の反間の機密などが、或はこの者の口から……」

黙っていれば、問わぬ事まで、立板に水のような調子で誇り顔に喋舌り出すので、大助も遂に、

「これこれ、林鐘御坊、何をいうのか。わしにはいっこう分らぬが」

「ご覧じませ。馬の背を。――その馬の背に引ッ縛ってある奴こそ、関東者の隠密で」

「ええ。ばかな」

堪らなくなって、もう眼や顔つきでは、間に合わなくなったように、大助は一喝した。

「往来ばたで――しかも、わしのお供いたしておるお客を誰ぞと思う。――豊前小倉の細川家の御老臣、長岡佐渡様。滅多なことを……いや戯れも、ほどにいたしたがよい」

「えっ？」

林鐘坊は、はじめて、眼をべつな方へ遣った。

佐渡と、縫殿介とは、耳のないような顔して、彼方此方、眺めていたが、その間も、迅い雲脚は頭のうえを越えて行き、雨まじりの風の落ちて来るたび、佐渡の着ている蓑は、鷺の毛のように、風に膨んだ。

——あれが細川家の？

と、林鐘坊は、口をつぐむと、さも意外らしく愕きと怪しみを湛えた横目づかいで見ていたが、

「……どうして？」

と小声で、そっと大助へ、訊ねていた。

ふた言三言。何か囁いて、大助はすぐこっちへ戻って来たが、それを機に長岡佐渡は、

「もうここで、お引取りくだされい。これ以上は、かえって恐縮」

と、強いて大助と袂をわかち、会釈もそこそこ立ち去った。

大助は、是非なげに、なお佇んだまま見送っていたが、その眼を荷駄馬と山伏のほうへ返すと、

「迂濶な」

と、たしなめて、

「場所がら、人がら、よう眼をあいて、物はいうものぞ。お父上のお耳へでもはいったら、ただ事には措かれまいぞ」

「はっ。……よもやと存じて」

山伏は面目なげに謝った。あれよ真田の郎党鳥海弁蔵と、この辺では知らぬ者もなかったが。

港

一

（――おらは、気が狂ったのかな？）

伊織はときどき、そんな恐怖に襲われた。水溜りを見ると、自分の顔を映して、

（顔はわかる）

と、いくらか心を安めた。

きのうから歩いている。――どう歩いているのか、見当もつかない。

あの断層の底を這い上がってからずっとの事なのだ。

「来いっ」

発作的に、いきなり空へ向って、呶鳴ったり、

「畜生ッ」

と、地を睨んで、その気力が抜けると、肱を曲げて、涙を拭いたりした。

「――おじさアん」

権之助を呼んでみる。

やはりこの世にはもういないのだと思う。謀られて殺されたのだと考える。あの附近に散らば

っていた権之助の遺品を見てから、伊織はそう思いこんでしまった。

「……おじさアん。おじさーん」

多感な少年のたましいは、むだと知りながらも、呼ばずにいられなかった。きのうから歩きつづけている足のつかれも知らない。その足にも、耳の辺へも、手にも血がついている。着物が裂けている。しかし、何も顧みようとしない。

「どこだろ？」

ときどき、われに返る時は、胃の腑から空腹を訴えられる時だった。何かは喰べていたが、何を喰べて来たか、よく覚えないのである。

おとといの晩泊った金剛寺へなり、或は、その前の柳生ノ庄なりを思い出せば、歩む目的もつくわけだが、伊織の頭には、断層以前の記憶は、まだ何もよみがえって来ないらしい。

漠として、

(生きている――)

身を感じ、急に独りぼッちになった身の、生きる道を、探り歩いている形だった。

パタパタと虹のように眼を遮った物がある。雉子だった。山藤の香りがする。伊織は坐りこんで、

(何処だろ？)

もいちど、考えた。

ふと彼は縋るものを見つけた。大日様の微笑である。大日様は、雲の彼方にも、峰にも谷にも、何処にでもいるものと彼には思われたので、山芝の上にぺたんと坐ると、

（わたしの行く先を教えてください――）
と、掌を合せた。
眼をつぶっていた。
そしてしばらくして、顔を上げると、山と山のあいだに、遠く海が見えた。薄ッすらと、碧い靄のように見えた。
「……坊んち」
さっきから彼の背後に立って怪訝しげに眺めていた婦人がある。娘と母であろう、二人とも軽い旅装いはしているが身綺麗にして、男の供も連れていない様子。近国に住む良家の者の、神詣でか仏参か。徒然の春の旅か。そんなふうに見うけられる。
「……何？」
伊織は、振向いて、御寮人と娘の顔をじっと見た。まだどこか、眼がうつろなのだった。
娘は、母を見――
「どうしたんでしょう？」
と、ささやいている。
御寮人は、首をかしげていたが、伊織のそばへ寄って来て、手や顔の血に、眉をひそめながら、
「痛くないのかえ」
と、訊いた。
伊織が、顔を横にふると、御寮人は娘のほうを顧みて、

「分ることは、分るらしいよ」

二

どっちから来たのかえ。
生れは何処。
名は何というのか。
そして一体、こんな所に坐って、何を拝んでいるのか――などと御寮人とその娘に訊ねられて、伊織はようやく、われとわが身を取り戻し、平常の彼にも近くなった容子で、
「はい、紀見の峠で、連れの者が殺されました。そしておらは、山の割れ目から這い上がって、昨日からどっちへ行こうかと迷ってしまい、思い出して大日様を拝んでたら彼方に海が見えて来た――」
初めは、不気味がっていた娘のほうも、伊織の話を聞くと、かえって母らしい御寮人以上に、同情をよせ、
「まあ、可哀そうな子。おっ母さん、堺まで連れて行ってやりましょうよ。もしかしたら、ちょうど年頃だし、お店で使ってやってもいいじゃありませんか」
「それはいいけれど、この子が来るかしらね」
「来るだろ。……ねえ?」
伊織が、うんというと、
「じゃあお出で。その代りこのお荷物を持ってくれるかえ」

「……うん」

まだどこか、肌馴れない気がするとみえ、連れになって歩いても当分のうち伊織は何をいわれてもただ、うんとのみしかいわなかった。

だが、それも長いあいだではない。山を降り、村の道が尽きると、やがて岸和田の町へついた。さっき、伊織が山から見た海は、和泉の浦であったのだ。人間の多い町中を歩くうち、伊織は、母娘の連れにも馴れて、

「おばさん、おばさん家は何処だえ」

「堺だよ」

「堺って、この辺」

「いいえ、大坂の近く」

「大坂はどの辺」

「岸和田から、船に乗って帰るんですよ」

「え。船に？」

これは伊織に取って、思いがけない歓びらしかった。その歓びにはしゃいで、問わず語りに彼が喋舌るには――江戸から大和まで来る間、川の渡船に幾たびも乗ったが、海の船にはまだ乗ったことがない。おらの生れた下総には海はあるけれど船には乗ったことがない。――それに乗れるんならほんとに欣しいなあ。と他愛もなくいいつづける。

「伊織や」

と、娘はもう名を覚えて、

「おばさん、おばさんって、呼ぶのは、おかしいから、お母さんの事は、御寮人さまとお呼び。わたしの事は、お嬢さんと呼ぶんですよ。——今から癖をつけておかないといけないからね」
「うん」
と、うなずくと、
「うん……もおかしいよ。うんなんて返辞はありませんよ。はいと仰っしゃい。これからは」
「はい」
「そうそう、お前なかなか良い子だね。お店で辛抱してよく働けば、手代に取立てて上げますよ」
「おばさん家は……あ、そうじゃない、御寮人さまの家は、いったい何屋なの」
「堺の廻船問屋さ」
「廻船問屋って」
「おまえには、分るまいが、船をたくさん持って、中国、四国、九州のお大名方の御用をしたり、荷物を積んで、港々に寄ったりする……商人なのさ」
「なアんだ。——商人か」
伊織は急に、御寮人さまやお嬢様を、下に見るように呟いた。

三

「なアんだ、商人かって？　——。まあこの子は、生意気な口をきいて！」
と娘は、母と顔を見あわせ、そして拾ってやったつもりでいる伊織の小さい体を、少し小憎ら

しいように見直した。
「ホ、ホ、ホ、ホ、商人といえば餅売りか、そこらの呉服商が、精々みたいに考えているからだよ」
御寮人は、聞き流して、むしろ愛嬌に取っていたが、娘は、堺商人の誇りをもって、一応いって措かなければ気がすまないような容子――
その自慢ばなしに依ると。
廻船問屋の店は、堺の唐人町の海岸にあって、三戸前の蔵と、何十艘の持船がある。
また店は、堺のみでなく、長門の赤間ケ関にもあるし、讃岐の丸亀にも、山陽の飾磨の港にも出店がある。
わけて小倉の細川家からは、特に藩の御用も仰せつかっているので、御船手印もゆるされ、苗字帯刀もいただいて、赤間ケ関の小林太郎左衛門といえば、中国九州きって知らない者はない。
等々、ならべたてて、
「商人といってもお前、ぴんからきりまであるよ。廻船問屋というものは、いざ天下の大戦とでもなってごらん。薩摩様でも細川様でも、藩の御手船だけでは足りはしない。だからふだんは凡の問屋でも、いざとなれば、御合戦の一役をするのですからね」
と、その小林太郎左衛門の娘であるお鶴は、口惜しがって、頻りと説く。
御寮人は、お鶴の母であり、太郎左衛門の妻でもあって、名はお勢様という――事なども、やがて伊織に分って、伊織もすこしいい過ぎたと思ったか、
「お嬢さん。怒ったの」

と、機げんをうかがう。
お鶴も、お勢も、笑ってしまいながら、
「怒りはしないけれども、おまえみたいな井の中の蛙の子が、あまり小癪な口を、きくからですよ」
「すみません」
「お店には、手代だの若い者だの、それから船がつくと、水夫や軽子がたくさんに出入りするから、生意気なことをいうと、懲らしめられますよ」
「はい」
「ホホホホ。生意気かと思うと、素直なところもあるね、おまえは」
と、よい玩具にして扱う。
町を曲がると、海のにおいが直に面に打って来た。岸和田の船着場である。この地方の産物を積んだ五百石船がそこについていた。
お鶴は、指さして、
「あれへ乗って帰るんだよ」
と、伊織へ教え、
「あの船だって、うちの持船なんだからね」
と、誇る。
そこらの磯茶屋から、その時彼女たちの姿を見かけて、駈けて来る三、四人があった。船頭や小林屋の手代らしく、

「お帰りなさいまし」
「お待ちしておりました」
と、挙って出迎え、
「生憎と積荷が沢山で、お席も広く取れませんが、彼方へ支度もして置きましたから直ぐにどうぞ」
先に立って、船の内へ導いて行ったが、見れば、艫寄りの一劃に幕をめぐらし、緋毛氈をしき、桃山蒔絵の銚子だの、料理のお重だの、水の上とも思われない、豪奢な小座敷が拵えてある。

四

船は滞りなく、その晩、堺の浦につき、小林の御寮人とお鶴様とは、船が着いた川尻のすぐ向いにある大きな間口の軒へ、
「お帰りなさいませ」
「ようお早く」
「きょうは又、お日和もよくて」
などと老番頭から、若い者にいたるまで、出迎える中を、奥へ通りながら、
「そうそう、お帳場どん」
と、店と奥の中仕切で、御寮人は、老番頭の佐兵衛を顧みていった。
「そこへ立っている子だが」

「へいへい。お連れになった汚い童でございますか」
「岸和田へ出る途中で拾って来た子なんだけれど、気転がききそうだからお店で使ってみてごらん」
「道理で、変な者が、くッついて来たと思いましたら、道で拾っておいでになったんで？」
「しらみでもたかっているといけないから、誰かの、着物をやって、一度、井戸端で水をかぶせてから寝かしてやっておくれ」
中仕切の内緒暖簾から先は、ちょうど武家の奥向と表のような区別があって、番頭でもゆるしがなければ這入れない。いわんや拾われて来た風来の子に過ぎない伊織に於いては、その晩から、店の片隅に置かれたのみで、御寮人とお鶴様の顔を見ることも、それきり幾日もなく日は経った。
「いやな家だな」
助けられた恩よりも、伊織には商家のしきたりが、事々に窮屈だし、不満だった。
丁稚丁稚と、ひとを呼ぶ。
あれをしろ、これをしろ。
若い者から老番頭まで、犬ころのように追い使う。
それらの人間が又、奥の者とかお店のお客とかいうと、額がつかえる程、頭ばかりぺこぺこ下げる。
そういう大人達は又、明けても暮れても、金々々と、金のことばかりいってるし、仕事仕事と、人間のくせに仕事にばかり追われている。

「いやだ、逃げ出そうか」
伊織は、何度も思った。
青空が恋しい。土に寝た日の草のにおいが懐かしい。

五

いやだ。逃げ出そうか。
そう考える日は、伊織の胸に、武蔵のはなしや、心を磨く道の語らいをしてくれた、師の武蔵の姿や、別れた権之助の事が、ひしひし慕われていた。
そして、自分の実の姉と聞きながら、まだ行き会えぬお通の面影だのが——
けれど。
そう思い募る日もあり、夜もありつつも、少年の一面には、この泉州堺という港場のもつ絢爛な文化だの、異国的な街だの、船舶の彩だの、そこに住む人たちの豪奢な生活だのにも、ただならぬ目をみはって、
（こんな世界もあるのか）と、心から驚いた。
また、憧憬や、夢や、意欲をも抱いて、いつとはなく日を送っていた。
「おいっ、伊お！」
帳場で、老番頭の佐兵衛がよんでいた。伊織は、広い土間と、納屋蔵の露地を掃いていた。
「伊お！」
返辞をしないので佐兵衛は帳場から立って来て、欅の角材が、漆で塗ったように黒くなってい

る店先の框まで出て来て、呶鳴りつけた。
「新参の丁稚っ。呼んでるのになぜ来ないのか」
伊織は、振向いて、
「は。おらか」
「おらという奴があるかっ。わたくしといえ」
「はあ」
「はあじゃない。へいというのだ。腰をひくく」
「へーい」
「おまえ、耳がないのか」
「耳はある」
「なぜ、返辞しない」
「だって、伊お伊おと呼ぶから、自分の事じゃないと思ったんだ。おらは——わたくしは、伊織という名ですから」
「伊織なんて、丁稚の名らしくないから、伊おでいい」
「そうですか」
「こないだも、あれほどわしが禁じておいたのに、又、変な物を持ちだして、腰に差しているな。……その薪ざッぽうのような刀を」
「へい」
「そんな物、差してはいけないぞ。商家の小僧が、刀など差すなんて。——ばかっ」

「…………」
「こっちへ出せ」
「…………」
「何をふくれている」
「これは、お父っさんの遺物(かたみ)だから、離せません」
「こいつめ。よこせというのに」
「わたしは、商人(あきんど)なんかに、成れなくてもいいから」
「商人なんか――だと。これ、商人がなかったら、世の中は立ちはしないぞ。信長公がお偉いの、太閤様がどうだのといっても、もし商人がなかったら、聚楽(じゅらく)も桃山も、築けはしない。異国からいろんな物もはいりはしない。わけても堺商人はな、南蛮、呂宋(ルソン)、福州、厦門(アモイ)。大きな肚で商(あきな)いをしているのだ」
「わかってます」
「どう分ってる」
「――町を見ますと綾町、絹町、錦町などには、大きな織屋(はたや)がありますし、高台には、呂宋屋のお城みたいな別室があるし、浜には、納屋衆(なやしゅう)というお大尽のやしきや蔵がならんでいます。――それを思うと、奥の御寮人さまやお鶴様が、自慢たらたらのここのお店も、物の数でもありません」
「この野郎」
佐兵衛は、土間へ、跳んで降りた。伊織は箒(ほうき)を捨てて、逃げ出した。

六

「若い衆っ。その丁稚をつかまえろ。つかまえてくれっ」
佐兵衛は、軒から呶鳴った。
河岸で荷揚の軽子をさしずしていた店の者たちが、
「あ。伊お公だな」
追っ取りまいて、すぐ伊織を捉え、店の前へ引きずって来た。
「手におえん奴じゃ。悪たいはいうし、わし達を小馬鹿にはするし。きょうはうんと、懲らしてやってくれ」
と、いいつけた。
佐兵衛は、足を拭いて、帳場へ坐ったが、又すぐ、
「それから、伊おが差しているその薪ざッぽうを、こっちへ奪り上げておきなさい」
店の若い衆たちは、伊織の腰からまず刀を取上げた。それから後ろ手に縛って、店先に幾山も積んである荷梱の一つへ、飼猿みたいに縛しつけ、
「少し人様に笑われろ」
と笑いながら、立去った。
恥は、伊織がもっとも尊ぶところだし、武蔵からも、権之助からも恥を知れとは、常々聞かされていた事である。
——恥曝しだ。

と自分を思うと、伊織は、少年の烈しい血を狂的にたかぶらせて、
「解いてくれっ」
と、さけび、
「もう為ない」
と、謝り、それでも許されないと、今度は悪たいに代って、
「ばか番頭。くそ番頭。こんな家なんかにいてやらないから、縄を解けっ。刀を返せ」
と、喚いた。
佐兵衛は又、降りて来て、
「やかましい」
と、伊織の口へ、布をまるめて押しこんだ。伊織が、その指へ嚙みついたので、佐兵衛は又、若い者を呼びたてて、
「口を縛ってしまえ」
と、いった。
もう何も呼べなかった。
往来の者が皆、見て通る。
わけてこの川尻と、唐人町の河岸すじは、便船に乗る旅客だの、商人の荷駄だの、物売り女だのと、往来が繁しかった。
「……く。く。……くっ」
猿ぐつわの口のなかで、伊織は声をもらしていた。そして身をもがき、首をふり、やがては、

ぼろぼろ泣いている。
その側で、荷を積んだ馬が、とうとう尿をしていた。尿の泡が、伊織のほうにながれて来る。
刀も差さない、生意気もいわないから、もう縛めだけ解いてもらいたい、と伊織は心から思ったが、その訴えも叫べない。
——すると。
もう真夏に近い炎天を、市女笠に陽を除けながら、細竹を杖に、麻の旅衣を裾短にくくりあげて——ふと、荷馬の向う側を通り抜けた女性がある。
(……あっ。おやっ?)
伊織の眼は飛びつきそうに、その人の白い横顔へ耀いた。
どきん! と胸が鳴って、体じゅうがくわっと熱くなって、気もみだれてしまいかけた刹那に、その人の白い横顔は、わき目もせず、店の前を過ぎて、後ろ姿になってしまった。
「ね、ねえ様だっ。——姉様のお通さんだっ……」
首を伸ばして、伊織は、絶叫した。いや、彼だけは、絶叫をもって、その人の背後へ呼びかけたつもりであろうが、声は誰にも、聞えてはいなかった。

七

泣きぬいた後は、声も出ない。ただ肩で嗚咽しているきりだった。
伊織は、喚けど声も出ない猿ぐつわを、涙でぬらしながら、

――今行ったのは、姉さんのお通さまに違いない！
――会えたのに。会えもしない。おらがここにいるのも、知らずに行ってしまった。
――何処へ。どっちへ？
と、思いみだれ、胸の中で、泣き躁いでいたが、誰ひとり顧みる者もない。
店頭は、荷揚げの船がついて、いよいよ混雑して来るし、午さがりの往来は、暑いのと埃で、人の足も早かった。
「おいおい。佐兵衛どん。何だってこの丁稚を、熊の子の見世物みたいに、こんな所へ縛っておくのだ。無慈悲な人づかいするようで、見ッともないじゃないか」
主人の小林太郎左衛門は堺の店にはいなかったが、その従兄弟とかいう南蛮屋の某――黒あばたがあって怖らしい顔をしているが、いつも遊びに来ると、伊織に、菓子などくれる気のいい人物があって――その南蛮屋が、怒っていった。
「こんな往来先へ、こんな小さい者を、いくら懲らしめにせよ、小林の外聞にもさわる。はやく解いてやんなさい」
帳場の佐兵衛は、伊織が、箸にも、棒にもかからない事を、
「はい。はい」
と、服従しながらも、一方でくどくど告げ口していたが、南蛮屋は、
「そんな持て余す小僧なら、わしの家へもらって帰るよ。きょうは一つ、御寮人やお鶴にも、話してみよう」
と、耳にもかけず、奥へ通ってしまった。御寮人に聞えてはと、佐兵衛はひどく惧れていた。

そのせいか、遽に伊織へ当りがよくなったが、伊織の泣きじゃくりは、縛めを解かれても、小半日は止まなかった。

大戸が卸りて——

店も閉まった黄昏頃。南蛮屋は、奥で馳走になったらしく、微酔をおびて、いい機げんで帰りかけたが、ふと伊織を土間の隅に見つけて、

「わしがお前を、貰ってゆこうと、掛合ったところがな、御寮人もお鶴も、何といっても、いやだという。やはり可愛いのだよ。だから辛抱せい。……その代りにな、明日からはもう、あんな目には、会わしゃあせんで。……よいか、おい、大将。ははは」

彼のあたまを撫でて、そういって、帰ってしまった。

嘘ではなかった。南蛮屋がいってくれた効き目であろう。その翌日から、伊織は店から近所の寺子屋へ通って勉強することを許された。

又、寺子屋へ通う間だけ、刀を差すことも、奥からの言葉で、免許になった。——佐兵衛もほかの者も、それからは余り辛く当らない。

だが。だが。

伊織はそれ以来、どうも眼ざしが落着いていなかった。店にいても、往来ばかり見ているのだ。

そしてふと、心にある人の面影に似ているらしい女性でも通ると、はっと、顔のいろまで変えるのだった。時には、往来まで飛び出して、見送っていたりする——

それは八月も過ぎて、九月の初めだった。

寺子屋から帰って来た伊織は、何気なく、店さきへ立つと同時に、

「おやっ？」

と、そこへ竦(すく)んでしまった。その時も、彼の顔いろは、凡(ただ)ならず変っていた。

熱　湯

一

ちょうどその日は。

朝から小林太郎左衛門の店と河岸の前には、おびただしい行旅の荷物やら梱(こうり)やらが、淀川から廻送され、それを又、門司ヶ関へ行く便船に積みこむので、ひどく混雑していた。

荷物には、どれにも、

豊前(ぶぜん)細川家内某。

とか或は、

豊前小倉藩何組。

とかいう木札が見られて、そのほとんどが、細川家の家士の行李(こうり)なのであった。

――ところへ今、伊織が外から戻って来て、軒先に立つと共に、あっ？　といって血相を変えた、というわけは、広い大上間から軒先の床几(しょうぎ)にまで溢れて、麦湯を飲んだり、扇づかいしたり

している大勢の旅装の武士たちのなかに、佐々木小次郎の顔がちらと見えたからであった。

「店の者」

と小次郎は、梱の一つに腰かけて、帳場の佐兵衛をふり顧りながら、扇を胸にうごかしていた。

「船が出るまで、ここに待っておるのでは、暑うてかなわぬが——便船はまだ着いていないのか」

「いえ、いえ」

と、送り状に忙しい筆をうごかしていた佐兵衛は、帳場ごしに川尻を指して、

「お召しになる巽丸は、あれに着いておりますが、積荷よりは、お客様方のお越しのほうが、滅相おはやく見えられましたので、船方衆にいいつけて、ただ今あわててお坐り場所を先に整えさせておりますので」

「同じ待つにも、水の上はいくらか涼しかろう。はやく船へ行って休息したいものだが」

「はいはい。もういちど手前が行って、急がせて参りましょう。しばらく、御辛抱を」

佐兵衛は汗をふく暇もない顔つきして、すぐ土間から往来へ駈け出したが、そこの物陰に佇んでいた伊織のすがたを横目で見ると、

「伊おじゃないか。この忙しいのに、棒を呑んだように、そんな所に突っ立っている奴があるか。お客様たちへ、麦湯でも上げたり、冷たい水でも汲んで来てさしあげろ」

と叱り捨てて行った。

「へい」

と、答える振りはしたが、伊織はついとそこから駈けて、土蔵のわきの露地口にある湯沸し場の陰へ来て又、佇んでいた。
そして眼は——大土間の中にいる佐々木小次郎の姿から放ちもやらずに、
（おのれ）
と、睨めつけて。
だが小次郎のほうでは、一向気づかない容子らしかった。
細川家に召抱えられて、豊前の小倉に居を定めてから、彼の恰幅や容子には、一倍と尾ヒレがついて来たように見られた。わずかな間だが、牢人時代のようなするどい眼ざしも、落着きをもった深い眸にかわり、元から色の小白い面には豊かな肉もついて、触れれば触れるものを舌刀で斬り返すような皮肉もあまりいわなくなった。総じて重々しい風采となり、その裡に養われて来た剣の気禀というものが、ようやく人格化して来たものと見てよかろう。
そのせいもあろう、今も、彼のまわりにいる円満の家士はみな、
（巌流様——）
とか、
（先生）
とか、敬って、新参の師範とはいえ、軽んじるふうは誰にも見えなかった。
小次郎という名は廃したわけではないが、その重い役目と、風俗とに、漸くふさわしくない年配にもなったためか、細川家へ行ってからは、名も巌流と称していた。

二

汗をふきふき、佐兵衛は船から戻って来て、
「お待たせいたしました。胴の間のお席はまだ片づきませぬので、もうしばらくお待ちねがいますが、舳にお坐りの組は、どうか船へお移り下さいまし」
と、触れた。
舳へ乗る組は、軽輩と若侍たちであった。各〻の荷や、身支度を見まわして、
「では、お先に」
「巌流先生。お先へ」
ぞろぞろと、一群は店口から立って行く。
巌流佐々木小次郎と、そのほか六、七名が後に残っていた。
「佐渡どのが、まだお見えなさらぬの」
「もう追ッつけ、着かれようが」
残った組は、みな年配で、服装から見ても、藩の然るべき要職にある者ばかりらしい。
この細川家家中の一行は、先月、陸路を小倉から立って、京都に入り、三条車町の旧藩邸に逗留して、そこで病歿された故幽斎公の三年忌の営みやら、生前幽斎公と親しかった公卿たちや知己へのあいさつやら、又、故人の文庫や遺物の整理など悉皆すまして、きのう淀川船で下り、きょうは海路の旅へ、初めての夜を送ろうという旅程にある人々であった。
今思い合せると、この晩春ごろ、高野を下り九度山へ立寄って去った長岡佐渡の主従は、その

八月の営みの準備のため、あれから京都へ廻って、その経歴と顔の古い関係からも、一切の奉行を勤め了わし、今日まで同地に止まっていたものであろう。
「――西陽がさしこんでまいりました。皆様、巌流様にも、どうぞ、まちっと奥のほうでお休みくださいまし」
佐兵衛は、帳場へ返っても、のべつ気を遣って愛想をいっていた。巌流は西陽を背にしながら、
「ひどい蠅」
と、扇で身を払いながら、
「口ばかり渇く、最前の熱い麦湯を、もう一碗、所望したいが」
と、いう。
「はいはい。熱い湯では、なおなおお暑うございましょう。唯今、冷たい井水を汲ませまする」
「いや、道中、水は一切飲まぬことにしておる。湯が結構だ」
「これよ――」
と、佐兵衛は坐ったまま首を伸ばして、湯沸し場のほうを覗き、
「そこにいるのは、伊おじゃないか。何をしている。巌流様へ、お湯をさしあげい。各〻様にも」
と、どなった。
それなり佐兵衛は又、送り状やら何やらに眼を忙しげに俯向けていたが、返辞のなかったのに気づいて、もう一度呶鳴るつもりで顔を上げると――伊織は盆に五ツ六ツの茶碗をのせて、眼を

それに注いで、おずおずと大土間の一方から這入って来た様子。
で――佐兵衛は又、それには無関心になって、送り状を書いていた。
「お湯を」
と、伊織は、ひとりの武家の前でお辞儀をし、順に、
「どうぞ」
と、又お辞儀をして行った。
「いや、わしはいらぬ」
という武家もあって、彼の捧げている盆には、まだ二ツの茶碗が熱い麦湯を湛えて残っていた。
「お取り下さいまし」
伊織は、最後に、巌流のまえに立って、盆を向けた。巌流はまだ気づかず、何気なく手をのばしかけた。

三

――はッと、巌流は手をひいた。
触れかけた熱湯の茶碗が熱かったためにではない。
手が、そこまでもゆかない間に、盆を捧げている伊織の眼と、彼の眼とが、かちっと、火華を発したように、出会ったのであった。
「あっ。そちは――」

巌流の唇が、こう愕きを洩らすと、伊織はそれとは反対に、噛んでいた唇をやや弛めて、
「おじさん。この前会ったのは、武蔵野の原でしたっけね」
にっと笑って見せたのである。——稚い、まだ小粒な歯を見せて。
その、小癪な不敵さに、
「何！」
巌流が、思わず、大人げもない声を釣り出されて、何か、次のことばでも吐こうとしたらしく見えたせつな、
「覚えているかっ！」
と、手に捧げていた盆を——それに乗せてある茶碗も熱湯も共に——がらっと、巌流の顔を目がけて抛りつけた。
「——あっ」
巌流は、腰かけたまま、顔をかわし、途端に、伊織の腕くびを引っ掴んでから——
「ア熱！……」
片目をつぶりながら、憤然と、突っ立った。
茶碗も盆も、うしろへ飛んで、土間の隅柱に当って一箇は砕けたが、こぼれた熱湯のしぶきが、顔、胸、袴にまでかかったのであった。
「ちイッ」
「この童めが」
時ならぬ二人のさけびと、茶碗の砕けたひびきとが、一つになって、居合す人々の耳を愕かし

た時、伊織の体は、巌流の脚下へ、叩きつけられた小猫のように、もんどり打って投げられていた。

起き上がろうとすると、

「うぬ」

と、巌流は、伊織の背を、手間ひまなくふみつけて、

「店の者っ」

と、どなった。

片目をおさえながらである。

「この童（わっぱ）は、当家の小僧か。子どもとはいえ、免（ゆる）し難いやつ。――番頭っ、ひっ捕えろ」

仰天した佐兵衛が、飛び下りて来て抑える遑（いとま）もなかった。巌流の脚の下に這いつくばっていた伊織は、

「なにを」

どう抜いたか――いつもその佐兵衛から禁物にされている刀を抜き払って、下から巌流の肱（ひじ）を狙い上げた。

巌流は、又も、

「あ、こやつ」

と、鞠（まり）のように、伊織の体を大土間へ蹴転がして、身を一歩、うしろへ退（ひ）いた。

佐兵衛が、そこへ、

「阿呆ッ」

絶叫して、飛びついて来たのと、伊織が跳ね起きたのと、同時であったが、伊織は、狂せるもののように、
「なにをッ」
と、なおいいつづけ、佐兵衛の手が、自分の体にふれると、振りほどいて、
「ざまア見ろ！　ばかっ」
巌流の面へ、そう罵ったかと思うと、ぱっと戸外へ向って逃げ出して行った。
――だが。
軒先から二間も駈けると、伊織はすぐ前へのめって仆れていた。巌流が土間の中から、有り合う天秤を取って、その脚もとへ投げつけたからであった。

四

佐兵衛は、若い衆と協力して、伊織の両手を捉え、土蔵露地のわきにある湯沸し場の方へ、引摺って来た。
巌流がそこへ出て来て、濡れた袴や肩を、仲間に拭かせていたからである。
「とんでもない御無礼を」
「何とお詫び致しましょうやら」
「何とぞ、御寛大に……」
などと口を揃えながら、伊織をそこにひき据えて、佐兵衛を初め店の若い衆たちは、あらゆる謝罪の辞をならべたが――巌流は耳がないように、見向きもせず、仲間に絞らせた手拭で、顔な

ど拭いて平然としていた。
若い衆たちに、両の手をねじ上げられて、地へ顔をこすりつけられている伊織は、そのわずかな間も、苦しがって、
「離せっ。離してくれっ」
と、もがき叫び、
「逃げはしないよっ。逃げるもんかっ。おらだって、さむらいの子だ。覚悟でした事、逃げなんかするか！　……」
と、いった。
髪をなで、衣紋まで直してから、巌流はこっちを見て、
「――離してやれ」
穏やかにいった。
むしろ意外にして、
「……えっ？」
と、佐兵衛たちが、その寛大な面を仰ぎ合って、
「離しても、よろしゅう御座いましょうか」
「だが」
と、そこへ釘を打ちこむように、巌流はいい足した。
「どんな事を致しても、詫びれば免されるものと考えさせては、却って、この少年の将来のためにならぬ」

「へい」
「元より、取るに足らぬ童(わっぱ)のした事。厳流は手を下さぬが、そち達がこのままにもいたし難いと思うなら糾明(きゅうめい)として、そこの湯柄杓(ゆびしゃく)で釜の煮え湯をいっぱい頭からかぶせてやれ。——命にはかかわるまい」
「……ア。その湯柄杓で」
「それとも、このまま、放してよいと、其方どもが思うなら、それでもよし……」
「………」
　さすがに佐兵衛も若い衆たちも、顔見合せてためらっていたが、
「どうしてこのままに済まされましょう。自体、日頃からよくない餓鬼。お手討となってもせんない所を、それくらいなお仕置で御勘弁ねがえるものなら有難い仕合せ。……野郎、誰のせいでもないぞ。おれ達を怨むなよ」
　と口々にいう。
　暴れ狂うにちがいない。そこの素縄を持って来い。両手を縛れ、膝を縛れ——などと大仰(おおぎょう)にさわぎだすと、伊織は、それらの手を振り払って、
「何するんだいッ」
　と、いった。
　そして地面に坐り直し、
「覚悟してした事だから逃げないといってるじゃないか。おらはその侍に、湯をかけてやる理(わけ)があるからかけてやったんだ。その返報に、おらにも煮え湯をかぶせるなら、かぶせてごらん。町

人なら謝るだろうが、おらは謝る筋もないぞ。侍の子が、そればかしの事に、泣きなんかするものか」

「いったな！」

佐兵衛は、腕を捲って、大釜の熱湯を柄杓いっぱい汲んで、伊織の頭の上へ徐々に持って来た。

（……むゥ！）

と、唇をむすんだまま、伊織は両眼をくわっと開いて、それを待っていた。

――すると、何処かで、

「眼をふさげ。伊織！　眼をふさいでいないと、眼がつぶれる！」

と、注意する者があった。

五

誰か？　と声のほうを見る遑もなく伊織は、注意された通り、眼をふさいだ。

そして、頭の上から注ぎかけられる熱湯を待ちながら――その意識も払いのけて――いつしか武蔵の草庵で、ひと夜、武蔵から聞いたはなしの、快川和尚のことをふと思いだしていた。

甲州武士がふかく帰依していた禅僧で、織田徳川の聯合軍が、峡中へ討入って、山門へ火をかけた時、その楼上でしずかに炎に体を焼かせながら、

――心頭ヲ滅却スレバ火モ亦スズシ

と、いって死んだという人。

熱　湯

眼をつぶりながら、伊織は、
(なんだ、柄杓いっぱいの熱湯ぐらい)
と、思ったが、又すぐ、
(あ。そう思うのが、もういけないんだ)
と気づいて、頭のしんから体じゅうを、しーんと虚にして、形はあれど、迷妄も悩悶もない、無我の影になろうとした。
だが、駄目であった。
伊織には、そう成れない。いっそ伊織が、もう少し年がゆかなかったら、或はなれよう。でなくば、もっともっと年をとっていたら、或はそこに到達されよう。彼ももう、あまりに物ごころがありすぎていた。
——今か。……今か。
額からだらりと落ちる汗も湯玉かと思えた。わずかな一瞬が、百年のように長いのだ。伊織は、眼を開きたくなった。
——すると、巌流の声が、
「おお。御老台か」
と、後ろでいった。
湯柄杓を持って、伊織の頭の上から、浴びせかけようとしていた佐兵衛も、周りの若い衆達も、往来の彼方から、
(伊織、眼をふさげ!)

と、注意した者のほうへ――思わず眼をやって――そして一瞬、伊織へかぶせる熱湯を、ためらっていたのだった。
「えらい事が始まったのう」
御老台と呼ばれた人物は――道の向う側から足をうつして来ていた。若党の縫殿介ひとり召連れて、茶地の麻の小袖に、夏も冬も同じ物かと思えるような野袴をはき、汗だけは、人いちばい汗性らしい顔をした藩老の長岡佐渡であった。
「これは、とんだ所を、お目にかけてしもうた。はははは、懲らしめております」
大人げないと思われはしまいか。――巌流は藩の先輩にそう自分ですぐ斟酌したものか、紛らすように笑っていった。
佐渡は、伊織の顔ばかりじっと見て、
「ふむ。懲らしめにな。……理由のある事なら、仕置もよかろう。サササ。やりなさい。佐渡も見物しよう」
熱湯の柄杓を持ち怺えたまま、佐兵衛は、巌流の顔を横目に見た。巌流は、相手が少年であるばかりに、自分の立場が、不利に見えていることを直ぐ覚って、
「もうよい。これで童も懲りたであろう。――佐兵衛、湯柄杓を退け」
すると、伊織は、さっきから開くともなく開けたまま、空虚に見つめていた人の顔へ向って、
「あっ。おらは、お武家様を知っていら。お武家様は、下総の徳願寺へ、よく馬に騎って、来たことがあるだろ！」
と、縋りつきそうにして叫んだ。

「伊織。覚えていたか」
「アア！……忘れるもんか。徳願寺で、おらにお菓子を下さった」
「今日は、お前の先生の武蔵とやらはどうしたな。……この頃は、あの先生の側にはいないのか」
問われると、伊織は突然、シュクと鼻をすすって、鼻と拳の間から、ぼろぼろと涙をこぼした。

六

佐渡が、伊織を知っていたのは、巌流にも、意外であった。
けれどその長岡佐渡は、自分が細川家へ仕官する前から、自分の今の位置へ、宮本武蔵を推挙していた者であり、なおその後も、君公とつがえた約を果さねばならぬとかいって——折あるごとに、武蔵の居所を心がけているとも聞いているので、
(何かの時、伊織を通じて武蔵と知ったか、武蔵をさがすために、伊織を知ったか。とにかく、そんな縁故だろう)
と巌流は、察した。
けれど巌流は、
(この少年を、どうして御存じか？)
とは、強いて訊いてみる気がしなかった。そんな緒口から、佐渡とのあいだに、武蔵の名が話に出ることは、好ましくない。

だが、好むと好まないとに関らず、いつか一度は、武蔵と相会う日がきっと来るに違いないことは、巌流もひそかに予期していた。――それは又、自分と武蔵との従来の経歴が、何となくそうして来たばかりでなく、君公の忠利も予期し、藩老の長岡佐渡も予期しているところである。いや、彼が豊前小倉へ着任してみると、そういう期待は、果然、中国、九州の民間にも、各藩の剣人たちのうちにも持たれていたのが、意外なくらいであった。

郷土的な関係もあろう。武蔵の生地も自分の生れた土地も共に中国だし、又、武蔵の名声も自分の名も、江戸にあって考えるのとは想像以上に、郷土や西国一帯には話題となっていたのである。

なお必然、細川家の本藩支藩を通じても、伝え聞く武蔵を高く評価する者と、新任の巌流佐々木小次郎を偉なりとする者とが、何とはなく対立していた。

その一方に、巌流を細川家へ斡旋した同じ藩老の岩間角兵衛がある。だからこの空気は、大きくは天下の剣人達の興味から起ってもいるが、その真因は、藩老の岩間派と、藩老の長岡派との対立が醸したものだと観るものもあった。

で。いずれにせよ――

巌流が佐渡に或る感じを持ち、佐渡が巌流に好意をもっていないことも明白なのだ。

「お支度ができました。胴の間のお席の方も、どうぞいつでも、船へお越しくださいまし」

その時。

巌流にとっては、折もよく、巽丸の水夫頭が迎えに来たので、

「御老台、ひと足お先へ」

と、佐渡へいい、他の家中の者をも誘って、あわただしげに、船の方へぞろぞろ立去った。
佐渡は、後に残って、
「船出は、黄昏だの」
「へい。左様で」
と、番頭の佐兵衛はまだ、この場の始末が着き限らないような惧れを抱いて、店の大土間にうろうろしながらいった。
「ではまだ――休息して参っても、間に合おうな」
「間に合いまするとも。どうぞお茶など一ぷく」
「湯柄杓でか」
「ど、どういたしまして」
と、佐兵衛はひどく、痛い皮肉を浴びた顔して、頭を掻いたが、その時、店と奥との仕切暖簾のあいだから、お鶴が顔を出して、
「佐兵衛。ちょっと……」
と、小声で呼んだ。

七

店先では、あまり端ぢか。お手間はとらせませぬゆえ、住居の庭門から奥の数寄屋まで――
と、佐兵衛に導かれて、
「では、ことばに甘えよう。わしに会いたいとは、この家の御寮人か」

「お礼を申したいとかで」
「何の礼じゃ」
「多分……」
と佐兵衛は、そこでも頭を掻いて、恐縮しながら、
「伊織の事を、無事にお扱い下さいましたので、主人に代ってその御挨拶を申すんでございましょう」
「オ。伊織といえば、あれにも話がある。こっちへ呼んでくれい」
「かしこまりました」
庭はさすがに堺町人の数寄をこらしたもの、土蔵一側の隔てだが、店先の暑さや騒ぎは別天地のようだ。泉石も、樹々も打水に濡れ、微かな水のせせらぎが耳を洗う。
数寄屋の一間に、毛氈を敷きのべ、茶菓、煙草をととのえ、火入れには煉香をしのばせて、御寮人のお勢と、娘のお鶴は、客を迎えたが、長岡佐渡は、
「この埃まみれに、草鞋がけじゃ。ゆるされい」
とそこに腰のみ掛けて、茶を喫した。
お勢からは、改めて、
「ただ今は、何とも――」
と、雇人たちの無考えな仕方だの伊織に就いても、詫びやら礼をのべたが、佐渡は、
「いや何。あの子供は仔細あってわしが以前に見かけた事のある者。来合せたのが倖せであった。それよりは、どうして当家の厄介になっておるか、それはまだ伊織からも聞いてはおらぬ

が……」
と、訊ねた。
御寮人は、大和詣りの途中、ふと見かけて拾って来たわけを話し、佐渡は又、伊織の師宮本武蔵という者を、年来捜しているところじゃが――などと種々の物語も出て、
「――最前、彼が熱湯を浴びせられそうになって、大勢の中に、坐ったところを、往来をへだてじっと見ておったが、なかなか自若として、悪びれぬていには、密かに感服した。ああいう性根の児を、商家に飼っておいては、かえってその性根を歪めてしまうかもしれぬ。いっその事、わしにくれぬか。わしが小倉へ連れ帰って、手飼の者として育ててみたいが」
佐渡から、望まれると、
「願うてもない……」
と、お勢も同意し、お鶴もよろこんで、早速、伊織を呼んで来ようと席を立つと、その伊織は、さっきから近くの木陰に佇んで、そこの相談をのこらず聞いていたらしい。
「厭か」
皆に、意志を訊かれると、もちろん厭どころではない。ぜひぜひ小倉とやらへ連れて行ってくれという。
船出は間もない――
お鶴は、佐渡がそこで茶を喫んでいるまに、着物よ袴よ、笠よ脚絆よと、自分の弟でも旅立たせるようにいそいそした。生れて初めて、袴という物を穿き、歴乎とした武家の随身になって、伊織は、やがてお供をして船へ移った。

夕焼け雲に、黒い帆の翼を張り
お鶴さんの顔――
御寮人の白い顔――
佐兵衛の顔。たくさんな見送人の顔。堺の町の顔――
伊織は、笠を振っていた。

無可先生

一

岡崎の魚屋横ちょう。
そこの一つの露地口に、板の打ってあるのを見れば、佗牢人の生活とみえ、

童蒙道場　　無可

よみかきしなん

と、ある。
寺子屋であろう。
だが、その先生の自筆らしい看板の文字からして、はなはだうまくない。横目にみて、苦笑して通る識者もあるだろう。けれど、無可先生は、敢て恥としていない。問う者があれば、

（わしも、まだ子どもで、修行中だからな）

と、いうそうである。

露地の突当りは、竹やぶだ。竹やぶの彼方は馬場で、天気だと、のべつ埃が立っている。いわゆる三河武士の精鋭、本多家の家中が、騎馬の練磨に日を暮しているのだった。

で、埃がくる。

無可先生は、そのためか、いつもそっちの折角明るい軒へ、一簾をかけているので、いとど狭い室内は、よけいに薄暗い。

元より独り者。

今しがた、昼寝からさめたとみえ、井戸の釣瓶が鳴っていたが、そのうちに、

ぱーん！

と竹藪の中で、大きな音がした。竹を伐った音である。

叢竹の中の一本が、ゆさっと仆れた。しばらくすると、無可先生は、尺八にするにしては太すぎるし、みじかくもある一節を切って、藪から出て来た。

鼠頭巾に、鼠無地の単衣を着、脇差ひと腰。それでいて、年は若い。そんな地味ではあるが、まだ三十とは思われない。

一節切の竹を、井戸端で洗い、文字どおりな裏店の室内へ上がって来ると、床の間はない——ただ壁の隅へ、一枚の板をおいて、そこへ誰の筆か、祖師像を描いたのを懸けてあるだけの——その置床の板へ、竹の節を据えた。

花挿になっている。

雑草にからんだ昼顔の花を、ぽんと投げてあるのだった。
――悪くない。と、自分でも見ているらしい。
それから机に坐って、無可先生は、習字をし始めた。褚遂良の楷書の手本と、大師流の拓本が載っている。
「………」
ここへ住んでからでも、一年の余になる。日課を務めたせいだろう。看板の文字よりは、はるかに上達していた。
「お隣のお師匠さん」
「はい」
筆を措いて、
「――隣のおばさんか。暑いのう、今日も。お上がりなされ」
「いえいえ。上がってはいられないが……何じゃろ？　今大きな音がしたようだが」
「ははは。私の悪戯ですよ」
「子ども衆をあずかる先生、悪戯しては困ったものじゃ」
「ほんにな……」
「何をなされたのじゃ」
「竹を伐ってみたのでござる」
「そんならよいが妾は又――何かあったのじゃないかと、胸がどきっとした。うちの良人がいうことだから、そうあてにはならないけれど、どうもこの辺をよく牢人衆がうろついているのは、

お前さんの生命でも狙っているらしい……などと聞かされているものだからね」
「だいじょうぶです。私の首など三文の値もしませんから」
「そんな暢気をいってても、自分に覚えのない恨みで殺される人だってあるからね。……気をつけるがいいよ。わたしはいいけれど、近所の娘さん達が、泣くからね」

二

隣家は筆職人であった。
亭主も女房も、親切者で、わけておかみさんは、独り者の無可先生のために、時には炊事煮物の法を教え、時には縫いもの洗濯ものの労まで取ってくれる。
それはいいが、無可先生を、ややもすると、困らせる一事は、
（いいお嫁さんがあるのだが――）
である。
毎度毎度、やたらにそのお嫁に来たい口を持って来ては、
（いったい、どうして女房を持たないのさ。まさか女嫌いでもあるまいに）
と、問いつめて、時には無可先生をして殆ど、答えに窮させてしまう。
だが、これは彼女の罪ばかりでなく、無可先生自身も悪いので、
（自分は、播州牢人、係累もなく少しばかり学問をこころざして、京都や江戸に学んだから、この土地で行末は、良い塾でも持って落着きたいと思う）
などとお座なりをいった事があるので、年頃も年頃、人品もよし、第一に真面目でおとなしい

し……と隣の夫婦がすぐ鍋釜の次に女房を考えたのも無理ではないし又、時折出歩く無可先生の姿を見かけ、嫁に行きたい、嫁に遣りたいと筆職人の夫婦へ洩らして口ききを縋る向きも多いのである。

そのほか。

何の祭礼。何の踊り。やれ彼岸の盆のと――小さな生活を忙しく派手に――悲しみの葬式や病人の世話事までも、寄り合世帯のように賑やかに送っている――裏町住居のおもしろさ。

その中に、寂として住んで、

（おもしろいな）

無可先生は、一脚の小机から、世間をながめ、世間に学んでいるらしかった。

しかし、こういう世間には、ひとり無可先生ばかりでなく、どんな人間が住んでいるか知れなかった。時節が時節でもある。

先頃まで、大坂の柳の馬場の裏町で、幽夢という頭を丸めた手習師匠が住んでおったが、徳川家の手で身元を洗ってみると、何ぞしらん、これが前の土佐守長曾我部宮内少輔盛親の成れの果て――とわかり、大騒ぎしたが、近所に知れた時には、一夜で彼の姿はどこにも見えなかったという噂。

又。名古屋の辻で、売卜をしていた男を、不審と見て、これも徳川家の手筋が、さぐってみると、関ヶ原の残党毛利勝永の臣竹田永翁であったとやら。

九度山の幸村、漂泊の豪士後藤基次、徳川家に取って、神経にさわる人間は皆、世のなかを韜晦して、そして努めて、人目につかない暮しを、法則としている。

もちろんそういう大物ばかりが世間に隠れているわけではなく、くだらない物もそれ以上、ごろついているのが世間であり、その真物とくだらない物とが、渾然と、見分けもつかず隣り合っている所に、裏町の神秘がある。

無可先生についても、近ごろ、誰がいい出したともなく、無可と呼ばずに、武蔵とよぶ者が、ちらちらあって、

「あの若い方は、宮本武蔵といって、寺子屋などは、何かの都合でしていることで、ほんとは一乗寺下り松で、吉岡一門を相手にして勝ちぬいた、剣の名人であらっしゃる」

と、頼まれもせぬ事を、触れてあるく者もあった。

「まさか?」

と、いったり、

「そうかしら……?」

と、いったりして、無可先生を見ているのが、今の近所の衆の眼で、時折、夜に紛れて裏の竹藪だの、露地の口だのを、密かに窺っているのが、隣家のかみさんがよく彼に注意する——彼の生命を狙っている何者かの眼であった。

三

そういう危険が、絶えず身を窺っているのを、無可先生自身は、

(知れたもの——)

と、およそ多寡をくくってでもいるのか、今日も、隣家の内儀に注意されたばかりなのに、晩

になると、
「お隣の御夫婦、又ちょっと留守にいたすが、頼みまする」
声をかけて、出て行った。
筆屋の夫婦は、開け放して、晩飯をたべていたので、その姿が、軒先をよぎる時ちらと見えた。
鼠無地の単衣に、編笠を被り、出て行く時は、大小を横たえてはいるが、袴もつけず、着流しの素服。
袈裟、掛絡をまとえば、そのまま、虚無僧といった風采である。
筆屋のかみさんは、舌打ちして、つぶやいた。
「いったい何処へ行くんだろうね、あの先生はさ。子供たちの指南は、お午前にすんでしまうし、午からは昼寝だし、晩になると、蝙蝠みたいに、出かけて行く……」
亭主は、笑って、
「独り者だ、仕方がないさ。他人の夜遊びまで、妬いてたら、限りがないぞ」
露地を出ると、宵の岡崎は、夕凪のむし暑いほとぼりが冷め切れないうちにも、夏の夜の灯が戦ぎ立って、人影の流れの中に、尺八が聞え、虫籠の虫の音が聞え、座頭の節をつけた喚きだの、西瓜売りや鮨売りの呼び声や、又、夜歩きに出た旅人の浴衣の群など――さすがに江戸のような新開地的なあわただしさと違って、落着いた中に城下町風情がある。
「あら。先生が行く」
「無可先生」

「すまして行くこと」
町の娘達が、眼顔して、囁きあう。中には、お辞儀する娘がある。無可先生の行く先は、そこらでも、話題であった。
だが、彼の行く足は、真っ直だった。遠い王朝のむかしから、ここの辺りは、矢矧の宿の浮れ女たちから脂粉の流れをひいて、今も岡崎女郎衆の名は、海道の一名物であったが、そこの辻を曲がる様子もない。
ほどなく、城下の西端れまで行ってしまう。すると、広い闇に、どうどうと、瀬にしぶく水音が聞かれ、暑さもいちどに袂を払って、橋の長さ二百八間という、その橋桁の第一柱に、
矢矧ばし
と星明りに読める。
すると、約束したように、そこに待っていた一個の痩法師が、
「武蔵どのか」
と、いった。
無可先生は、
「おう。又八か」
近づいて、笑顔を見合う。
正しく一方の者は、本位田又八である。江戸町奉行所の前で、百の笞に打叩かれた果て、罪の莚から放逐された——あの時の姿のままの又八である。
無可とは、武蔵が、仮の名であった。

矢矧の橋のうえ。
星の下。
ふたりの間には、かつての旧怨もなく、
「禅師は？」
武蔵が問うと、
「まだ旅よりお帰りもなし、お便りもない様子」
と、又八がいう。
「お長いなあ」
呟きながら、ふたりは、背をならべて、矢矧の大橋を睦まじそうに、渡って行った。

四

対岸の松の丘に、古い禅刹があった。その辺りを八帖山というせいか、八帖寺と寺の名も称ばれている。
「どうだな又八。禅寺の修行というものは、なかなか辛いものだろう」
そこの山門へ向って、暗い坂道を登って行きながら、武蔵がいうと、
「辛い――」
又八は、正直に、青い頭を垂れて答えた。
「何度も、逃げ出そうと思ったり、こんなにも、辛い思いをしなければ、人間になれないなら、いっそ首でも縊ろうかとさえ考える時もある」

「まだまだおぬしは、禅師へおすがりして、入門の許しを得た弟子ではないから、そこらはほんの修行の初歩だ」
「しかし——お蔭でこの頃は、弱い気持が出ると、これではならぬと、自分で自分を、鞭打つことができるようになった」
「それだけでも、修行のかいが目に見えて来たわけだな」
「苦しい時には、いつもおぬしを思い出すのだ。おぬしでさえ、やり越えて来た事、おれに出来ぬわけはないと」
「そうだ。わしがした事。おぬしに出来ぬことはない」
「それと、一度死ぬところを——沢庵坊に救われた生命と思い、又、江戸町奉行所で、百叩きにされた——あの時の苦しみを思い出しては——何を、何をと、今の修行の辛さと朝夕闘っている」
「艱苦に克ったすぐ後には、艱苦以上の快味がある。苦と快と、生きてゆく人間には、朝に夕に刻々に、たえず二つの波が相搏っている。その一方に狡く拠って、ただ安閑だけを偸もうとすれば、人生はない、生きてゆく快も味もない」
「……少し分りかけて来た」
「欠伸一つしてもだ——苦の中に潜心した人間のあくびと、懶惰な人間のそれとはまったく違う。数ある人間のうちには、この世に生を得ながら、ほんとの欠伸の味すら知らずに、虫のように、死んで行くのがたくさんいる」
「寺にいると、周りの人たちからも、いろいろな話を聞く。それが楽しみだ」
「はやく、禅師に会って、おぬしの身も頼みたし、わしも何かと、道について、禅師に糺したた

い事もあるのだが……」
「一体、いつお帰りなのだろう？　一年も便りがないといってるが」
「一年はおろか、二年も三年も、飄々と、白雲のように、居所も知れぬ例は、禅家には珍しくない事だ。――折角、この土地に足を留めたのだから四年でも五年でもお帰りを待つ覚悟でいてくれい」
「その間、おぬしも、岡崎にいてくれるか」
「いるとも。裏町に住んで、世間の底の、雑多な生活に触れてみるのも、ひとつの修行。――空しく禅師のお帰りのみを待っているわけではない。わしも修行と思って、町住居しているのだから」
山門といっても何の金碧もない茅葺門。本堂も貧しい寺だった。
又八道心は、そこの庫裡のわきにある寝小屋の内へ友を導いた。
まだ彼は、正式にここの寺籍にはいっていないので、禅師の帰るまでそこに塒を与えられていた。
武蔵は、時々、彼をここへ訪れて、夜更けまで話しては、帰って行った。もちろん二人が、旧交を取りもどし、又八も一切を捨てて、こうなるまでには、――そこに、江戸の地を離れてから以後の話も残ってはいるが。

無為の殻

一

話は、以前になるが。

去年。――柳営に仕官の望みを絶って、伝奏やしきの半双の屏風に、武蔵野之図を一掃に描き残したまま、江戸の地を去った武蔵は、あれからどう道どりを取って来たか。

時には、忽然とすがたを見せ、時には飄然とすがたを消し、峰のふところに遊ぶ白雲のように、武蔵の足跡は、近ごろ殊に定まらなかった。

彼の歩みには、確とした一つの目的と、一定の法則があるようであって又、ないもののようでもあった。

彼自身は、ひたすら一筋の道をば、脇目もふらず歩いているかに思われるが、傍から眺めると、自由無碍な、いかにも気ままな道を歩いたり、止まったりしているように観えるのだった。

武蔵野の西郊を相模川の果てまで行くと、厚木の宿から、大山、丹沢などの山々が面に迫って来る。

彼の姿は、そこから先、しばらくのあいだ、どこでどう暮していたか分らない。

文字どおりな蓬頭垢面を持った彼が、約ふた月ほど後、山から里へ下りて来た。何か或る一つ

の迷いを解くために、山へ籠ったらしかったが、冬山の雪に追われて下りて来た彼のその顔には、山に入る前より苦しげな迷いが刻みこまれていた。
　解けないものが次々に彼の心を苛む。一つ解くと又一つの迷いに逢着する。そしてまったく、剣も心も、空虚になる。
「だめだ」
　自分で自分を、時にはまったく、嘆声の下に、見捨てかける時すらあった。そして、
「いっそ……？」
　と、人なみな安逸を想像した。
　お通は？　すぐ思う。
　彼女と共に、安逸をたのしむ心になれば、すぐにでも出来そうな気がするのだ。又、百石や二百石の、身過ぎのための食禄をさがす気になれば、それも何処にでもあると考える。
　けれど。顧みて、
　――それで不足はないか。
　と、自身に問うてみると、彼は決して、そんな生涯の約束を、甘受できなかった。反対に、
「懦夫！　何を迷う」
　と、身を罵って、攀じ難き峰を仰いで、よけいに踠いた。
　時には、さもしい、浅ましい、餓鬼のように煩悩の中に。又時には、澄み返った、峰の月のように、孤高を独り楽しむほど潔い気もちになったり――朝に夕に、濁っては澄み、澄んでは濁り、彼の心は、その若い血は、余りに多情であり、又、多恨であり、又、躁がし過ぎた。

そういう心の中の明暗不断な妄像と同じように、形に現れる彼の剣も、まだまだ彼が自分で、
「可」
と、思う域には達していないのだった。その道の遠さ、未熟さが、自分には、余りに分りすぎているので、時折の迷いと、苦悶とが、烈しく襲ってくるのだった。
山に入って、心が澄めば澄むほど里を恋い、女を思い、いたずらに若い血が狂いそうになる。木の実を喰べても、滝水を浴びて、いかに肉体を苦しめてみても、お通を夢みて、うなされる。
ふた月ばかりで、彼は山を降りてしまったのである。そして藤沢の遊行寺に、数日足を留め、鎌倉へまわって来た所、そこの禅寺で、はからずも自分以上に苦しみもがいている男と出会った。それが旧友の又八であった。

二

又八は、江戸を追われてから、鎌倉へ来ていた。鎌倉には、寺が多いと聞いていたからである。
彼も亦、べつな意味で、苦悩していたところだった。もう二度と、自分が歩いて来た懶惰な生活へ、戻ろうという意志はなかった。
武蔵は、彼にいって、
「遅くはない。今からでも、自分を鍛え直して、世に出ればいいではないか。——自分で自分を、だめだと見限ったら、もう人生はそれまでのものだ」
と、励ましたが——しかし、と付け加えて、

「とはいえ、かくいう武蔵も、実は今、何かまったく、壁のような行止りと、ともすれば、おれは駄目かな？　――と疑いたいような、虚無に囚われて、何をする気も失せているのだ。そういう無為の病に、自分は三年に一度か、二年に一度ずつは、きっと罹るのだが、その時、駄目と思う自分を鞭打って励まし、無為の殼を蹴やぶって、殼から出ると、又新しい行くてが展けてくる。そして驀しぐらに一つの道を突き進む。――すると又、三年目か四年目に、行止りの壁につき当って、無為の病にかかってしまう。……」

正直に、武蔵は告白して、さてまた、又八へ向っていう事には、

「ところが、今度の無為の病は、すこし重い。いつまでも、打開できぬ。殼の中と、殼の外との、境の闇に、もがいている無為から無為の日がつづく苦しさ……。で、ふと思い出したお方がある。そのお方の力をお借りするほかはないと――実は山を下りて、この鎌倉へ、そのお人の消息をさぐりに来た次第だが」

と、話した。

武蔵がいう、思い出した人というのは、彼がまだ十九か二十歳の向う見ずに道を求めてさまよっていた時代――京都の妙心寺の禅室へ足しげく通っていた事があって――その頃、啓蒙の師事をうけた前法山の住、愚堂和尚、べつの名を東寔ともいう禅師だった。

聞くと、又八は、

「そういう和尚ならば、ぜひおれを紹介わせてくれ。そしておれを、弟子にしてくれるように、頼んでみてくれ」

と、いった。

果たして又八が、そういう本心になったのか否かを、武蔵も初めは疑ったが、又八が、江戸へ出てから会った憂き目の数々を聞くと。——そうか、それほどな目に会ったなら、さもあろう。心得た。きっと弟子入りのことはお願いしてみよう。——と武蔵も誓って、ともども、鎌倉の禅門をさがし歩いてみたところ、誰も知っている者がない。

なぜならば、愚堂和尚は、数年前に妙心寺を去って、東国から奥羽の方を旅しているとは聞えていたが、至って、飄々たる存在で、時には、主上後水尾天皇の御座ちかく召され、清涼の法筵に、禅を講じているかと思えば、ある日は、弟子僧ひとり連れず、片田舎の道に行き暮れて、夜の一飯に当惑していたりしているといった風な人だからである。

「岡崎在の、八帖寺へ行って、訊いてごらんなされ。そこへはよく、脚を留められるから」

こう、さる寺で教えられて、ではそこへと、武蔵と又八は、岡崎へ来たが、愚堂和尚はやはりいなかった。けれど、一昨年ぶらりとお姿を見せ、陸奥の戻りには又、立ち寄るような事をいわれていたという話に、

「では、何年でも、お帰りまで待とうではないか」

と、武蔵は町に仮の家をさがして住み、又八は庫裡裏の寝小屋を借りて、共に、和尚の見える日を、もう半年以上も、待ち暮して来たのだった。

三

「小屋の中は、蚊が多くて」

又八は蚊やりを焚きつづけていたが、耐えられない眼をしていった。

「武蔵どの、外へ出ようか。蚊は外にもいるが、少しは……」
と、いう間も、眼をこすっていた。
「うむ、どこでも」
武蔵は先に出た。こうして訪れるたびに、少しでも、又八の心に何か不足を足して行ければ、彼の心もちは済むのだった。
「本堂の前へ行こう」
深夜なので、そこは誰もいなかった。大扉も閉まっている。風もよく通る。
「……七宝寺を思い出すなあ」
階段に足を投げ出し、縁に腰をかけながら、又八はつぶやいた。二人が顔をあわせた時、何ぞといえば、木の実や草の話からでも、すぐ故郷の思い出が口に出るのだった。
「……うむ」
と武蔵にも同じ思い出がわいていた。けれど、それからは、二人とも、黙って、思いを口に出さなかった。
何時もの事である。
故郷のはなしが出れば、それにつれて、お通のことが、二人の念頭に泛んでくる。又、又八の母の事やら、苦い数々の記憶が、今の友情をみだして来る。
今では、又八も、それを惧れるふうであった。武蔵も、いわず語らず、避けていた。
――だが、その晩にかぎって、又八は、もっとそれについて話したいような顔つきで、
「七宝寺のある山は、ここよりも高かったな。ちょうど麓には、矢矧川と同じように、吉野川が

流れていた。……ただここには、千年杉がない」
　武蔵の横顔を、そういいながら見つめていたが、突然、
「なあ、武蔵どの。いつかいおう、いつか頼もうと思っていたが、つい、いい出しかねていたが、おぬしにぜひ承知してもらいたい事があるのだ。肯いてくれるか」
「わしに？　……はて。何をだ？　……。いってみい」
「お通のことだが」
「え」
「お通をっ……」
　という先に、感情のほうが、舌に絡んでしまった。そして眼は、泣きそうになっていた。
　武蔵の顔いろも動いていた。お互いに触れまいとしていたものを、又八から急にいい出されて、咄嗟、その意志を測りかねたのだった。
「おれとおぬしとは、心も溶け合うて、こうして一つ夜を語り合ったりしているが、あのお通は、どうしてるだろう。――いやどうなって行くだろう。この頃、ときどき思い出しては、済まないと心で詫びているのだ」
「………」
「よくもおれは、長年の間、お通を苦しめたものだった。一頃は、鬼のように追い廻し、江戸では一つ家においた事もあるが、決しておれに心はゆるさない。……考えてみれば、関ケ原の戦へ出た後から、お通は、おれという枝から離れて地へ落ちた花だ。今のお通は、べつな土から、べつな枝に咲いている花だ」

「…………」

「おい武蔵っ。いや武蔵どの。……頼むから、お通を娶ってやってくれ。お通を救ってやるものはおぬししかないぞ。……それも、以前の又八だったら、金輪際こんな事はいいもしないが、おれはこれから今までの取返しを、沙門の弟子になってやろうと思い定めた所だ。もうきれいに諦めた。……だが又、気がかりにもなるのだ。……頼むから、お通をさがし出して、お通の望みをかなえてやってくれい」

四

その晩。――もう夜も更けきった丑満の頃。

黙々と、松風の闇を、八帖の山門から、麓へ降りて行く武蔵の姿が見られる。

腕を拱いて。

俯向いて。

彼が自分でいうところの無為と空虚の悩みが足もとにも纏っているような歩みで――。

今、本堂で別れて来た又八の言葉が、松かぜに洗われても、いつまでも、耳から離れなかった。

――頼むから、お通の身を。

と、真剣でいった又八のあの声である、顔つきである。

自分へそういった又八も、いい出すまでには、幾夜となく、悶えたであろう。苦しかったであろう。――と思いやられる。

だが、より以上、見苦しい迷いと、苦悶とは、かえって自分にある事を、武蔵は否めなかった。

……頼むから！

掌を合さないばかりにいってしまった又八は、それまでの、日夜の焔から遁れて、後は却って、解脱の身のすずしさに、泣きぬれて、悲しみと法悦との、二つのふしぎな疼きのなかに、ほかの生き効いを、胎児のように、今は索っている気もちであろう。

又八が、面と向って、それをいい出した時、武蔵は、

（それは出来ない！）

ともいい切れなかった。

（お通を、妻にもつ気はない。以前は、おぬしの許嫁だ。懺悔と、真心を示して、おぬしこそ、お通との仲を取りもどせ！）

とは、なおさら、いわれなかった。

では、何といったか。

武蔵は、始終、何もいわなかったのであった。

何をいおうとしても、自分のことばは、嘘になるからだった。

といって胸の底に蟠っている本当らしい事は、自分に顧みて、いえもしなかったからである。

それにひきかえて、今夜の又八は、必死だった。

お通の事からして、解決しておかなければ、沙門の弟子になっても、ほかの修行を求めても、

一切むだなものになるから。
――というのだった。
そして又、
（おぬしがおれに修行をすすめたのではないか。それほど、おれを友達と思ってくれるなら、お通も救ってやってくれ。それはおれを救ってくれる事にもなるんじゃないか）
と、七宝寺時代の幼な友達の頃の口調そのままになって、果てはおいおいと泣いていったのである。
武蔵は、彼のその姿に、
（四ッか、五ッの頃から見ているが、こんな純情な男とは思わなかった――）
と、心のうちで、その必死な言に打たれると共に、
（おのれの醜さ。おのれの迷い……）
とわが身をさえ恥かしく思って別れてしまったのであった。
別れる時、又八が、袂をつかんで最後のようになおいった折――武蔵は初めて、
（考えておく……）
といったが、又八がなお、すぐ返辞をと求めてやまないので遂に、
（……考えておく）
と、辛くも、一時のがれをいい残して、山門を出て来たのだった。
――卑怯もの！
武蔵は自分へ罵りながら、しかもいいよいよ、無為の闇から脱けられない、この日頃の自分をあ

われに眺めた。

五

無為の苦しさは、無為を悶える者でなければ分らない。安楽は皆人の願うところだが、安楽安心の境地とは大いにちがう。

為さんとして、何もできないのである。血みどろに踠きながら、頭も眸もうつろに呆けたここちである。病かというに、肉体にはかわりはない。

壁へ頭をぶつけ、退くに退けず、進むに進めない。にッちもさッちも行かない空間に縛られて、果てもないここちがする。その果てに、われを疑い、われを蔑み、われに泣く。

——浅ましや己れ。

武蔵は、憤怒してみる。あらゆる反省を自己へそそいでみる。

が、どうにもならないのだ。

武蔵野から、伊織を捨て、権之助にわかれ、又、江戸の知己すべてと袂別して、風のように去ったのも、薄々、この前駆的症状を自分でも感じていたので、

——これではならじ。

と、驀しぐらに、その殻を蹴やぶって出たつもりではなかったか。

そして半年以上。気がついてみれば、破った筈の殻は、依然として空虚の自分を包んでいる。

あらゆる信念を喪失しかけて空蟬にも似た自分の影が、今宵もふわふわと暗い風の中を歩いている。

お通のこと。

又八のいったことば。

そんな事すら、今の彼には、解決がつかないのだ。考えても、考えても、纏まらないのであった。

矢矧川の水が広く見えて来た。ここへ出ると、夜明けのように仄明るかった。編笠のふちに、川風がぴゅっと鳴って行く。

その強い川風のなかに紛れて、何か、ぴゅるウん――と唸って掠めたものがあった。武蔵のからだを、五尺とは去らない空間をつき貫いて行ったのであったが、武蔵の影は、より迅かったと思われるほど、すでにその辺の地上には見えなかった。

ぐわうん、と矢矧川が同時に鳴った。鉄砲の音波に相違なかった。よほど火力のある強薬で遠方から撃ったものだという証拠は、弾うなりと音響のあいだに、息を二つ吸うほどな時間があったのでも分った。

武蔵は？――と、見れば、矢矧の橋桁の陰へと、逸はやく跳んで、蝙蝠がとまったように、ぺたと身を屈めていたのである。

「……？」

隣の筆屋の夫婦が、いつも気に病んでいっている言葉が思い出された。――しかし武蔵には、この岡崎に、自分を敵視する者があることさえ不思議だった。何者なのか、思い出せないのである。

そうだ。

今夜はそれを一つ見届けてやろうか。身を橋桁へ貼りつけた途端に、彼は考えていた事だった。――で、いつまでも、息をこらしてじっとしていた。

だいぶ間があった。そのうちに、二、三人の男が八帖の丘の方から松の実みたいに風に吹かれて駈けて来た。そして案のじょう、武蔵が最前立っていた辺りの地上をしきりに見廻している様子なのだ。

「はてな」

「見えんなあ」

「も少し、橋寄りの方ではなかったろうか」

すでに、狙撃の的は、死骸になって仆れているものと考えて、火縄も投げ捨て、鉄砲だけを持って、やって来たらしいのである。

鉄砲の真鍮巻が、ピカピカ光って見える。それは戦場に持ち出しても立派な物だった。抱えこんでいる男も、他のふたりの侍も、黒いでたちをして眼元だけしか出していなかった。

苧環

一

何者か？

そこに見えている二、三人の人影には、思い当りもなかったが、いつ何時(なんどき)でも、自分の生命に対する敵への心構えは、武蔵にあった。

武蔵ばかりでなく、およそ今の時勢に生きている人間には、すべてに、日常に、その要心があった。

殺伐な無秩序な、乱国の余風は決してまだ治まり切っているとはいえない。人は詭謀(きぼう)や反間(はんかん)の中に生きているので、要心すぎて疑いぶかく、妻にさえ油断せず、骨肉の間さえ破壊されかけた一頃の——社会悪はなお人間のなかに澱(よど)んでいた。

まして。

きょうまでにも、刃(やいば)と刃のあいだに、武蔵の手にかかった者、或は、彼のために、社会からも敗北して去った者は、かなりな数にのぼっている。そうした敗者の係累(けいるい)一門、その家族らまでを合せればどれほどな数かわからない。

元より、正当な試合、又は非は彼にあって、武蔵にない場合の結果でも——およそ、討たれた者の側からいえば、あくまで、武蔵は敵(かたき)と視(み)よう。たとえば、又八の母などが、そのもっともよい例である。

だから、このような時勢に、斯道(このみち)にこころざす者には、たえまなく、生命の危険が伴った。為に、一つの危険を斬り払うと、さらにそれが次の危険を生み、敵を作ったが——しかし、修行する身には、危険は又となき砥石(といし)であり、敵は不断の師であるともいえるのだ。

寝る間も油断のならない危険に研(と)がれ、絶え間もなく生命を窺う敵を師として、しかも剣の道は、人をも活かし、世をも治め、自己をも菩提(ぼだい)の安きに到って、悠久の生ける悦びを、諸人と共

に汲み頒とうという願いにほかならないのである。——その至難の道の途中で、稀々、つかれ果て、虚無に襲われ、無為に閉じ籠められる時——卒然として、撓めていた敵は、影を顕わして来るものとみえた。
矢矧の橋桁に——
武蔵は今、ひたと、身を寄せて屈みこんでいたが、その一瞬に、彼のこの日頃の惰気も迷いも、毛穴からサッと吹き消されていた。
素裸になって、目の前の危険に曝された生命のすずしさである。
「……はて？」
わざと、敵を近よせて、敵の何者であるかを確かめようと思い、息をこらしていると、その影は、期していた武蔵の死骸がそこらに見当らないので、はっと気づいたらしく、彼等も亦、物陰へかくれて、人なき往来と橋の袂を、かえって気味わるく窺い直している様子だった。
その動作に。
武蔵が、はて？——と感じたわけは、怖ろしく敏捷なのと、黒扮装とはいえ、差刀の鐺や足拵えなど浮浪の徒や、ただの野武士とは、見えなかったからである。
この辺の藩士とすれば、岡崎の本多家、名古屋の徳川家であるが、そういう方面から、危害を向けられる理由が考えられなかった。——不審だ。人違いかも知れない。
いや人違いにしては、先頃来から露地口を覗き見したり、裏藪から眼を光らしたりする者があると隣の筆屋の夫婦までが感づいていた事実がおかしい。やはり武蔵を武蔵と知って、機を窺っている者に相違はない。

「ははあ……橋向うにも仲間がいるな」
武蔵が見ていると、物陰の暗がりへ潜んだ三名は、そこで火縄をつけ直し、河の対岸へ向って、その火縄を振っていた。

二

そこにも、飛び道具を持って潜んでいるし、橋向うにも敵の仲間がいるとすると、敵は相当、備えを立てて、
（今宵こそは）
と、手具脛ひいているものと思われた。
武蔵の八帖寺通いも幾夜となく、この橋を通ることもしげしげであったから、敵は、それを確かめ、地の利と配置とを、十分に用意しておく余裕もあったにちがいない。
で――橋桁の陰から、武蔵は、うかと離れられない。
跳り出るとたんに、ドンと弾が飛んでくる事は知れきっている。そこの敵を捨てて、一散に橋を駈け渡ってしまうのはなおさら危険きわまるといっていい。――といって、いつまで、じっと屈んでいるのも策を得たものであるまい。なぜなら、敵は、対岸の仲間と、火縄で合図を交わしているから、事態は、時の移るほど、彼の不利になって迫って来るものと見なければならないからだ。
が武蔵には、間髪のまに、処する方法が立っていた。兵法によらず、すべての理は、それを理論するのは、平常の事で、実際にあたる場合は、いつも瞬間の断決を要するのであるから、それ

は理論立てて考えてする事ではない。ひとつの「勘」であった。
　平常の理論は「勘」の繊維をなしてはいるが、その知性は緩慢であるから、事実の急場には、まにあわない知性であり、ために、敗れる事が往々ある。
「勘」は、無知な動物にもあるから、無知性の霊能と混同され易い。智と訓練に研かれた者のそれは、理論をこえて、理論の窮極へ、一瞬に達し、当面の判断をつかみ取って過らないのである。
　殊に、剣に於ては。
　今の武蔵のような立場に立った時に於ては。
　武蔵は、身を屈めたまま、そこから大きな声で、敵へいった。
「潜んでも、火縄が見えるぞ。益ない事だ。この武蔵に用事あらば、ここまで歩け。武蔵はここだっ。ここにいるッ」
　川風が烈しいので、声は届いたか届かなかったか疑われたが、その返辞に代えて、すぐ鉄砲の第二弾が、武蔵の声がした辺りを狙って撃って来た。
　元より武蔵はもうそこに身を置いていなかった。橋桁に添って、九尺もいる所をかえていたが、弾と行き交いに、彼の体はそこから敵のかくれている暗がりへ向って一躍した。
　次の弾をこめて、火縄の火を強薬へ点じている間などなかったので、敵の三名は狼狽を極め、
「や。や」
「う。うぬ」
　刀を払って、おどって来た武蔵を、三方から迎えたが、それさえ辛くも間に合った姿勢なの

で、味方と味方の聯繋(れんけい)は取れていない。
武蔵は、三名のなかへ割って入ると、真(ま)っ向(こう)の者を、大刀で一颯(さつ)の下に断ち伏せ、左側の男を、左手で抜いた脇差で、横に薙(な)いだ。
一人は逃げ出したが、よほど慌てたとみえて、橋桁の袂へ、盲とんぼのように打つかり、そのまま矢矧の大橋を、のめるように駈けて行った。

三

——それから、武蔵も、常の足どりで、ただ欄干に身を添いながら、大橋を渡って行ったが、何の事も起って来ない。
しばらくの間、来る者あれば待つように、身を佇(たたず)ませていたが、かわった事もなかった。
家に帰って彼は眠った。
すると、翌々日。
無可先生として、手習い子の中に交(ま)じって、自分も一脚の机に倚(よ)り、筆を持って習字していると、
「御めん——」
軒端からさし覗いて、訪れた侍がある。二人づれだ。狭い土間口は、子供の穿物(はきもの)だらけなので、そういってから、木戸もない裏の方へ廻って来て、縁先へ立った。
「——無可殿は御在宅だろうか。某(それがし)どもは、本多家の家中で、さるお人の使いとして参ったのだが」

子供らの中から、武蔵は、顔をあげて、
「無可は、私ですが」
「尊公が、無可と仮名しおる、宮本武蔵どのか」
「え」
「お隠しあるな」
「いかにも武蔵に相違ござらぬが、お使いの趣は」
「藩の侍頭、亘志摩どのをご存じあろうが」
「はて。存じ寄らぬお人でござるが」
「先様では、よう知っておいでられる。其許には二、三度ほど、当岡崎で俳諧の席へ顔を出されたであろうが」
「人に誘われて、俳諧の寄合へ参りました。無可は、仮名に非ず、俳諧の席でふと思い寄って名づけた俳号でござる」
「あ。俳名か。――それはまあ何でもよろしいが、亘殿も、俳諧を好まれ、家中の吟友も多い。一夜、静かにおはなし申したいと仰せでござるが、お越し賜わろうか」
「俳諧のお招きなれば、他にふさわしい風流者がござろう。気まぐれに、当地の俳莚へ、誘われた事はあるものの、生来、雅事を解さぬ野人でござれば」
「あいや。何も、俳莚を開いて句をひねろうというのではない。亘殿には、仔細あって、其許を知っておられる。――で会いたいというのが趣旨。又、武辺ばなしなど、聞きもし、話もしたし――というのであろうと存ぜられる」

手習子たちは皆、手を休めて、先生の顔と庭に立っている二人の侍の顔とを、心配そうに見較べていた。

武蔵は、黙って、そこから縁先の使いを、正視していたが、考えを決めたものとみえ、

「よろしゅうござる。お招きに甘えて参堂いたそう。して、日は」

「おさしつかえなくば、今夕にでも」

「亘殿のおやしきは、どの辺？」

「いや、お越し下さるとあれば、その時刻に、駕を向けて、お迎えに参ろう」

「然らば、お待ちする」

「では――」と、使いの二人は、顔を見あわせて、頷きを交わしながら、

「お暇しよう。――武蔵どの、御授業の中、失礼した。では相違なくその時刻までにお支度おきを」

と、帰って行った。

筆屋の女房は、隣の台所から、顔を出して、不安そうに覗いていた。

武蔵は客が帰ると、

「これこれ、人のはなしに気をとられて、手を休めていてはいかんな。さ、勉強せい。先生もやるぞ。人のはなしも、蝉の声も、耳にはいらぬまでやるのだ。小さい時に怠けていると、この先生みたいに、大きくなっても手習していなければならんぞ」

墨だらけな、子供たちの手や顔を、見まわして笑いながらいった。

四

黄昏——

武蔵は身支度していた。

袴を着けて。

「よしたがよい。何とかいうて、断りなされた方が……」

その間、隣のかみさんは、縁先へ来て止めていた。果ては、泣かぬばかりに。

だが、ほどなく、迎えの駕は露地口へ来てしまった。もっこのような町駕ではない。輿に似た塗籠である。それにけさの侍二名、小者三人ほど付いて。

何事やらん——と近所界隈は眼をそばだてた。駕のまわりに人立ちがした。武蔵が侍たちに迎えられてそれへ乗ると、寺子屋のお師匠さんはえらい出世をなさったと、まことしやかにもう噂する者がある。

子供らは子供らを呼び集めて、

「先生はえらいんだぞ」

「あんなお駕は、えらい人でなければ、乗れないよ」

「どこへ行くんだろ」

「もう帰らないのかしら」

駕戸をおろすと、侍は、

「こら、退け退け」

先を払って、

「いそげ」

と、駕仲間へいった。

空が赤かった。町のうわさは夕焼に染められている。人が散った後へ、隣のかみさんは、瓜の種やら、ふやけた飯つぶの交じっている汚水を撒きちらした。

ところへ。

若い弟子を連れた坊さんがそこへ来た。法衣を見てもすぐ分る通り禅家の雲水さんである。油蟬みたいな黒い皮膚をし、かなつぼ眼というのか、眼のくぼが凹んでいて、高い眉骨の下から、眸がぴかぴかしている。四十から五十ぐらいな間の年齢であろう。こういう禅家の人の年齢は、凡眼ではよく分らない。

体は、小づくりで、贅肉が少しもない。痩せっぽちなのだ。しかし、声が太い。

「おい。おい」

連れている白瓜みたいな弟子を振顧って、

「又八とやら。おい又八坊」

「はい、はい」

そこらの軒並びを覗き歩いて、うろついていた又八坊は、蒼惶として、油蟬のような顔した雲水さんの前へ来て、頭を下げた。

「分らないのかい」

「ただ今、さがしております」

「おまえ、一度も、来た事はないのか」
「はい。いつも、山へ足を運んでくれますのでつい」
「訊いてみなさい。その辺で」
「は。そう致しましょう」
又八坊は、歩きかけると直ぐ、戻って来て、
「愚堂さま。愚堂さま」
「おい」
「分りました」
「分ったか」
「ついそこの、眼の前の露地口に、看板の板が打ってございました。――童蒙道場、てならいしなん、無可と」
「ウむ。そこか」
「おとずれてみましょう。愚堂さまには、ここでお待ち下さいますか」
「何。わしも参ろうよ」
おとといの夜、武蔵とあんな話をして別れたので、きのうも今日も、どうしたかと気にかけていた又八に、きょうは大きな歓びが降って来た。
待ちかねていた――二人して蜀を望むように待っていた東寔愚堂和尚が、ふらりと、旅よごれのまま、八帖寺へ見えたのである。
さっそく、又八から、武蔵の事を伝えると、和尚はよく記憶していて、

「会ってやろう。呼んで来い。いや彼ももうひとかどの男。こちらから出向いて行こう」
と、八帖寺では、わずかの休息をしたきりで、直ぐ又八を案内に、町へ下りて来たのだった。

五

亘志摩は、岡崎の本多家の内でも、重臣の列にある事は、分っていた。けれどその人物については、武蔵は、少しも知る所がなかった。
――一体、何で自分を、迎えによこしたのか？
それについても、彼には思い寄りもなかった。強いて求めれば、ゆうべ矢矧の辺りで家中らしい黒扮装の卑怯者を、二人も斬り捨てたので、それを取り上げて、何か難題を迫るのではなかろうか。
又は。――日頃から自分をつけ狙っている何者かが、手にもてあまして、遂に、亘志摩という背後の黒幕を切って落し、正面からものいおうという陥穽か。
いずれにしても、吉い事であろうとは考えられない。にも関らず、身を迎えに委ねて行くからには、武蔵にも覚悟はあるのであろう。
その覚悟とは？
もし問う者があれば、彼は、
臨機。
と一語で答えるだろう。行ってみなければ分らない事なのだ。生兵法の推理はこの場合禁物である。機にのぞんで、咄嗟の肚を決めるほかに兵法はないのである。

その変が、行く途中で起るか、行った先で起るか。
敵が、柔をよそおってくるか、剛をあらわして来るか。
それも未知数である。
海の中を揺れて行くように、駕の外は暗く、そして松風の音だった。岡崎城の北郭から外郭の一帯は松が多い。さては、その辺をいま通って行くな——
「…………」
武蔵は覚悟の人とも見えない姿だった。目を半眼に閉じ、うとうとと、駕の中で眠っていた。
ギイ、と門の開く音。
駕をになう小者の足幅はゆるやかになり、そして、家人らの声は微けく、そこここに映す灯影はやわらかい。
「……着いたのかな」
武蔵は駕を出てみる。いんぎんに迎える家従らは、黙々、彼を広い客間へ通した。簾は捲かれ、四方は開け放たれ、ここも濤音のような松風のなかに在って、夏もわすれる涼しさのかわりに、燭の明滅ははなはだしい。
「亘志摩でござる」
主は、直ぐ対した。
五十がらみの人。見るからに剛健で、軽薄の風がない。典型的な三河武士だ。
「——武蔵です」
礼を執る。

「……お楽に」
志摩は、会釈して、さて——という顔をしていった。
「一昨夜、家中の若侍二人、矢矧の大橋で、斬って捨てられたそうな。……事実でおざろうか」
ぶつけである。
思慮の遑もない。又、武蔵はそれをつつむ気持も毛頭ない。
「事実でござります」
さて。——それからどう出て来るか。武蔵は、志摩の眸を、凝視した。澄み合った二人の面に、燭の明滅がしきりとはためく。
「それについて」
と、志摩は口重く、
「——お詫びせねばならぬ。武蔵どの、まず許されたい」
と、少し頭を下げた。
しかし、武蔵は、その挨拶を、まだそのままには受け取れなかった。

六

今日、自分の耳に這入ったばかりであるが——と亘志摩は、前提して、
「藩へ、死亡届が出た。矢矧の辺で斬られたのだとある。調べさせてみると相手方は貴公との事。貴公の名は、疾く承っていたが、当御城下にお住いとは、それで、初めて知ったのでござる」

と、話しだした。
嘘は、見えない。武蔵も、信じて、聞き出した。
「――で、何が故に、貴公を闇討ちにしようと計ったか、厳重に、調査いたしてみた所、御当家のお客分に、東軍流の兵法家で三宅軍兵衛といわるる仁があるが、その門人と、藩の者四、五名が、謀ってやった事が相分った」
「……ははあ?」
なお、武蔵は解せない顔。
だが、次第にそれも解けた。亘志摩の話によって明確になった。
三宅軍兵衛の直弟子のうちに、以前、京都の吉岡家にいた者があり、又、本多家の子弟のうちにも吉岡門流の者が何十人となくある。
そうした人々の間に、
(近頃、御城下で、無可と変名している牢人は、京都の蓮台寺野、三十三間堂、一乗寺村などで、相次いで吉岡一族の者を葬り、遂に、吉岡家そのものを、断絶にまで導いてしまった宮本武蔵だといううわさだが)
と、伝えられ出した事から、今なお、武蔵に深い怨恨を抱いている者の口火から、
(眼障りだ)
となり、
(討てぬものか)
と、囁かれ出し、遂に、

「殺れ」

と、なってしまって、かなり根気よく機を測っていたが、一昨夜のような失敗に帰してしまった理だというのであった。

吉岡拳法の名は、今もなお、慕われている。諸国行く先々で聞かぬ所はない。いかにその盛んであった時代には、多くの門下を、諸国に持っていたかも察知できる。

本多家だけでも、その刀流を汲んだ者が、何十人もあるというのは本当だろう。――武蔵は、事の真相にうなずくと共に、自分を恨んでいる人々の気持もわかる気がした。しかし、それは武門の上でなく、人間の単なる感情としてのみである。

「――で、その不心得と、恥ずべき卑劣は、きょう御城内で、その者どもへ、きつく叱りおいた。ところが、お客分の三宅軍兵衛殿には、自身の門人も交じっていた事ゆえ、いたく恐縮されて、ぜひ其許へ会って、一言、お詫びしたいとある。……どうじゃな、ご迷惑でなくば、これへ呼んで、お紹介せいたすが」

「軍兵衛殿には、ご存じない儀とあれば、それには及びませぬ。兵法者の身に取れば、前夜の事ども路傍まま ある事」

「いや、それにせよ」

「謝罪の何のというのでなく、ただ道を語る人としてなら、かねてお名まえを聞いておる三宅殿、お目にかかる事に異存もござりませぬが」

「実は、軍兵衛殿も、それを望んでおるのじゃ、――さらば、早速にも」

亘志摩は、すぐ家臣に、その旨を伝えさせた。

三宅軍兵衛は、先に来て、別の間に待っていたものとみえ、弟子四、五名連れて、ほどなく這入って来た。弟子というのも、勿論、歴乎とした本多家の家中なのである。

七

危惧は去った。――とにかく一応そう見えた。
亘志摩から、三宅軍兵衛とその他の者を、紹介せると、軍兵衛も、
「どうか、一昨夜の事は、水に流して」
と、門人の非を謝し、それからは隔意もなく、武辺ばなしや、世間ばなしに、座は賑わった。
武蔵が、
「東軍流という御流名は、めったに、世間にも、同流を見かけぬように存ずるが貴方の御創始か」
と、問うと、
「いや、てまえの創始ではござらぬ」
と、軍兵衛がいう。
「てまえの師は、越前の人、川崎鑰之助と申し、上州白雲山に籠って、一機軸を開いたと、伝書にはあるなれど、実は天台僧の東軍坊なる人から、技を習んだものらしゅう御座る」
と、武蔵の姿を、改めて、しげしげ見直しながら、
「かねて、お名前だけを聞いておった感じでは、もっと、御年配かと存じていたが、お若いので、意外でござった。――これを御縁にぜひ一手、御指南にあずかりたいが」

と、迫った。
武蔵は、
「いずれ折もあらば……」
と、軽くかわし、
「道不案内ゆえ」
と、志摩へ挨拶しかけると、いやいやまだお早い、帰りは誰か、町の口までお送りさせる——
と引き止めて、軍兵衛が又、
「実は其許のために、門人ふたりが矢矧の橋もとで、斬られたと聞いた時、てまえも駈けつけて、その死骸を見たのであったが——二つの死骸の位置と、二人のうけた刀痕とに、どうも合致せぬ不審があったのでござる。……で、逃げ帰った門人のひとりに糺すと、よくは見えなかったが、確かに、其許には両の手に、同時に刀を把られたらしいとの申し立て。さすれば、世にもめずらしい御流儀じゃ。二刀流とでもいうので御座るかな？」
武蔵は、微笑していう。自分はまだかつて、意識して二刀を用いた事はない。いつも一体一刀のつもりである。いわんや、二刀流などと自分から称えたことなどは、今日までない事である。
しかし、軍兵衛たちは、
「いや、御謙遜を」
と、承知しない。
そして、二刀の法に就いて、いろいろな質問を出し、いったいどういう習練をし、どれほどな力量があったら、二刀を自由に使いこなせるものか——などと幼稚な事を臆面もなく訊いてく

る。

武蔵は、帰りたくて堪らなかったが、こういう人たちに限って、その質問に満足を得ないと、帰しそうもないので、ふと、床の間に立てかけてある二挺の鉄砲に目をとめて、あれを御拝借できようかと、主の亘志摩へいった。

八

主の許しを得て、武蔵は、床の間から二挺の鉄砲を取って、座の中央にすすんだ。

「……はて？」

何をするのかと、人々は怪しみながら見まもった。二刀についての質問を、二挺の鉄砲で、どう答えるつもりかと。

武蔵は、鉄砲の筒のほうを、左右の手に、持ちながら、片膝を立て、

「二刀も一刀。一刀も二刀。左右の手はあるも体は一体。すべてに於て、道理にふたつなく、理の窮極に於ては、何流何派といえど変りのある訳はござらぬ。――それを眼にお見せ申そうならば」

と、両手に握った鉄砲を示し、

「御免」

といったかと思うと、遽に、矢声をかけて、その二挺をぶんぶんと振り廻した。

凄まじい風が座に起って、武蔵の肱が描く二挺の鉄砲の渦は、さながら苧環の旋るように見えた。

「…………」

何がなし人々は、気をのまれて、面も白け渡ってしまった。

武蔵は、やがて直ぐ、肱を収めて、鉄砲を元の位置へもどすと、その機に、

「失礼いたした」

と、微笑を見せたのみで、二刀の法については、何も説明らしい説明もせず、そのまま席を辞して、帰ってしまった。

呆っ気に取られたまま忘れてしまったものか、お帰りには誰か付けて送らせる――といった筈だが彼が門を去っても、送って来る者はない。

その門を、振り向くと――

颯々と墨のような松風の中に、何やら無念を遺しているような、客間の燈が微かに瞬いていた。

「…………」

武蔵は、何やらほっとした。白刃の囲みを脱したよりも、こよいの門は虎口だった。形のない、底意の知れない相手だけに、彼も実は、用意する策もなかったのであった。

それにしても人々に武蔵と知られ、又、事件を醸したからには、もう岡崎にも長居はならない。こよいのうちにも立退くのが賢明だが――

「又八との、約束もあるし、どうしたものか？」

独り案じながら、松風の闇を、歩いて来ると、岡崎の町の灯が、街道の突当りに、ちらと見え出して来た頃、路傍の辻堂から、

「おお武蔵どの。――又八だ。心配しながら、待っていたのだ」
思いがけなく、その又八が、声をかけて、無事を喜んだ。――が、
「どうして、此処へ」
と、武蔵は疑う。
しかしふと、辻堂の縁に、腰かけている人影に気づくと、彼は又八から仔細を聞いている遑もなく身を進めて、
「禅師ではございませぬか」
と、その脚下に額ずいた。
愚堂は、彼の背に、眼をそそいで、ややしばらくの間を措いてから、
「久しいのう」
と、いった。
武蔵も、面を上げ、
「お久しゅうござりました」
と、同じ事をいった。
だが、その簡単な言葉のなかに、万感がこもっていた。
武蔵に取っては、自分が近来、突当っている無為から自分を救ってくれる者は、沢庵か、この人しかないと、待ちに待っていたその愚堂和尚であったから、あたかも、闇夜に月を仰いだように、愚堂の姿を仰いだのであった。

九

又八も愚堂も、武蔵がこよい、無事で帰るかどうかは、不安に思っていたのである。悪くしたら武蔵は、亘志摩の邸から帰らぬ者になるのではないか――などと憂いながら、それを確かめるべく、これまで来た途中だった。

夕方。

行き交いに、武蔵が出た後を訪ねたところ、隣家の筆職人の女房が、常々、武蔵の身辺に、案じられる節のあった事や、きょう侍の使者が見えた事など――つぶさに聞かせてくれたので、さては。

と、そこで帰りを待つ気にもなれず、何か取る策もあろうかと、亘志摩の邸附近を心あてに、これまで来たわけである――と又八は話した。

武蔵は、聞いて、

「そんな心配を煩わしていたとは思わなかった。かたじけない」

と、彼の親切気には、深く謝したが、なお、愚堂の脚下にひざまずいた身はいつまで、起そうともせず、じっと地に坐っていた。

そして、やがて、

「和上っ」

と、強く呼んだ。愚堂の眸を、きっと見上げたままにである。

「なにか」

愚堂は、武蔵の眼が、自分に何を求めているか、母が子の眼を読むように、すぐ覚っていたが、
「何か」
かさねて訊ねた。
武蔵はひたと、両手をつかえ、
「妙心寺の床に参禅して、初めてお目にかかりました頃から、はや十年に近くなりました」
「そうなるかのう」
「月日は十年を歩みましたが、自分は何尺の地を這ったか。顧みて、自分でも疑われて参りました」
「相変らず、乳くさい事をいう。知れた事じゃ」
「残念でござります」
「何が」
「いつまで修行の至らぬ事が」
「修行、修行と、口にしているうちはまだ駄目じゃろうて」
「といって、離れたら？」
「すぐ縒が戻ろう。そして、初めから物を弁えぬ無知の者より、もっと始末のわるい、人間の屑ができる」
「離せば辷り落ち、登ろうとすれど攀じ切れぬ、絶壁の中途に、私は今、あがいております。
――剣についても。亦、一身についても」

「そこだな」
「和上っ。――お目にかかる今日の日を、どれ程、お待ちしていたか知れませぬ。どうしたらいいでしょう。如何にせば、今の迷いと無為から脱し切れましょうか」
「そんな事、わしは知らぬ。自力しかあるまい」
「もいちど、私を、又八と共に、御膝下へおいて、お叱り下さい。さもなくば、一喝、虚無の醒めるような痛棒をお与え下さい。……和上っ。お願いでござります」
ほとんど、顔へ土のつくばかり、武蔵は地に伏して叫んだ。涙こそ流さないが、声は咽んでいた。苦悶の咽びが悲痛に人の耳を打った。
だが、愚堂の感情は、ちっとも動いたとは見えない。黙って、辻堂の縁を離れたかと思うと、
「又八。来い」
と、のみいって、先へ歩き出した。

十

「和上っ」
武蔵は起って、追い縋った。そして愚堂の袂をおさえ、なおも一言の答えを求めた。
すると――
愚堂は黙って、かぶりを振って見せた。けれどなお、武蔵が手を離さないので、こういった。
「無一物」
と。――そこで語を切って、

「何かあらん。施与又、他に何をか加うあらん。――有るは、喝っ」
拳を振りあげた。
ほんとに撲りそうな顔をした。
「…………」
武蔵は、袂を離して何かいおうとしたが、愚堂の脚はすたすたと先へ急いで振向きもしない。
「…………」
茫然、武蔵が、その背を見送っていると、後に残った又八が、早口に彼をなぐさめていった。
「禅師は、うるさい事が嫌いらしい。寺に見えた時、おれがおぬしの事や、自分の気持を述べて、弟子入りを頼むと、よくも聞かないで、――そうか、では当分、わしの草鞋の紐でも結んでみろ、といった。……だからおぬしも、くどい事をいわずと、黙って後に尾いて来る事だ。そして機嫌のいいところを見てよ、何かと、何遍でも訊いてみたらいい」
――と、彼方で。
愚堂は足を止めて、又八を呼んでいた。又八は、はいっと大きく答えながら、
「いいか。そうしろよ」
いい残すと、あわてて愚堂の後を追いかけて行った。
愚堂は又八が気に入ったらしい。弟子として許されている彼が、武蔵には、羨ましかった。
――そして又八のような単純さと、素直さのない自分が顧みられた。
「――そうだ。たとい何と仰っしゃられようと」
武蔵は、くわっと、体が燃えるように思った。――怒って振り上げたあの鉄拳を横顔に受くる

までも、一言の教えをここで乞わずに又いつの日会う折があろう。何万年とも知れぬ悠久な天地の流れのうちに、六十年や七十年の人生は、さながら電瞬のような短い時でしかない。その短い一生のあいだに、会い難き人に会うという事ほど尊いものはない。

「——その尊い機縁を」

と、武蔵は、眦に熱涙をためて、愚堂和尚の去りゆく影を見つめた。そしてその機縁を、やわか今、逸してなろうかと思った。

どこまでも！

一言の答を得るまでは。

武蔵はやにわに追いかけた。そして愚堂が歩く方へ、彼も足を早めて、尾いて行った。

知ってか。知らずか。

愚堂は、八帖の方へは、帰らなかった。恐らくその足は、ふたたび八帖の寺へ帰る意志はなく、もう水と雲とを住居としている心なのであろう。東海道へ出て、京へさして行くのであった。

愚堂が、木賃に泊れば、武蔵は木賃の軒端に寝た。

朝、又八が、師の草鞋の紐をむすんで立つ姿を見て、武蔵は、友のために欣しかったが、愚堂は武蔵のすがたを見ても、言葉もかけてくれなかった。

しかし、武蔵は、もうそれに心を屈しなかった。むしろ愚堂の眼ざわりにならぬよう遠く離れて、日ごとに慕い歩いて行った。——その夜そのまま、岡崎に残して来た裏町の一庵も、そこの机も、一節切の竹花生も、亦、隣のかみさんやら、近所の娘の眼やら、藩の人々の恨みや縺れや

らも、今は一切、すべてを忘れ果てて。

円(まる)

一

京へ、京へ、道は近くなる。
察するに愚堂は、京へさして歩いているのであろう。花園妙心寺は、その総本山でもあるし
――。
だが。
その京都へはいつ着く事やら、禅師の旅は気まかせだった。雨に降りこめられて木賃から出て来ない日、武蔵が窺(うかが)ってみると、又八に灸(きゅう)をすえさせていた。
美濃(みの)まで来た。
そこの大仙寺には七日もいた。彦根の禅寺にも幾日か泊った。
禅師が木賃に泊れば、附近の木賃へ。寺ならば寺の山門へ、武蔵はどこにでも寝た。そしてひたすら、禅師の口から一言の教えを授けられる機会を待った。いやそれを追いつめて行ったのだった。
湖畔の寺の山門に寝た晩、武蔵は、今年の秋を知った。いつか秋だった。

顧みると、わが身のすがたは、まるで乞食のようになっている。蓬々と伸びた髪の毛も、禅師の心の解ける日までは、櫛を入れまいとしていたし、風呂にも入らず、髯も剃らず、雨露にまかせた衣服はつづれ、腕も胸もかさかさと、松皮のような撫で心地がする。

吹き落ちるような星、秋の声。

一枚の莚を、宿として、武蔵はふと、

「何の愚ぞ」

と、自分の狂的な今の気持を、冷ややかに嘲笑った。

一体、何を知ろうとするのだ。何を禅師に求めるのだ。

こんなにまで、追求しなければ人間は生きられないものか。

憐れになる。

愚かな身に住む半風子までが不愍になる。

禅師はいった。求める自分へ対して、はっきり断っている。

無一物。――と。

その人へ向って、無い物を強いて求めるのが無理だ。いくら尾いて来ても、禅師が、路傍の犬ほども顧みてくれないからとて恨む筋もない。

「…………」

武蔵は、髯の中から、月を見た。山門の上は、いつか秋の月だった。

まだ蚊がいる。

彼の皮膚は、もう蚊の針さえ感じない。しかし、喰われた後は血になって、それが無数に、胡

麻粒ほどな腫物になっていた。
「ああ、分らない」
たった一つ、何かしら、分らないものがある。――それさえ解ければ、凝結している剣も、すべても、刮然と、解けそうな気がするのであったが、どうにもならない。
もし、自分の道業も、ここで終ってしまうなら、むしろ死したがましだと思う。生きて来たかいが見出せないのだ。寝ても眠られないのだ。
では。
その分らない物とは何、剣の工夫か、それのみではない。処世の方角か。そんな事にも止まらない。お通の問題か。否とよ、恋のみで、男がこんなにまで痩せ細ろうか。
すべてをつつんだ大きな問題だ。しかし又、天地の大から観たら、ケシ一粒の小さい事かもしれない。
武蔵は、莚を身に巻いて、蓑虫のように石の上に寝ころんだ。――又八はどう寝ているだろう。苦しみを苦しまない又八と、苦しむために苦しみを追っているような自分と――思いくらべて、ふと羨ましかった。
「……？」
何を見たか、そのうちに武蔵は起き上がって、山門の柱を見つめていた。

二

山門の柱に懸っている長い聯の文字に、武蔵の眼はじっと対っていた。月明りに読まれるその

二柱の字句を辿(たど)ってみると、

　汝等請ウ其本(ソノモト)ヲ務メヨ
　白雲ハ百丈ノ大功ヲ感ジ
　虎丘ハ白雲の遺訓ヲ歎ズ
　先規玆(カク)ノ如シ
　誤ッテ葉ヲ摘ミ
　枝ヲ尋ヌルコト莫(ナク)ンバ好シ

「…………」

　これは開山大燈の遺誡(いかい)の文にあった言葉かと思う。
——誤ッテ葉ヲ摘ミ枝ヲ尋ヌルコト莫ンバ好シ。
とあるそこだけを、心に沁みて読み返していた。
枝葉——
そうだ。いかに、葉や枝先にのみ、煩(わずら)いを繁茂させている人間の多いことか。
(自分も)
と、そこに顧みて、彼は、急に一身が軽くなった。
その一身に体(たい)している一剣になぜ成りきらないか。なぜ傍(わき)を見るか。なぜそこに澄みきらないか。
　あの事は？
　この事は？

要らざる右顧左眄だ。一道をつきぬくのに何の傍見。

——とは思うが、その一道に行詰っていればこそ、右顧左眄が生じるのだった。葉を摘み枝を尋ねる愚かな焦躁に責められ惑わされてくるのである。

どうして、その行詰りを打開するか。核に入って核を破るか。

自笑十年行脚事
瘦藤破笠扣禅扉
元来仏法無多子
喫飯喫茶又著衣

これは愚堂和尚が自嘲の作という一偈であった。武蔵は今、それを思いだした。自分もちょうどその年齢の頃であった。初めて妙心寺に愚堂の名を慕って訪ねてゆくと、愚堂はいきなり、

(汝、そも何の見地かあって、愚堂門の客たらんとするか)

と、足蹴にかけないばかり大喝で追い払われた。その後、愚堂の心にかなう所を認められたか、許されて室に参じたが、或る折、前の一詩を示して、

(修行修行といってるうちは、まあ駄目じゃろう)

と、嗤われたものであった。

自笑十年行脚事——

と、愚堂は疾くに——十年も前に自分に教えていた。しかもそれから十年後の今もまだ、道にさまよっている自分を見ては、

(救い難い愚物)

と、あいそも尽き果ててしまわれたに違いない。
呆然、武蔵は立っていた。寝もやらず、山門のまわりを巡って——
すると、遽に。
この夜半を、寺から立って行く者があった。山門を出て行く時、ふと見ると、又八を連れた愚堂である。
いつになく早い脚で。
何か、本山に急用でも起って京へ急ぐのか。寺の人々の見送りも断って、瀬田の大橋を真っ直に。
武蔵は、もちろん、
「——遅れては」
と、白い月の下の影を追って、果てなく慕って行った。

三

軒並び寝しずまっていた。昼見る大津絵屋も、混雑な旅籠屋も、薬の看板も、戸が閉って、人なき深夜の往来は、ただ月ばかりが恐ろしく白い。
大津の町。
そこも、またたく間に過ぎて。
道は、のぼりになる。三井寺や世喜寺の山には、ひっそり夜霧が被っていた。逢う人も稀だ。ほとんどない。

やがて、峠の上へ出た。

「………」

先の愚堂は立ちどまっている。又八坊に何か話しかけ、月を仰いで一息ついている姿だった。

もう、京は眼の下。振返れば、琵琶の湖もひとための高さ。けれど、一輪の月以外は、一色である。雲母光りの夜霧の海である。

武蔵は、一足遅れて、そこへ登って来た。計らずも、愚堂と又八が、足を止めていたので、その影を間近に見もし——先からも見られて、何がなし、ぎくとした。

愚堂も無言。

武蔵も無言だった。

しかし、こう眸を向け合ったのは実に何十日目か。

武蔵は、咄嗟に、

「今——」

と、思った。

京都はもうそこだ。妙心寺の禅洞ふかくかくれてしまわれたら、再び又、幾十日を待ったら禅師に接する折があるかわからない。

「……もしっ！」

彼は、遂に叫んだ。

だが、余りに思いつめていたので、その思いに、肋骨はふくらみ、声はつまって、子が親に、いい出し難いことをいおうとする怖れにも似て、[illegible]

「……？」

何だ――。とも訊いてくれないのだ。

まるで乾漆で出来てるような愚堂の顔から、眼だけが白く、それを憎むかのようにするどく、武蔵の影を見つめるだけだった。

「もしっ。和上っ……」

二度目にさけんだ時は、武蔵はもう前後も弁えなかった。ただ燃え苦しむ火のかたまりのように駈け転んで行って、愚堂の跫もとへ、

「一言っ。一言を！……」

とのみいったきりで、大地へ面を伏せていた。

そしてじっと――武蔵は全身でその人の一言を待っていたが、いつまでも、実にいつまでも、答えはなかった。

武蔵は待ちきれず、こよいこそは、抱懐の疑義を糺そうものと、いいかけると、

「聞いておる」

愚堂は初めて、口を開いて、

「又八坊から、毎晩のように、聞いておるので万承知じゃ。……女子の事も」

終りの一句に、武蔵は、水をかけられたここちだった。面も上げ得ずにいた。

「又八。棒切れを貸せ」

愚堂はいって、彼の拾った棒切れをうけ取った。武蔵は、頭上に下る三十棒を観念して、眼をふさいでいたが、棒は彼の頭には来ないで、彼の坐している外を、ぐるりと駈けて廻った。

愚堂は、棒の先で、地へ大きな円を描いたのである。――その円の中に、武蔵の姿は在った。

四

「行こう」
と、棒を捨てた。
そして愚堂は、又八をうながして、すたすた歩み去った。
武蔵は又も、取り残された。岡崎の場合とちがって、ここに至ると、彼も憤然とした。
数十日のあいだ、真心と、惨憺たる苦行をこめて、教えを乞おうとする末輩に、余りにも、慈悲がない。無情酷薄だ。いや、ひとを弄びすぎる！
「……くそ坊主め」
彼方をにらんで、武蔵は、唇を喰いしばった。いつか、無一物などといったのは、絶無の頭脳を――真から空ッぽの頭脳を、さも何かありそうに見せかける坊主常習の似非のことばなのだ。
「ようし、みておれ」
もう恃まぬと思った。世に恃む師があると思ったのが不覚と悔まれもする。自力――以外に道はないのだ。さもあらばあれ、彼も人、自分も人、無数の先哲もみな人間。――もう恃むまい。
ぬッと立った。怒りが立たせたように突っ立った。
「…………」
そしてなお、月の彼方を、睨めつけていたが、漸く、眸の焔が冷めてくると、眼はおのずから、自分の姿と足もとへ戻って来る。

「……や？」
彼は、その位置のまま、身を巡らした。
円い筋のまん中に、立っている自分を見出したのである。
――棒を。
と、先刻、愚堂がいっていたのが思い出された。その棒の先を地にあてて、何か、自分の周囲に迫ったと思ったが、この円い線を描いていたのか――と初めて今、気が付く。
「何の円？」
武蔵は、その位置から、一寸も動かず考えた。
円――
円――
いくら見ていても、円い線はどこまでも円い。果てなく、屈折なく、窮極なく、迷いなく円い。
この円を、乾坤にひろげてみると、そのまま天地。この円を縮めてみると、そこに自己の一点がある。
自己も円、天地も円。ふたつの物ではあり得ない。一つである。
――ぱっ！
と、武蔵は、右の手に一刀を払い、円の中に立って凝視した。影法師は、片仮名のオの字のような象に地へ映ったが、天地の円は、厳として、円を崩してはいない。二つの異なった物でないからには、自己の体も同じ理であるが――ただ影法師が違った形として映る。

「影だ──」
武蔵は、そう見た。影は自己の実体でない。
行き詰ったと感じている道業の壁も亦、影であった。行き詰ったと迷う心の影だった。
「えいッ──」
と、空を一颯した。
左手に、短剣を払った影の形は変って見えるが、天地の象はかわらない。二刀も一刀──そして円である。
「ああ……」
眼が開けたようだった。仰ぐと、月がある。大円満の月の輪は、そのまま剣の相とも、世を歩む心の体としても見ることができた。
「オオ！　……。和上っ！」
武蔵はふいに、疾風のように駈け出した。愚堂の後を追いかけて。
だがもう何を、愚堂に求める気もなかった。ただ、一時でも、恨んだ詫びをいいたかったのだ。
──しかし、思い止まった。
「それも、枝葉……」
と。そして、蹴上の辺りに、茫乎として佇んでいる間に、京の町々の屋根、加茂の水は、霧の底から薄っすらと暁けかけて来た。

飾磨染

一

武蔵、又八などが、岡崎を去って、立つ秋と共に、京都のほうへ移っていた頃、伊織は長岡佐渡に伴われて、海路を豊前へ向い、佐々木小次郎も亦、その便船で、小倉へ帰藩の途についていた。

お杉ばばは、昨年、その小次郎が江戸から小倉へおもむく際、途中まで行を共にして、家事整理と法会のため、一度、美作の郷里へ戻った。

沢庵も、江戸を去り、近頃は、但馬の郷里ではないかという噂。

かくて、その人々の足跡と所在とは、この秋、以上のようにほぼ分っていたが、今なお、杳として分らない者は、奈良井の大蔵の逃亡と前後して、消息を絶ってしまった城太郎。

朱実もどうしたか。

これ又、風の便りもない。

それと、さし当って、生命さえ案じられるのは、九度山へ引っ立てられて行った夢想権之助の身の上であるが、これは伊織の口から、長岡佐渡に洩らせば、佐渡の交渉ひとつで、何とか救いの道はつこうというもの。

もっとも、その前に「関東の諜者」という疑惑の下に、九度山衆の手で殺められてしまえば、これはもはや救いも交渉の余地もない事だが、聡明なる幸村父子の目にとまれば、そんな嫌疑は、立ちどころに晴れ、或は今頃、すでに自由の身になって、かえって伊織の身を、案じ探しているかも知れない。

――むしろ。茲にひとり。

身は無事でも、憂うべき運命の人がある。以上の誰をさし措いても、ひとまずそれを語るべきであろう。いうまでもなく、それはお通。武蔵あるがゆえに、生きもし、希望もし、ひたすら女の道を、女たらんとしながら、柳生の城を離れてから又、嫁ぐ妙齢もはや過ぎかける片鴛鴦の独り身を、旅人の眼に不審られながら、むなしく旅に朽ちんとはして――いったい彼女は、この秋を、どこに武蔵の見た月を見ているのだろうか。

「お通さん、いるかの」
「はい。――おりますが、どなた様ですか」
「万兵衛じゃが」
と、その万兵衛が、蠣殻の白くついている柴垣越しに、顔を伸びあげた。
「オ。麻屋の旦那さまでいらっしゃいますか」
「いつも、ようお働きだのう。――せっかく、働いているところを、邪魔してはわるいが、ちょっと話があるで……」
「どうぞ、おはいり下さいませ。そこの木戸を押して」

と、お通は、髪にかけていた手拭を、藍に染まった青い手で、抓むようにそっと取る。
ここは播州の飾磨の浦で、志賀磨川の水が海へ注ぎ出る所、三角形になっている河口の漁村。
だが、お通が今いる所は、漁師の家ではなく、そこらの松の枝や干竿に、懸渡してある藍染の布を見ても直ぐ知れるように、飾磨染と世間でよぶ紺染を業とする小さい染屋の庭にいるのだった。

二

そうした小さい紺染屋は、この海辺の部落に、何軒もあった。
染法は、搗染といって、何度も染料にかけた藍の布を、臼に入れては、杵で搗くのだった。
だから、ここの紺染は、糸がつづれるまで着ても褪せないといわれて、諸国の需要がある。
杵を持って、紺の布を、臼で搗く仕事は、若い娘たちの仕事として、染屋の垣の内から、どこかの浜へ聞えてゆく。――若い船頭衆のなかに、想う人をもつ娘は、その唄の声でも知れると――里の者はよくいう。
だが。お通は唄わない。
彼女が、ここへ来たのは、夏の頃で、杵をもつ仕事にも、まだ馴れなかった。今思うと――この夏、暑い日盛りを、泉州堺の小林太郎左衛門の店先を、脇目もせず、港の方へ歩いて行った旅の女は――あの折、伊織が後ろ姿をチラと見た女性は――やはり彼女であったかも知れないのである。
ちょうどその頃。お通は、堺の港から赤間ヶ関へゆく便船に乗って、その船が、飾磨へ寄港し

た折この土地へ下りたのであったから。

――と、すれば、何という惜しさ。

運命に盲目な人間のあわれさ。

彼女が乗って来たその船は、廻船問屋の太郎左衛門の持船であったにちがいない。

日こそ違うが、同じ堺港を出た太郎左衛門船には、その後細川家の家士らがこぞって乗船した。

そして、その潮路を、長岡佐渡も、伊織も、巌流佐々木小次郎も通った。

巌流や佐渡とは、よしや顔見あわせても知らずに過ぎようとも、どうして伊織と会えなかったろう。いつの船でも、飾磨の浦には寄るものを。

実の姉！　と、あれほど探している伊織に――。ひとつ浦辺に寄りながら。

いやいや会えなかった筈ともいえるのだ。細川家の家中が乗船したので、胴の間や艫の席には幕を張り繞らし、ふつうの町人、百姓、道者、僧侶、芸人など一般の者はみな、箱のような船底へ区切られ、覗き見もできなかったし、飾磨へ寄って、彼女が船を下りたのも、夜明けのまだ暗いうちであったから、伊織がそれを知るよしもなかった。

飾磨は、乳母の里だった。

彼女がここへ来た事から察しると、春、柳生を立ち、江戸へ行った頃には、もう武蔵も沢庵もいなかった後で、わずかに、柳生家や北条家を訪ねて、武蔵の消息ぐらいを聞き、ふたたびその人に会わばやの一心から――旅へ、旅へ、春から夏を歩き過し、遂に、ここまで来たものと思われる。

ここは姫路の城下に近く、同時に、彼女が育った郷里――美作の吉野郷へも、そう遠くない。七宝寺で育てられた頃の、乳母はこの飾磨の染屋の妻だった。思い出して、身を寄せたものの、故郷に近いので、外を出歩いたこともない。

乳母はもう五十近いのに子もなかった。それに貧乏でもあるし、ただ遊んでいるのも心苦しく、臼搗きの仕事を手伝いながら、ここから遠くない中国街道の頻繁なうわさから、もし武蔵の便りでも知れようかと、唄もない多年の「会えざる恋」を秘めて、染屋の庭の秋の陽の下に、黙黙と、毎日杵を持って想い搗いていたのであった。

そこへ。何か折入って、話があると訪ねて来た万兵衛。近所の麻屋の主人である。

（何であろ？）

お通は、藍の手を、流れで洗って、ついでに、美しく汗ばんだ額も拭いた。

三

「折わるく、小母さんもお留守でございますが、どうぞおかけ遊ばして」

母屋の縁の方へ、誘うと、万兵衛は手を振って、

「いやいや。長居はせぬ、わしも忙しい体じゃ」

と、そのまま、立話に、

「お通さんの郷里は、作州の吉野郷じゃそうな」

「はい」

「わしは長年、竹山城の御城下宮本村から、下ノ庄の辺りへは、よう麻の買い出しに行くが、近

頃、さる所でふと、噂を聞いてな」
「うわさ。それは、誰の？……」
「おまえのさ」
「ま。……」
「それから」
と万兵衛は、にやにやしながら、
「宮本村の武蔵という者のはなしも出たりして」
「え。武蔵さまの」
「顔いろを変えたな。はははは」
秋の陽が、万兵衛の頭に、てらてら遊んでいる。暑いとみえて、万兵衛は脳天へ、手拭の畳んだのを乗せて、
「お吟どのを知ってじゃろ」
と、地へしゃがみ込んだ。
お通も、藍に染まった布桶のそばへ、身を屈めて、
「お吟さまとは、あの……武蔵様のお姉上にあたる？」
「そうじゃ」
大きく頷いて、
「そのお吟どのに佐用の三日月村で出会うた所、お前の話が出てな、びっくりして御座ったわい」

「わたくしがこの家にいると、お告げなされたのでございますか」
「そうじゃが、何も悪い事はあるまいて。いつだったか、此家の染屋の小母御からも頼まれた――もし、宮本村辺へ行って、武蔵どのの噂でも聞いたら、何なりと耳に入れて欲しいと。……で、よいお方に会うたわいと道傍であったが、こちらから話しかけたのじゃ」
「お吟さまには、今、どこにお在でなされますか」
「平田某とやら、名はわすれたが、三日月村の郷士の家にいるそうな」
「御縁家でございまするか」
「たぶん……そんな事じゃろう。それはともかく、お吟どのがいわっしゃるには、何かと、種々のはなしも積っている。秘かに告げたい事もある。いや何よりは、恋しい、会いたいと、道傍もわすれて、泣かぬばかり……」
お通もふと、瞼を赤らめた。想う人の姉と聞くからに懐しいのに、故郷の日の憶い出や何や、急に胸へこみ上げて来たのであろう。
「――が生憎、往来中でな、手紙も書けぬが、ぜひ近いうち、三日月村の平田と尋ねて訪れてくれまいか。此方から行きたいのは山々だがそうもならぬ事情があるので――といわっしゃるのだが」
「では、私に？」
「おう、詳しゅうはいわぬが、武蔵どのからは、時折、便りも来ているそうな」
お通は、そう聞くと、一も二もなく、今からでもと、もう胸にきめていたが、ここへ身を寄せてからは、何かと案じもし、相談相手にもなってくれている乳母へ黙って答えてはと、

「行くか、行けないか、晩までに、ご返辞に伺います」
と、万兵衛には返辞した。
万兵衛は、ぜひ行ってくれとすすめ、明日ならば、自分も佐用まで行く商用があるから殊に都合がいいが――という。
柴朶垣の外には、秋の昼を、沺のような海が、気懶い波音を繰り返していた。
と、垣を背に、海を前に、膝をかかえて先刻から、ぽつねんと黙想していた若い侍があった。

四

若い侍は、十八、九。まだ二十歳を出たとはみえない。
凛々しい服装をしている。
ここから、わずか一里半しかない姫路の人であろう。池田家の藩士の子息といったら間違いはあるまい。
釣にでも来たか。
しかし、魚籠や竿などは携えてはいない。染屋の柴朶垣にもたれて先刻から、砂の多い崖に坐り、ときどき、砂をつかんでは弄んでいる……。そんなところは、どこか子供ッぽい。
「――じゃあ、お通さん」
垣の中で、万兵衛の声だった。
「夕方、返辞してくれないか。行くとすれば、わしは朝、早立ちじゃ。都合もあるから」
どぶり、どぶりと、砂浜に打つ波音のほかは、からんと静かな真昼である。万兵衛の声は、大

きく聞える。
「はい。夕方までには。……ご親切に、ありがとう御座いました」
低い、お通の声でさえも。
木戸を開けて、万兵衛が出て行くと、それまで、垣の裏に坐っていた若い侍は、ついと身を起して、万兵衛の姿を、見送っていた。
——何か、見届けるような、確乎とした眼ざしで。
だが、その顔は、銀杏型の藁編笠でかくしているので、その面に、どんな感情をひそめているかまでは、傍から窺うよしもない。
ただ。
不審なのは、万兵衛を見送ってから、今度は又、頻りと垣の内をのぞいていた事だった。
「…………」
ごとん、ごとん——杵の音がもうしていた。お通は、何も知らぬ様子で、万兵衛が帰ってゆくとふたたび杵を持って、臼の中の紺染の布を搗いていた。
よその染屋の庭から、同じような杵の音と、染屋娘の唄が、のどかに流れていた。
お通の杵にも、先刻よりは、力があった。

　わが恋は
あいそめてこそ
　まさりけれ
飾磨の布の

色ならねども

唄わないお通は、詞花集か何かにあった、そんな歌など胸につぶやいていた。

便りもそこへ来ているとあるから、お吟様に会えば、恋う人の消息もきっと知れよう。

女は女同士。お吟様へなら自分の気もちを語る事もできる。——武蔵様の実の姉、きっと、妹とも思って、聞いて下さるにもちがいない。

搗く杵はうつつ——

しかし、久しぶり心は明るく、堀川百首のうちの、

播磨なだ
うらみてのみぞ
すぎしかど
こよひ泊りぬ
あふの松原

の歌主の心と同じように、いつも果てなく悲しい波騒とのみ見る海の色までが、きょうは明るくて、燦々と睫毛にかがやいて、希望そのものを波打つかに思われる。

搗いた布を、彼女は、高い竿の上へ懸渡して、ふと独り心を慰みながら、万兵衛が開け放しに出て行った木戸の扉から、何気なく外へ出て、浜を見ていた。

——と。

彼方の波打際を編笠の影が、急ぎもせぬ足で歩いて行った。白い潮風を、横ざまに受けながら。

「……？」

何がなし、お通は、見まもっていた。けれどべつに、何と思ったわけでもない。ほかに眼をやる鳥一羽見えない海だったからである。

五

染屋の小母とも計り、万兵衛へも約束をつがえたとみえ、次の日朝まだき。

「では。どうぞご厄介でも」

お通は、麻屋の軒へ、万兵衛を誘いあわせ、その万兵衛に伴われて、飾磨の漁村から旅立った。

旅といっても、飾磨から佐用郷の三日月村までの事。女の足でも一夜泊りで悠りと着けよう。姫路の城を、北の空に遠くながめ、龍野街道へ。

「お通さん」

「はい」

「脚は達者のようだな」

「ええ。旅には、わりあいに馴れておりますから」

「江戸表まで行きなすったそうだの。よくもまあ、女ひとりで、思い切って」

「そんな事まで、染屋の小母が話しましたか」

「何もかも、聞いているわさ。宮本村でも、うわさしているし」

「お恥かしゅうございます」

「恥かしい事があるものか。好きな人を、そうやって、慕っていなさる心根は不愍とも優しいともいいようがねえ。だがお通さん、お前のまえだが武蔵殿も少し薄情だのう」
「そんな事はございませぬ」
「恨みとも思わないのかえ。やれやれ、よけいに可憐しい」
「あのお方はただもう御修行の道にひたむきなので御座います。……それを想い切れない私の方が」
「悪いというのかい」
「すまないと思っております」
「ふうむ……。家の嬶にも、聞かしてやりたいのう。女は、そうありたいもの」
「お吟さまは、まだ他家へ、お嫁きにならないで、御親類にいらっしゃるのでございますか」
「さ。……どうだろう」
万兵衛は、話の穂を折って、
「あれに茶店がある、ひと休みしようか」
街道の茶店へはいって、茶をのみ、弁当など開いていると、
「よう飾磨の」
と、通りかけた馬子や荷持の雑人たちが馴々しく言葉をかけて、
「きょうは半田の賭場へは寄んねえのか。こないだは麻万に攫われたと、みんな口惜しがっていたぞい」
などと万兵衛へいった。

「きょうは、馬はいらないよ」
万兵衛は辻褄の合わない言葉を押しつけて、急にあわてながら、
「お通さん、行こうか」
と、軒を出た。
囃すように、馬子たちが、
「いやに、素ッ気ねえがと思ったら、ばかに綺麗な女子ときょうは道づれだ」
「野郎、お嬶にいいつけるぞよ」
「ははは。返辞もしねえわい」
と、うしろでいった。
飾磨の麻屋万兵衛の家は、店は取るに足らない小店だが、近郷から麻を買い集め、それを漁師の娘や女房たちの手内職に出して、帆綱や、網の製品とし、ともかく一戸の旦那といわれている者なのに、その万兵衛が、街道傍の人足たちと、友達のように馴々しくいわれるのは、怪訝しかった。
万兵衛も気がさしたか、二、三町歩いてから、お通の疑いへ答えるともなく、
「しようのない奴らだ。いつも山出しの荷駄に雇ってやるものだから人に冗戯口ばかり叩きおって」
と、つぶやいた。
しかし、その馬子達よりも、彼に取って、もっと注意すべき人間が、今休んだ茶店のあたりから尾いて来たのを、万兵衛も見遁していた。

きのう浜にいた——荒編笠の若い侍である。

風便り

一

ゆうべは、龍野泊り。万兵衛の親切気にも、途中にも、何の変りはなかった。
そして、今日。
佐用の三日月へ着いたのは、もう山の瀬に陽も舂き、何となく、秋の夕べの身に迫る頃だった。
「万兵衛さま」
疲れたのか、無口に、先へ歩いてゆく連れを、呼びかけて、
「ここはもう三日月ではございませぬか。——あの山を越えればすぐ、讃甘の宮本村」
お通が、後ろで、独り託つと、
「おいのう」
万兵衛も、足を止めて、
「宮本村も、七宝寺も、あの山のすぐ彼方じゃ。懐かしかろうが」
「…………」

お通は、頷かなかった。夕づく空に、黒々と連なっている山の波を、ただ、見まもって。
そこに、いるべき人のいない山河は、あまりに寂しい。あまりにもただ、自然でありすぎる。
「もすこしじゃ。お通さん。草臥れたろうが」
万兵衛は、歩き出す。お通も従いて、
「どういたしまして。貴方さまこそ」
「何さ、わしは始終、商用で通っている道」
「お吟様のいらっしゃる、郷士のお宅とかは？」
「あれに」
と、指さして、
「お吟様も、待っているに違いない。ともあれ、もう一息」
足は早くなる。
やがて、山の瀬に行きあたると、そこ此処に、家があった。
ここは龍野街道の一宿場なので、町というほどの戸数もないが、一膳めし屋、馬子の溜り、安旅籠などの、幾軒かが両側に見える。
そこも通り抜けて、
「ちと、登りになるぞ」
万兵衛は、山の方へ向って、石段を上り出した。
杉に囲まれた村社の境内ではないか。お通は、寒げに叫ぶ小禽の声に、ふと、何か自分が危険な線を冒している気がして、

「万兵衛さま。道をお間違えなされはしませぬか。この辺りには、家も見当りませぬが」
「いや、お吟様へ告げて来るあいだ、寂しかろうが、御堂の縁で、休んでいて貰いたいのだ」
「呼んで来ると仰っしゃるのは……？」
「いい忘れていたが、お吟様がいうには、訪ねて来る時は、家に都合のわるい客でも来合せているといけないから……という事だった。お住居は、この林を抜けた彼方の畑地。すぐご案内して来るから、しばらく待っているがいい」
もう杉林の中は暗い。
万兵衛の影は、そこを縫って細道を、急ぎ足に行ってしまった。
人を疑うという性情の乏しい彼女は、それでもまだ、万兵衛の挙動について、疑ってみる事を知らなかった。
正直に、山神の祠の縁に、腰をかけて、夕空を見まもっていた。
「………」
空は暮れてゆく。
ふと、身の辺りに、眼を落すと、暗い秋風が繞っていた。御堂の縁を這う落葉が、ふわりと舞って、二つ三つ膝に乗る。
その一葉を、指に持って、廻しながら、彼女はなお、根気よく待っていた。
愚というか、純というか、まるで少女のような彼女のそうした姿を、その時、誰か御堂のうしろで、げらげら嗤った者があった。

二

「——？」
びっくりして、お通は、御堂の縁から跳びのいた。
めったに、物事を疑ってみる事をしない彼女だけに、事の意外に打たれると、驚き方も、人よりはひどく、そして脅え易かった。
「お通っ。動くでない！」
堂のうしろの笑い声が消えた次の一瞬——同じ場所からこう鋭い——何ともいえない凄味をもった老婆のしゃがれ声がしたのであった。
「……アッ」
お通は、思わず、両手で耳を掩った。
それほど、何事かに恐れたのなら、逃げればよいのに、そうはしないで、立ち竦んだまま雷鳴にでも痺れたように、そそけ立って慄えていた。
その時——祠のうしろからは、もう数名の人影が出て来て、御堂の前に立っていた。
眼をふさいでも、耳を抑えても、彼女にはその中の、たった一人が、怖ろしく巨きく見えた。
悪夢の中でよく見る髪の毛の白い婆だった。
「万兵衛。ご苦労じゃったのう。礼は後でしますぞよ。そこで——皆の衆よ。あやつが、悲鳴を揚げぬうち、猿ぐつわを嚙ませて下ノ庄の屋敷まで、はよう引っ担いで行ってくだされ」
お杉ばばは、お通を指さして、断獄を命じる閻王のようにいった。

他の四、五名は、みな郷士ふうの男であり、ばばの一族らしかった。ばばの一言に、おうっと高く答えると、餌を争う狼のように、お通の身へ跳びかかり、型のごとく綑縛りにくくって、
「——近道を」
「それっ」
とばかり、走り出したのであった。
お杉ばばは、にやりと見送ったまま、一足後に残っていた。万兵衛へ約束の駄賃を与えるためであろう、帯のあいだに、用意してきたかねを与えて、
「よう連れ出したのう。巧く行くやら、どうやらと案じていたが」
と、賞め称え、
「他言しやるな」
と、釘をさした。
万兵衛は、貰った金を改めて、これも満足顔に、
「なあに、わしの手功じゃございません。御老婆様のはかりごとが、巧く図にあたったので御座いますよ。……それと、貴女様が、御郷里に帰っているとは、お通めも、夢にも知らずにいたもんですから……」
「小気味のよかった事わいな。見たか、今のお通の愕き様を」
「余りの事に、逃げることもできず、竦んじまった様子でしたな。ははは……だが、考えると、罪ッぽい事をした」
「なんの。何が罪ッぽい事があろうぞ。わしに取れば」

「いやもう、そのお恨みばなしは先日も」
「そうじゃ。わしも、こうしては居られぬ……いずれ又、程経て、下ノ庄の屋敷へ遊びに来やい」
「では、御老婆様。そこからの間道は、道が悪うございます。お気をつけて」
「そなたも、人中へ出たら、口に気をつけやい」
「はいはい。口は至って堅い万兵衛、その辺はどうぞ御安心を……」
いいながら、別れて、足さぐりに暗い石段へかかったと思うと直ぐ、ぎゃッ——とそれ限りなひと声をあげて、地へ仆れた。
お杉ばばは、振り向いて、
「——どうしやった？　万兵衛ではないか。万兵衛……」
と、地を透かして呼んだ。

三

——答える筈もない。万兵衛はすでに、この世の息をしていないのだ。
「……ア、あ？」
ばばは、息を嚥んで、その万兵衛の横たわっている側に、ぬっと見えた人影に眼をこらした。
刃。——血ぬられたその太刀。ぎらりと引っ提げている。
「……た、たれじゃ？」
「…………」

「誰じゃ。……名を、名を吐かしおろう」
ばばは、乾いた声を無理に張っていった。
このばばの、年がいもない虚勢と、恫喝する病は、今なお止まないものとみえる。――が相手はその手に馴れているものらしく、闇をうごかして、微かに肩をゆすぶった。
「わしだよ。……おばば」
「え」
「わからないか」
「分らぬ。聞いた事もない声。物盗であろが」
「ふ、ふ、ふ。物盗なら、おぬしのような、貧乏婆に眼はつけぬ」
「なんじゃと。……では、わしに眼をつけて来たとか」
「そうだ」
「――わしに？」
「くどい。万兵衛ごときを斬るために、わざわざこの三日月まで追っては来ぬ。おぬしに思い知らせるためだ」
「ひぇっ」喉笛の破れたような声を洩らして、ばばは蹌めきながら、
「人違いじゃろが。おぬしは誰じゃ。わしは、本位田家の後家、お杉という者」
「おう、そう聞くだに、なつかしや俺の恨み、今はらしてやろうぞ。おばば！　おれを誰と思う。この城太郎を見わすれたか」
「……げっ？　……城……城太郎じゃと」

「三年たてば、嬰児も三つになる。おぬしは老木、おれは若木。気のどくだが、もうおばばに、洟たらし扱いにはなっておらぬぞ」

「……おう、おう。ほんにお汝は、城太郎よのう」

「よくも、長の年月、お師匠さまを苦しめたの。師の武蔵さまは、おぬしを年寄と思えばこそ、相手にならず、逃げまわっていた。——それをよい事にして、諸国、江戸表にまで出て、悪ざまに世へいい触らし、仇呼ばわりをするのみか、御出世の道を邪げおったな」

「…………」

「まだある。——その執念で、お通さままでを、折あるごとに、追い苦しめた。もうよい程に、非を覚って、故郷へ引籠ったかと思うていたら——なおも、麻屋の万兵衛を手先に、あのお方を、どうかしようと企んでおる」

「…………」

「憎んでも飽きたらぬばばめ。一太刀に斬るのは易いが、この城太郎も、今では浪々の青木丹左が子ではない。父の丹左も、ようやく元の姫路城へ、帰参かなって、この春からは、以前のとおり池田家の藩士。……又ぞろ、父の名に、累を及ぼしてはならぬゆえ、生命だけは助けておくが」

城太郎は、前へ出て来た。

助けておくが——とはいったが右手に提げている白い刃は、まだ鞘に返ってはいないのである。

「……？」

ばばは、一歩一歩後へ退がりながら、逃げ出す虚を窺っていた。

四

隙を見たか、ばばは、杉林の小道へと、さっと走りかけたが、やらじと追う城太郎の一跳びに、

「何処へ」

と、その首の根を抑えられ、くわっと口を開くと、

「何しやるっ」

年こそ寄れ、きかない気性が、弾みに出て、振り向きざま、脇差の抜打ちに、城太郎の脾腹を横に払った。

城太郎も、もう以前の子どもではない。身を退けながら、ばばの体を前へ突き放していた。

「わ、童ッ。やりおったの」

草むらの中へ、首を突っこみながら、彼女は喚いた。頭を土にぶつけても、彼女の頭のなかにある、小童の城太郎という観念は脱けなかった。

「何を」

と、城太郎も喚いた。そして踏めば折れもしそうな、ばばの背ぼねへ、足を乗せ懸け、じたばたする手を苦もなく逆に捻じ上げてしまう。

彼も亦、彼である。そのばばが歯がみを、憐れと見ている勘弁などはないのだ。小童の時代を抜けて、身なりこそ大きくなったけれど、体の大きくなったという事実だけで、大人になったと

は誰にでも許せるものではない。
もう十八か九。よい若者にはちがいないが、気持は多分にまだ乳くさい。それに積年のうらみともいえる憎悪が積り積っての事である。
「どうしてくれよう」
引摺って来て、山神の御堂の前にたたきつけ、なお、闘志を亡くさない細い体を踏まえながら、殺してはまずいし、生かしておくのも癪なこのばばの始末にちょっと当惑した。
いや、それよりは、先におばばの指図で、下ノ庄の屋敷とかへ、手取り足取りして連れ去った——お通の身がなお、そうしている間も案じられるのだ。
抑々——といえば、余りに由来でもありそうだが、お通が飾磨の染屋にいることを、稀々彼が知ったわけは、彼が父の丹左衛門と共に、近くの姫路へ定住していたおかげであって、この秋、浜奉行まで使いに来ることが繁く、その数度の往復のうちに、ふと垣間見て、
(よく似た人——)
と、注意していた事から、こういう彼女にも、危急にも、偶然、出会ったわけだった。
神の導きと、城太郎は思いがけない機縁に感謝した。同時に、お通に対しての、飽くなきおばばが迫害を、骨髄から憎んで、忘れかけていた数々の口惜しさまでを新たに思い出した。
(このばばを除かぬうちは、お通さんは、安心しては生きてゆかれない)
と考え、一時は殺意をさえ起したが、折角、父の丹左が城下に帰参したばかりでもあるし——元来うるさい山郷士の一族などと、事を構えてはと——その程度には大人らしくも思慮して、兎に角うんと彼女を懲らしめ、そしてお通を無事に救えばよいと決めているのだった。

「ウウム。いい隠居所がある。おばば、こう来い」
城太郎は、彼女の襟がみを摑んで起たせようとしたが、ばばがべたりと地を抱いて起たないので、
「面倒」
と、引っ抱えて、御堂の裏へ駈けて行った。
そこに、この祠を建てる時に、断り削いだ崖の断面があり、その下に、やっと人間が這って出入りできるくらいな洞穴があった。

五

佐用の部落であろう、彼方に、灯が一つ、ポチと見える。山も、桑畑も、河原も、ただ広い闇だった。――そして、今越えて来たうしろの三日月の峠も。
足に、石ころを踏み、耳に佐用川の水音を聞くと、
「おい。待てよ」
と、うしろの一人は、前へ行く二人を呼びとめた。
その二人は、素繩で後ろ手に縛げたお通を、囚人のように、引っ立てていた。
「どうしたか、後から直ぐ行くといったおばばが、まだやって来ぬ」
「ウム、そういえば、もう追い付いて来そうなものだが」
「きかぬ気でも、ばばの脚では、間道の上りが、ちと骨なのだろう。手間取っているに違いな

い」
「ここらで一休みしていようか。――それとも佐用まで行って、二軒茶屋でも叩いて待つとするか」
「どうせ待つなら、二軒茶屋で一杯やっていようじゃないか。……こういうお荷物を曳っぱっている事だし」
　で、その三名が水明りを探って、浅瀬を越えかけた時である。
「おおオいっ」
　と、遠い闇から声がした。
　振り向き合って、
　――はて？
　と耳を澄ましていると、二度めの声は、より近く、オオーイと又聞えた。
「おばばかな？」
「……いや、違う」
「誰だろう」
「男の声だ」
「でも、おれ達を呼んだのじゃあるまいが」
「そうだ。おれ達を呼ぶ者はない筈だ。おばばが、あんな声を出す筈もなし」
　秋の水は、刃物のように冷たい。ざぶ、ざぶと、水へ追い立てられるお通の足には、その冷たさがなおさら沁む。

と。うしろから。
タタタと迅い跫音だった。耳にそれが分った時は、もう、追って来た何者かの影は、その三名の直ぐ側をいきなり、
「お通さん！　——」
と、叫びながら、水煙を浴びせて、ざざざッと、向岸まで一気に駈け渡ってしまったのである。
「——あっ？」
浴びた飛沫に身振いしながら、三名の郷士は、お通を囲んで、浅い河の瀬に立竦んでしまった。
先に駈けて、河を越えた城太郎は、彼等の上がろうとする河原の水際に立ちふさがって、
「待てっ」
と、両手を拡げていた。
「や。何奴だ。汝は」
「何者でもよい。お通さんを、何処へ連れてゆくか」
「さては、お通を取り返しに来たな」
「いかにも」
「つまらぬ所へ出娑張ると、命がないぞ」
「おぬしらは、お杉ばばの一族の者であろう。おばばの吩咐だ。お通さんをわしの手に渡せ」
「何。おばばの吩咐だと」

「おお」
「嘘をいえ」
郷士たちは、嘲笑(あざわら)った。

六

「嘘ではない。これを見よ」
城太郎は、立ち塞(ふさ)がったまま、洟紙(はながみ)に書いてある、ばばの手蹟をつきつけた。

不首尾、今更せんもなし
お通の身、ひとまず
じょう太郎の手にかえし
わが身を連れに引っ返さ
るべく候。

「？　……。何だこれは」
読み合って、眉をひそめた郷士たちは、城太郎の姿を、足もとから見上げ、その間に、濡れた足を水から揚げて、河原の岸にかたまった。
「見たら分るであろう。文字が読めぬのか」
「だまれ。この中にある、城太郎とは、汝(おのれ)とみえるな」
「そうだ。拙者は、青木城太郎」
いうと――

「あっ……城太さん！」
とつぜん、お通が、絶叫して、前へのめりかけた。
先刻から、彼女の眼は、彼の姿を凝視していた。半ばは疑い、半ばは愕きに打たれ、身踠きをしていたが、城太郎自身が、城太郎と名乗ったので、はっと、吾を忘れた絶叫が出たのであった。
「ア。猿ぐつわが弛んだぞ。締め直しておけ」
と、城太郎と応対していた郷士は、うしろへいって又、
「なるほど、これはおばばの筆蹟にはちがいないが、そのおばばが、わが身を連れに引っ返さるべく候——と書いているのは、どうした次第か」
血相を研いで詰めよると、城太郎は、
「人質に取ってある」
と、澄まして、
「お通さんを渡せば、おばばの居場所も教えてやる。否か応か」
と、いった。
さてこそ、いくらおばばを待っていても後から来ない筈——と、三名は目顔を見合せていたが、そういう城太郎のまだ乳くさい年頃を見縊って、
「ふざけた事を申すな。どこの青二才か知らぬが、おれ達を、何だと思う。下ノ庄の本位田といえば、姫路の藩士なら一応は知っている筈」
「面倒。否か応か、それだけ聞こう。否というなら、おばばの身は、抛っておくまでの事。山で

飢え死させるがよい」
「こいつ」
跳びかかって、一人は城太郎の腕くびを捩じ取り、一人は柄をにぎって、斬る構えを見せた。
「たわごと申すと、首の根をたたき落すぞ。おばばの身を、どこへ隠した？」
「お通さんを渡すか」
「渡さんっ」
「では、拙者もいわん」
「どうしても」
「だから、お通さんを、返せ。そうすれば、双方怪我なく事はすむ」
「ちッ。この青二才」
捩じ上げた手をそのまま、足搦みに懸けて、前へ仆そうとすると、
「何を」
城太郎は、反対に、彼の力を利用して、その男を肩越しに投げつけた。
しかし、途端に、
「あっ……」
と城太郎も尻もちついて、右の太股を抑えた。
投げつけた男から、抜打ちに一太刀、ぴゅっと刎ねられたのである。

七

城太郎は、人を投げる技を知っていたが、まだ、人を投げる法を弁えていない。

投げられる相手も、生き物であるからには、ただ投げられたままではいない。途端に、刀も抜こうし、無手でも脚へしがみついて来る可能性がある。

敵を投げるには、投げる前にまずその考慮がなければならないのに、蛙でも叩きつけるように、脚下へ投げつけ、しかも身を退くことをしなかったので、

(してやった)

と、思った瞬間に、太股のあたりを薙ぎ払われて、彼も亦、相仆れに、負傷を抑えたまま、腰をついてしまった。

しかし、幸いに傷は浅かったとみえ、城太郎も跳ね起き、相手も立ち上がると、

「斬るな」

「手捕にしろ」

と、他の郷士が呶鳴って正面の相手と力を協せ三方から城太郎の体一つへ組みついて来た。

城太郎を斬ってしまえば、お杉ばばを何処へどうして人質にしてあるか、それを知る道がなくなるからであろう。

同様に、城太郎も亦、ここで蒼蠅い郷士らと、血を見ることは避ける考えだった。藩の聞えを思い、父に累を及ぼすまいとするために。

けれど、物の弾みは、そんな常の思慮で支えのつかない所にある。一人と三人との格闘では、当然、一人の方から、憤怒の堰を切ってしまうし、城太郎の血は又、多分に血気一途でもあった。

相手の三人に、

「この生ぞうめ」

「小癪な」

「これでもかっ」

撲られ、突かれ、足蹴にされてそれへ捩じ伏せられそうになると、

「何をっ」

今度は、彼が、先刻うけた不意打の逆を行って、いきなり脇差を抜くなり、乗しかかっている男の腹部へ突きとおした。

「……うッ。ち！」

梅酢の樽へでも手を突っこんだように、柄手から肩半分まで、朱になると、城太郎の頭には、もう何もない。

「くそっ、貴様もか」

起き上がるなり、又一名の真っ向へ撲り下ろした。骨にぶつかった刀の刃は、横に寝て、斜かいに削げたので、魚の切身ぐらいな肉片が、切っ先から素っ飛んだ。

「わ。や、やったな」

喚いたが、相手は、抜き合すのも間に合わないのである。余りに自分ら三名の力を信じ過ぎていただけに、狼狽の度もひどい。

「こいつら。こいつらっ」

城太郎は、呪文のように、一刀ごとに喚きながら、残る二人を敵にまわして斬りむすぶ。

彼に刀法はない。伊織のように武蔵から正しい刀法の基本を授けられていなかったためである。しかし、血を浴びて愕かないことと、刃ものを把って、年に似げない度胸と無茶のあることは、恐らく、彼が二、三年の間、共に暗黒で行動していた奈良井の大蔵の訓練に依るところであろう。

郷士たちの方は、二人といっても、すでに一人は傷を負っているので、まったく逆上っていた。城太郎の太股の辺からも、鮮血はそこらへ散るし、文字どおり斬りつ斬られつの修羅図であった。

抛っておけば、相打か、悪くすれば、城太郎は撫で斬りになる。——お通はわれを忘れて、河原を駈け、縛めのため利かぬ両手をもがきながら、闇へ向って、神の救援をさけんでいた。

「来て下さいっ。どなたでも、援けて下さいっ。あそこに斬り合っている年若いお侍の方を！」

八

——が、叫んでも、駈けめぐっても、十方の闇、河の水音と、虚空をゆく風の声しか、彼女に答えるものはない。

そうした時、気の弱い彼女も、自力に気がついた。

人の救いを呼ぶまえに、なぜ自分の力を出してみないかに、はっと気づいたのである。

「——ちイッ」

河原に坐って、岩のかどで、身の縛めをこすった。それは郷士らが路傍で拾った藁の素縄にすぎなかったので、忽ちぷっと摺り切れた。

と——お通は、両手に小石をつかみ、驀しぐらに、城太郎と二人の郷士が斬り合っている方へ飛び出して行った。
「城太さん！」
と、さけびながら、その城太郎の相手の面部へ、一つ投げつけた。
「わたしもいる！　もう大丈夫っ！　……」
と、又一つ。
「……ちイッ。城太さんッ、慥乎して！」
ぴゅっと、さらに一つ。
だが、石は、三つとも相手のどこにもあたらず、皆それてしまった。
彼女は急いで、又次の小石を拾った。——すると、郷士のひとりが、
「あっ、この阿女」
城太郎から、ふた跳びほど躍って、彼女の背へ、刀のみね打ちを振り下ろそうとした。
——やッては！
と、城太郎も追った。
そして、その郷士の男が、頭上から刀を下ろす間髪に、
「こいつめ」
城太郎の拳が、彼の背なかへ直かにぶつかっていた。真っ直に向けて行った脇差が、相手の背から腹へ突きぬけて、鍔と拳で止まったのである。
それは凄まじい働きだったが、城太郎の脇差は、屍肉から抜けなくなってしまった。彼があわ

てている間隙に、もう一名の郷士が、跳びついて来たらどうなるか。
結果は明白である。
だが、残った郷士の一人は、先に傷を負っていたし、力と恃む方が、悲惨な最期をとげたので、それも狼狽していた。
――見れば、彼方を、脚の折れた蟷螂のように、その男はよろよろ逃げてゆくのだ。城太郎は、それを見て、自分の狼狽から泛びあがった。足をふんがけて、脇差をひき抜いた。
「待てッ」
当然な勢いである。
それにもう破れかぶれな気もちもある。追いかけざま一打ちと駈け出しかけたのだった。すると、お通が、むしゃ振りついて叫んだ。
「およしなさいっ。……およしなさい。逃げて行く者を！　……あんなに傷を負っている者を！」
その声の、骨肉を庇うような真剣さに、城太郎はびっくりした。ここまで自分を苦しめて来た者をなぜ庇うのか、心理を疑った。
「それよりも、種々と、その後のはなしが聞きたい。わたしも話したい。……城太さん、一刻もはやく、ここから逃げて」
――そうだ。
城太郎も、それには異議がない。ここはもう讃甘と山一重だ。もし変事ありと、下ノ庄にでも聞えたら、本位田家の縁類たちが、野を呼び、里を挙げて、襲撃して来ることは知れきっている。

「駈けられるかい。お通さん」
「ええ。だいじょぶ！」
二人は、ずっと以前の、小娘と小童頃を思い出しながら、闇から闇へ、息のきれるまで駈けた。

九

もう三日月の宿で、起きている家は、一軒か二軒。
その一つの灯は、宿場にたった一軒の旅籠だった。
鉱山がよいの金商人だの、但馬越えの糸屋だの行脚僧などだのが、ひとしきり母屋でさわいでいたが、思い思いに寝入ったらしく、燈は母屋を離れた狭苦しい一棟にしか残っていなかった。
年下の男をつれた駈落者――とでも間違われたに違いない。そこは旅籠の年寄が、繭を煮る鍋や紡ぎ車をおいて、ひとり住んでいる所だったがお通と城太郎のためにわざわざ空けてくれたのだった。
「……城太さん、それでは、お前も江戸表で、武蔵様にはお会いすることができなかったのですね」
その後のはなしを、彼から逐一聞いて、お通は、うら悲しそうにいう。
城太郎は、彼女も、木曾路でちりぢりになって以来、今もってその人に巡り会わないでいる――という傷ましい述懐を聞いて、何だか語るにも堪えないような気持がするのだった。
「――が、お通さん、そう嘆くことはないよ。風の便りだけれど、近頃、姫路にこんな噂があ

る」
「え。……どんな?」
薬でも噂でも彼女の今の気もちでは、摑まずにいられなかった。
「武蔵様が、近いうちに、姫路へ来るかも知れないのだ」
「姫路へ……。それは、ほんとでしょうか」
「噂だから、どの程度まで、信じていいか分らないが、藩ではもっぱら本当らしくいわれている。――細川家の師範佐々木小次郎と試合する約束を果すために、近く、小倉へ下るだろうと」
「そんな噂は、私もちらと聞いた事がありますが、誰が一体いい出した事やら、糺してみれば、武蔵様の消息を――いる所すら、知っている人はありません」
「いや。藩で流布されているはなしには、もう少し、真実らしい根拠がある。……というのは、細川家とも縁故のふかい、京の花園妙心寺から、武蔵様の所在が知れて、細川家の家老、長岡佐渡どのの取次で小次郎からの試合状が武蔵様の手に届いているというのだが」
「では、その日は、もう近々でございまするか」
「さ。その辺の事になると、何日の事やら、何処でやるのか。とんと分ってはいない。――しかし、京都の近くにいるものなら、豊前の小倉へ下るには、きっと姫路の城下はお通りになる筈だ」
「でも、船路もありますもの」
「いや、恐らくは」
と、城太郎は、首を振って、

「船では行かれまい。なぜならば姫路でも岡山でも、山陽の各藩では武蔵様が通過の節はぜひ一泊を引き留めよう。そして、人物を見よう。又はそれとなく、仕官の望みがあるかないか、肚を訊こう。……などと種々な考えで、待ちうけている。現に姫路の池田家でも、沢庵坊へ御書面したり、妙心寺へ問合わせたり、又、城下口の駅伝問屋に命じて、もし武蔵らしい者が通ったらすぐ知らせよと、達してあるそうだから」

そう聞くと、お通はかえって、噫と嘆いて、

「では、なおさらです。武蔵様が、陸路を下っていらっしゃる筈はない。武蔵様のなによりもお嫌いな、そんな躁ぎが、城下城下で待ちうけているようでは——」

と、絶望していった。

十

うわさの程度でも、欣ぶであろうと、城太郎は話したのであったが、彼女にいわれてみれば、武蔵が姫路へ立ち寄るだろうなどという期待は、儚い、こっちだけの空想にすぎない。

「——では城太さん。京都の花園妙心寺へゆけば、確かな事が、知れましょうね」

「それは、知れるかもしれないが、うわさだからなあ」

「まるで、根なし草でもないでしょうから」

「もう、行く気？」

「ええ。そう聞いたら、あしたにでも、立ちとうございます」

「いや、待てよ」

城太郎は、以前とちがって、彼女についても、今では一ぱしの意見を持った。

「お通さんが、武蔵様と行き会えないのは、そういう風に、何かちらと、噂でも、影でもさすと、直ぐ一途に、それを的に行くからじゃないかな。時鳥の姿を見ようなら、声のした先へ眼をやらなければ見えないのに、お通さんのは、後へ後へと行っては、行き迷れているように思えるが……」

「それは、そうかも知れませんが、理窟のように、心のもてないのが恋でしょう」

お通は、城太郎になら、何でもいい得た。

けれど今、恋ということばをつい洩らして、城太郎の姿を見直すと、はっと思った。城太郎の顔いろも紅くうごいた。

もう城太郎は恋ということばを、手鞠のように、受取ったり返したりしていられる相手でなかった。人の恋より、彼自身が、それに悩む年配になっていた。

で。遽に、

「ありがとう。私も、よく考えてからにいたします」

お通が、穂を外らすと、

「そうなさい。そしてとにかく一度、姫路へ帰って」

「ええ」

「ぜひ、屋敷へは来てください。父と拙者のいる屋敷へ」

「…………」

「父の丹左も、話してみると、お通さんの事は、七宝寺にいた頃の事まで、よく知っていまし

た。……何か知らないが、いちど会いたい、話もしたい、などと申していますから」
お通は、答えなかった。
消えかかる燈芯に、ふと、振顧って、破れ廂から夜空を見上げながら、
「……ア。雨が」
「雨ですって。——あしたは姫路まで歩くのに」
「いいえ、蓑笠さえあれば、秋の雨ぐらいは」
「たんと来なければいいが」
「……オオ、風が」
「閉めましょう」
城太郎は立って、雨戸を引寄せた。急にむし暑く、そしてお通のもつ、女の香が籠る気がした。
「お通さん、よいように、寝て下さい。拙者はこのまま——」
と、木枕を取って、窓の下に、壁へ向って横になった。
「………」
お通は、まだ起きて、独り雨の音を聞いていた。
「寝ておかないといけないぞ。お通さん、まだ眠らないのか」
眠りつけないらしく、後ろ向きのまま、城太郎はそういって、薄い寝具を、顔まで引っ被った。

観音

一

雨は蕭々（しょうしょう）と、破れ廂（びさし）を打ちつづけている。
風も強くなった。
山村のことである。それに秋の空癖（そらくせ）、朝までに霽（あが）るかもしれない。
お通は、そんな事を思いつつ、まだ帯も解かず坐っていた。
ちょっと、寝つきが悪そうに、夜具の中で、もずもずしていた城太郎も、いつの間にか、眠り入っている。
ボト、ボト……と、どこかに雨の漏る音がする。雨のしぶきが、がたがたと戸を打つ。
「城太さん」
お通は、ふと、呼びかけた。
「――ちょっと眼をさましてくださいな。城太さん」
何度呼んでも、眼を醒しそうな様子もない。強（し）いて起すのも――と彼女はすぐ躊躇（ためら）ってしまう。
ふと、彼を起して、訊ねたいと思ったのは、お杉ばばの事である。
ばばの味方の者へ、河原でもいっていたし、途中でも、ちらと聞いたが、このひどい雨に、城

太郎が、ばばへ与えた懲罰は、余りといえば、酷い。可哀そうである。
（この雨風に、濡れもしよう。冷えもしよう。年を老っている体、悪くしたら朝までに死んでしまうかも知れぬ。――いやいや、幾日も、人に気づかれずにいれば、それでなくても餓死するに極っている）
苦労性な生れつきか。ばばの身までを案じ出して、彼女は、仇とも思わず、憎いとも考えず、雨の音、風の音のひどくなるほど、独りで胸を傷めてしまう。
（あのばば様も、根から悪いお方では決してないのに）
と、天地へ向って、ばばの代りに庇ってみたり、
「こちらが真をもって尽せば、いつか真はどんな人へも通じるという事。……そうだ、城太郎さんに後で怒られるかも知れないけれど」
彼女は遂に、何事かを、思いきめた様子で、雨戸を開けて外へ出た。
天地は暗かった。雨ばかりが白くしぶいている。
土間のわらじを、足につけ、壁の竹の子笠を、頭にかぶって、お通は裾を折った。
蓑を着て――
ザ、ザ、ザ……と軒端の雨だれに打たれて出て行った。ここからは、そう遠くもない、宿場の横の、山神堂があるあの高い石段の山へである。
夕方、麻屋の万兵衛と一緒に登った、覚えのある石段は雨で滝津瀬になっていた。登りきると、杉林はごうごうと吠えている。下の宿場よりは、遙かに風の当りが強い。
「何処だろ？　おばばさんは」

詳しくは聞いていなかったのである。ただ、どこかこの辺に、懲罰にかけてあるのだと、城太郎はいっていたが――

「もしや？」

と、御堂の中を覗いてみた。又、床下ではないかと、呼んでみた。

答えもない。姿もない。

祠の裏へ廻った。――そして、荒海の潮のような樹々の唸りに体を吹かれて佇んでいると、

「おう――いっ。誰方ぞ来て下されようっ。……誰ぞそこの辺に人はないか。……ううむ、ううむ」

唸きとも喚きともつかない声が――それも雨風の途断れ途断れに聞えて来た。

「おお、ばばさんに違いはない。――ばば様あ、ばば様あ」

彼女も、此方から、風へ向って声を張った。

二

呼ぶ声は、雨風に攫われて、暗い虚空へ、消えて去ったが、彼女の心は、見えぬ闇の人へ、通じて行ったものか、

「おうっ、おうっ。誰ぞそこらにお出でたお人やある。助けてくだされよの。ここじゃあ、ここじゃがのう。――助けて賜もようっ」

ばばの声が、彼女のそれに答えるように、途断れ途断れに何処からか聞えてくる。

元よりそれも、怒濤のような杉林の雨風に掻きみだされ、纏まった言葉には響いて来ないが、

ばばが必死の叫びに違いない事は、お通の耳にすぐ知れた。
探り呼ぶ声も嗄れ果てて、
「……何処ですかあ？　何処ですか？　……ばばさんっ、ばば様あ」
お通は、堂を駈け巡った。
そのうちに——
御堂から杉の樹蔭を曲がって二十歩ほど先、奥の院の登り口となる崖道の断削いだ一方に、熊の穴みたいな洞穴が見出された。
「あっ……ここに？」
近づいて、中を覗くと、おばばの声は、確かに、その洞穴の奥から洩れて来るのだった。
けれど窟の口には、彼女の力ぐらいでは、動きそうもない大きな岩が、三つ四つ積み重ねてあり、出入りを封鎖してあるのだった。
「どなたじゃ！　……。それへ来たのはどなた様じゃ！　もしやこのばばが日頃信仰する観世音菩薩の化身ではお在さぬか。あわれ、お助けなされませ。——外道のために、この難儀な目に遭うた不愍なばばを！」
ばばは、外の人影を、岩と岩の隙間からひと目見ると、こう狂喜して叫び出した。
半ば、泣くように、半ば、訴えるように、そして、生死の闇に、日頃信仰する観音の幻覚を描いて、それへ生きたい一心を祷りつづけた。
「——欣しや、欣しや。ばばの善心を、日頃から憐れと思し給い、この大難へ、仮の御姿して、救いにお降り下されましたか。大慈大悲、南無、観世音菩薩——南無、観世音菩薩」

それなり――
はたと、ばばの声は、もうしなくなった。善哉。
思うに、ばばは、一家の長として又、子の母として、人間として、自分は善人無欠の人間と信じているのだ。自分の行為はすべて善なりとしているのだ。自分を守らぬ神仏があれば、神仏のほうが悪仏邪神であるとするであろうほど、彼女にとって、彼女は善の権化だった。
――だからこの風雨に、観音菩薩の化身が救いに降りて来ても、彼女にはすこしの不思議でも何でもない。当然こうあらねばならぬ気持であった。
しかし、その幻覚が、幻覚でなく、実際に誰か窟の外へ近づいて来たので、ばばは、途端に気がゆるんで、ああ、と失心してしまったのではなかろうか。
「……？」
窟の外にあるお通も、あれほど物狂わしかったばばの声が急に絶えたので、もしやと、気が気ではなくなった。早く窟の口を開こうものと、必死の力を出していたけれど、彼女の力では、その岩の一つすら動かなかった。竹の子笠の紐はちぎれて飛び、黒髪は、蓑と一緒に、雨風に吹きちらされた。

三

どうして、こんな大きな岩を、城太さんは独りで動かしたろう、と思う。
体で押してみたり、両手をかけて有りったけの力をこめてみたが、窟の口は一寸も開かない。
お通は、精を疲らして、

（城太さんも、あんまり酷い）
と、恨みに思った。
自分が来たからよいようなものの、もしこのままにしておけば、ばばは中で狂い死してしまう。それはそうと、急に声がしなくなったのは、もう半分死んでしまったようになっているのではあるまいか。
「ばば様。お待ちなさいよ。……気を慥乎して！　今！　もう直ぐにお助けいたしますから」
岩と岩のあいだに顔を寄せていったが、それでも返辞はなかった。
もちろん、窟の中は、洞然たる暗黒で、ばばの影もみえない。
——が、微かに。

或遇悪羅刹
毒龍諸鬼等
念彼観音力
時悉不敢害
若悪獣囲繞
利牙爪可怖
念彼観音力

ばばの唱える観音経の声がそこにする。ばばの眼や耳には、お通の声も姿もなかった。ただ、観音が見える。菩薩の御声が聞えている。
ばばは、合掌し、安心しきって、今は涙を垂れながら、ふるえる唇から、観音経を唱えていた

のであった。
けれどお通に神通力もなかった。積み重ねてある三つの岩の一つも動かせなかった。雨はやまず、風は休まず、彼女の蓑もやがて千断れ果てて手も胸も肩も、ただ雨と泥にまみれるばかりだった。

四

そのうちに、ばばも、ふと不審に思い出したのであろう、隙間に顔を寄せて、外を窺いながら、
「誰じゃ？　誰じゃ？」
と、どなった。
力も尽き、精も尽き、途方に暮れた顔して、風雨の中に、身を萎めていたお通は、
「おお、ばば様か。——お通でございます。まだ、そのお声では、お元気のような」
「何？」
と、疑うように、
「お通じゃと」
「はい」
「…………」
間を措いて、又、
「お通じゃと？」

「はい……お通でございまする」
ばばは、初めて愕然と、ものに打たれたように、自己の幻覚から抛り出されて、
「ど、どうして、汝が此処へは来たぞよ。……ああ、さては城太郎めが、後を追って」
「今、お助けいたします。ばば様、城太さんの事は、宥してお上げなされませ」
「わしを、救いに来た……？」
「はい」
「汝が……わしを」
「ばば様。何もかも、来し方の事は、どうぞ水に流して、おわすれ下さいませ。わたくしも、幼い頃に、お世話になった事こそ覚えておりますが、その後の、お憎しみやご折檻は、決して、お怨みには思っておりませぬ。――元々、わたくしのわがままもあった事と」
「では、眼がさめて、前非を悔い元のように、本位田家の嫁として戻りたいというか」
「いえ、いえ」
「では、何しにここへ」
「ただ、ばば様が、お可哀そうでなりませぬゆえ」
「それを恩に着せて、以前の事は水に流せといやるか」
「………」
「頼むまい。誰がそなたに助けてくれと頼んだか。――もし、このばばに、恩でも着せたら、怨みを解くか、などと考えたのなら、大間違いじゃぞ。たとえ、憂き目の底におろうとも、ばばは、生命欲しさに意気地は曲げぬ」

「でもばば様。どうしてお年を老ったあなた様が、こんな目に遭うているのを見ておられましょう」
「上手をいうて、汝も城太めと、同腹ではないか。ばばを謀って、こうしやったのは、汝と城太めじゃ。もし、この窟から出たら、きっときっと、この仕返しは直ぐしてみせるぞよ」
「今に――今に――わたくしの気持が、きっとばば様に、分っていただける日もございましょう。ともあれ、そんな所にいては、又お体を病みましょう」
「よけいな戯れ口、うぬ。城太といい合せて、わしを揶揄いに来おったの」
「いえ、いえ、見ていてください。わたくしの一心でも、きっとお怒りを解いてみせまする」
彼女は又、起ち上がって、岩を押した。動かない岩を、泣きながら押した。
だが、力では、絶対に動かなかった岩が、その時、涙では動いた。三つの岩の一つが、どさっと先ず地へ落ちた。
それから又、後ろの岩も、思いのほか軽く揺ぎ出して、窟の口はやっと開いた。
彼女の涙の力のみではなく、ばばの力も中から加わっていたためである。――で、ばばは自分の力のみでそこを衝き破ったような血相を湛え、同時に窟の外へおどり出した。

五

一心がとどいた。
岩が除かれた。
うれしや!

お通は、押した岩と共に、蹌めきながら心でさけんだ。
だが。
ばばは、窟から飛び出ると、いきなりお通の襟がみへ跳びかかって行った。この世へ生きて出直した目的の第一がそれであったように。
「あれッ——ばば様っ」
「やかましい」
「な、なんで」
「知れたこと」
ばばは、力まかせに、お通を大地にひきすえた。
そうだった。知れきった事ではあった。けれどお通には、こういう結果は、考えられなかった。人へ贈る真心は、真心をもって返されるものと誰に対しても、一様に信じて疑えない彼女に取って、この結果は、やはり意外な愕きに違いなかったのである。
「さあ、おじゃい！」
ばばは、お通の襟がみを持ったまま、雨の流れる地上を引摺った。
雨は少し小やみになったが、なお、ばばの白髪に燦々と光って降り注いだ。お通は、引摺られながら、掌を合せて、
「ばば様、ばば様、堪忍なさいませ。お腹の癒えるまで、御折檻はうけまするが、この雨に打たれては、ばば様のお体も、後で御持病の因になりまする」
「なんじゃと。いけ図々しい。こうされても、まだ、ひとを泣き落しにする気かいな」

「逃げませぬ。どこへでも参りますから、お手を……ああ……苦しい」
「あたりまえじゃ」
「は、離して。くく……」
喉くびが詰ったのである。
お通は思わず、ばばの手を捥ぎ払って、起ちかけたが、
「逃がそうか」
とその手は、又すぐ、黒髪の根をつかむ。
がくと、宙を向いた白い顔に、雨が注いだ。お通は、眼を閉じていた。
「ええ、わが身のために、どれほど、多年の間、艱苦を嘗めさせられた事か」
ばばは、罵って、彼女が何かいえばいうほど、もがけばもがくほど、黒髪を引摺りまわし、踏んだり打擲したりした。
が――そのうちに、ばばは、しまった！　というような顔して、急に、手を離した。ばたと、仆れたまま、お通はもう虫の息もしていない。
さすがに、狼狽えて、
「お通っ。お通やあ」
ばばは、彼女の白い顔をのぞいて呼んだ。雨に洗われた顔は、死魚のように冷たかった。
「……死んでしもうた」
ばばは、ひと事みたいに茫然とつぶやいた。殺す意志はなかった。あくまで、彼女を免す気もないが、こうまでする気もなかったのである。

「……そうじゃ。ともあれ、一度やしきへ戻って」
ばばは、そのまま去りかけたが、又ふと返って来て、お通の冷たい体を、窟の中へ抱え入れた。
入口は狭いが、中は思いのほか広い。遠い昔、求道の行者が、趺坐していた跡かのような所も見える。
「オオ酷や……」
ふたたび、ばばがそこから這い出ようとした頃、窟の口はまるで滝だった。そして奥のほうまで真っ白に飛沫が吹きこんで来た。

六

出ようとすれば、いつでも出られる身になってみると、この豪雨に、何も強いて、濡れに出て行くことはない。——
「やがて、夜も明けように」
そう考えて、ばばは、窟の中につぐなんだまま、暴風雨のやむのを待っていた。
が、その間、真の闇のなかに、お通の冷たい体と、一つにいるのが、ばばは、恐ろしかった。
白い冷たい顔が、責めるように始終、自分を見ている気がする。
「何事も、約束事じゃ。成仏してたもよ……怨むなよ」
ばばは、眼をつぶって、小声に経を誦し始めた。経を誦している間は、苛責も忘れ、恐さもまぎれた。幾刻もそうしていた。

チチ、チチ、と小禽の声がふと耳に沁む。

ばばは、眼を開いた。

洞窟が見えた。外から射す白い光が、鮮らかに、荒い土の肌を見せている。

夜明け頃から、雨も風も、はたとやんでいたらしい。窟の口には、金色の朝の陽が、跳ね返ってかがやいていた。

「なんじゃろ？」

起とうとしながら、ばばはふと、顔の前に泛き出している文字に気をとられた。それは、洞窟の壁に彫りこんである何人かの願文だった。

　てんもん十三ねん、天神山城の御かつせんに、浦上どののぐん勢に、森金作という十六の子を立たせて、ふた目とも見ざるかなしさのあまりに、諸所の御仏をたずねさまよい、今ここに一体のかん音菩薩をすえ奉ること、母の身にはらくるいのたねともなり、きん作がためには後生をねがいまつるに侍る

幾世の後、ふと訪うひともあらば、あわれと念ぶつなしたまわれ、ことしきん作が二十一ねんのくようなり

施主　英田むら　きん作が母

所々、風化して、読めない所もある。天文永禄の頃といえば、ばばにも古い憶い出しかない。

その頃、この近郷一帯の、英田や讃甘や勝田の諸郡は、尼子氏の侵略をうけて、浦上一族は諸城から敗退の運命を辿っていた。ばばの幼い頃の記憶にも、明けても暮れても、城の焼ける煙で空は晦く、畑や道ばたや、農家のある近くにまで、兵馬の死骸が幾日も捨てられてあった。

きん作とかいう十六歳の子をその合戦に立たせて、そのまま、ふた目とも会わなかった母親は、二十一年も経った後まで、そのかなしみを忘れかねて、子の後生を祈りつつ、諸所をさまよって、亡子の供養を心がけていたものとみえる。

「……さもあろう」

又八という子を持つばばには、同じ母なるその親の気もちが、ひしと分る。

「南無……」

ばばは、岩の壁へ向って、掌を合せ、嗚咽しないばかり、落涙していた。――そしてややしばし、泣き暮れていたが、われに回ると、その涙の合掌の下に、お通の顔があった。すでにこの世の朝の光も知らず、冷たい人となって、横たわっていた。

七

「お通っ……。わるかった。このばばが悪かったぞよ。ゆるしてたも。ゆ、ゆるして……たも」

――どう思ったのか。

ばばは、いきなりお通の体を抱きあげてさけんだ。悔悟のいろが、ばばの面には溢れていた。

「恐ろしや、恐ろしやの。子ゆえの闇とは、この事か。わが子可愛さにひとの子には、鬼となっていたか……お通よ、其方にも、親はあったものにのう。親御から見たらこのばばは、子のかたきじゃ、羅刹じゃ、……。ああわしのすがたは夜叉ともみえていたであろう」

洞窟の中なので、彼女の声はいんいんと籠って、彼女自身の耳へ応えてくる。

ここには、人もいない、世間の目もない。又、見得もない。

あるのは闇、いや菩提の光だけである。
「――その羅刹とも夜叉とも見えようわしを、思えば、其女は長のあいだ、ようまあ、怨みもせぬのみか、この窟へまで、ばばを救おうとて。……おう、今思えば、其女の心は真実じゃった。それを、邪に、悪推量して、恩をあだに憎んだのも、皆このばばの心がねじけていたためじゃ……。ゆるしてくれよ。お通」
そして果ては、抱きあげたお通の顔へ、わが顔を、ひたとつけて、
「このような優しい女子が、わが子にもあろうか。……お通よ、まいちど眼をあいて、ばばが詫びを、見ておくれやれ。まいちどものをいうて、ばばを、口の限り、罵って気をはらしてたも。お通よ」
そうお通へ向って悔悟する胸には、又きょうまでのあらゆる場合の自己の相が、すべて懺悔の対象になってまざまざと悔いの胸を噛んで来る。身も世もなく、
「ゆるしてたべ。ゆるしてたも」
ばばは、お通の背へ泣きぬれたまま、このまま、共に死なんものとまで、思いつめたが、
「いや、嘆いているまに、はよう手当したら、まいちど、生きぬ限りもない。――生きてあれば、まだ若い春の永いお通じゃに」
ばばは、お通の体を、膝から下ろすと、蹌踉いながら、窟の外へとび出した。
「あっ」
急に、朝の陽を浴びて、眼が眩んだのであろう。両手で、顔を掩いながら、
「――里の衆っ」

と呼んだ。
呼びながら、駈け出した。
「里の衆っ。里の衆——。来てくだされや」
すると、杉林の彼方から、誰かがやがやと人声がして、やがて、
「いたぞうっ。——おばばが無事で、あれにおるぞっ」
と、呶鳴る者があった。
見ると、本位田家の一族——身寄りの誰や彼が十名近く。
ゆうべ、佐用川の河原から、血にまみれて帰った郷士のひとりから急を告げたので、夜来の豪雨を冒し、ばばの居所と安否をさがしに出た人々とみえ、蓑笠を着け、誰も彼も、水から上がったように濡れていた。
「おお、ばば殿」
「ご無事じゃったか」
駈け寄って来た人々が、ほっと、安堵のいろを浮かべ、そして左右から労りぬくのを、ばばは殆どよろこぶ様子もなく、
「わしじゃない。わしはどうなと関わぬ。はよう、あの窟のうちに居る女子を手当してたも。助けてたも。……もう気を失うてから、刻経っている程に、早うせねば……早う薬などやらねば……」
まるで、うつつかのように彼方を指さし、縺るる舌に、顔じゅうに、異様な悲涙を湛えていった。

世の潮路

一

翌年の事だった。詳しくいえばその歳は、慶長十七年、四月にはいったばかりの頃である。
泉州の堺港からは、その日も、赤間ケ関へ通う船が、旅客や荷を容れていた。
廻船問屋の小林太郎左衛門の店にやすんでいた武蔵は、やがて船が出るとの報らせに、床几を立って、
「――では」
と、見送りの人々へ、挨拶をして、軒を出た。
「ご機嫌よう」
斉しく、そういいながら、見送り人たちは、武蔵を囲んで、船着の浜まで歩いて行った。
本阿弥光悦の顔が見えた。
灰屋紹由は病のよしで来られなかったが、息子の紹益が来ていた。
紹益は美しい新妻を連れていた。その新妻の麗しさは、人目をそばだたせるものがあった。
「あれは、吉野やないか」
「柳町の？」

「そうじゃ、扇屋の吉野太夫」
と、袖ひきおうて囁いた。
武蔵は、紹益から、
（わたくしの妻で……）
とは引き会わされたけれど、前の吉野太夫であるとは紹介されなかった。
又、顔にも、覚えがない。扇屋の吉野太夫ならば雪の夜、牡丹を焚いてもてなされた事がある。彼女の琵琶にも耳澄ました覚えがある。
が、武蔵の知っているその人は初代吉野であって、紹益の妻なる女性は二代吉野なのであった。
花散り花開く。――廓の年月はいとど流れが早い。
あの夜の雪も、あの牡丹の薪の炎も、今は夢かのようである。その時の初代吉野のすがたも、今はどこに、人妻になっているやら、孤独やら、うわさもないし、知る人も絶えてない。
「はやいものですね。初めてお目にかかった頃から思うと、もう七、八年は経っている」
光悦も、船まで歩きながら、ふと呟いた事だった。
「……八年」
武蔵も、転た、歳月の思いにたえなかった。――今日の船出が、何となく、人生の一期劃のように思われもして。
さて又。
その日、彼をここに見送った人々の中には、以上ふたりの旧知を始め、妙心寺の愚堂門下にず

っといる本位田又八。京都三条車町の細川邸の侍たち二、三名。
又、烏丸光広卿の名代として供連れの公卿侍の一行。
それから、半年ほどの京都滞在中に、何かと知り合いになった者や、彼が拒んでも拒んでも、彼の人間と剣を慕って、彼を師とよぶ者たちが、それは無慮二、三十名以上もあろうか——何しろ武蔵にとってはやや迷惑すぎるほどな同勢をもって、見送りに加わっている一団もあった。
で——
送らるる武蔵は、語りたい者とは却って語りあう間もなく独り船に移ってしまったのであった。
行先は、豊前の小倉。
そして彼の使命は、細川家の長岡佐渡の斡旋で、佐々木小次郎と、積年の宿題たる試合の約を、果すにあった。
もちろん、このはなしが、具体的に極るまでには、藩老長岡佐渡の奔走や文書の交渉がかなりあって、武蔵が、昨秋以来、京の本阿弥光悦の長屋にいるということが分ってからでも、約半年もかかって、ようやく、まとまった事なのであった。

二

巌流佐々木小次郎と、いつかは一度、一期の面接は避け難いであろうとは、武蔵も疾く期していた事だった。
——遂に、その日が来た。

だが。
武蔵は、こんな晴がましい人気を負ってその場へ臨もうなどとは露だにも予期していなかった。
きょうの出立にしても然りである。こういう大仰な見送りなど、心の裡ではもってのほかなと思う。
思いつつ、拒み得ないのは、世間の人々の好意である。
武蔵は恐いのである。理解ある人の好意には、襟を正すが、その衆望が浮薄化して、人気というような波に乗せられることを、恐ろしいと思った。
ふとすれば、自分も凡夫だし、思い上がらないものでもない。
いったい今度の試合にしてもそうである。誰が、こういう切迫の日を持って来たか。考えてみると、小次郎でも、自分でもない気がする。むしろ周囲だと思う。いつとはなく、二人を対峙させ、二人を試合わせてみることに、世間が先に、興味や期待を大きく醸して、
（やるそうだ）
と、いい、
（やる）
と、断じ、遂に、
（いつの何日）
と、まだうわさのうちから、日まで取沙汰されて来たのだった。
こういう世評の対象になったことを、武蔵は密かに悔いている。かくては自分の名声とやらは

喧伝されるに極っているが、彼は今、決してそんなものを求めていなかった。むしろ、もっと独りの沈潜と、独りの黙思とを必要としている。——というて、それは拗者(すねもの)のすねた心ではさらさらない。行と工夫との合致のために。——そして愚堂和尚の啓蒙をうけてから後は、なおさら、道業の生涯の遠いことを、彼は痛感しているのであった。

(——さはいえ)

と、彼は又、思うのである。

世間の恩というものを。

生きていること、それはすでに、世間の恩であった。

今日。

この船出に、身に纏(まと)うている黒い小袖は、光悦の母が自ら針を持って縫うてくれたものである。

手に持つ新しい笠や草鞋。その他一物たりとも何か世間の人の情の籠った物でない物はない。

いわんや、碌々(ろくろく)、米も作らず布も織らず、百姓のたがやす粟(あわ)を喰っている身は——正しく世間の恩で生きている。

(何をもって酬(むく)いようか)

心をそこにおく時、彼は、世間に対して慎む心こそあれ、迷惑がる気もちなど起すのは勿体ないと知るのだったが——しかし、その好意が余りに、自分の真価に対して過大であり過ぎる時、彼は、世間を恐れずにいられなかった。

とつこうつ。
別辞。
又、海上無事の祈り。
旗やら、会釈やら。
送る者、送らるる者の間に、眼にみえぬ時はながれて、
「――おさらば」
「おさらば」
船は、纜（ともづな）を解き、武蔵は船に、人々は岸に残って、呼び交（か）う間に、大きな帆は青空に翼を張った。
すると、一足おくれて、
「しまった」
と、船出の後へ、駈けつけて来た旅の者があった。

三

港を出たばかりの船は、彼方（かなた）に見えているのに、わずかな遅刻で、それに間に合わなかった若者は、返す返す地だんだを踏んで、
「ああ、遅かった。こんな事なら眠らずにでも来るのだったのに」
及ばぬ船の影を見送っている眼には、ただ乗遅れただけではない、もっと切実な恨みがみえた。

「もしや、権之助どのではありませぬかな」
同じように、船が出ても、なお佇んでいた人々の中から、光悦がその姿を見かけて、近づきながら声をかけた。
夢想権之助は、その手についていた杖を、小脇へすくって、
「お。あなたは」
「いつか河内の金剛寺でお目にかかった……」
「そう。忘れてはいませぬ。本阿弥光悦どの」
「ご無事でお在でられたとは、さてさてめでたい。実は、仄かに、おうわさを聞き、生死のほども案じておりましたが」
「誰に聞きましたか」
「武蔵どのから」
「え。先生のお口から？　……はて、どうしてであろう」
「あなたが、九度山衆に捕まって、どうやら隠密の疑いで、害されたかも知れぬという消息は、小倉の方から聞えて来たのです。——細川家の御家老、長岡佐渡様のお手紙などから」
「それにしても、先生が御存じの仔細は」
「今朝お立ちになる昨日まで、武蔵殿は、てまえの門内の長屋にお住居でした。その居所が小倉へ聞えたので、小倉からも度々、書面の通ううち、お連れの伊織殿も今では長岡家にいるとやらで」
「えっ。……では伊織は、無事におりまするか」

権之助は、今日の今、初めてそれを知ったらしく、そしてむしろ、茫然たる面持だった。
「ともあれ、ここでは」
と光悦に誘われて、近くの磯茶屋の床几を借り、交々に語りあってみると、権之助が意外としたのもむりはない。
月叟伝心――九度山の幸村は、あの時、権之助を一見すると、逍にすぐ、権之助の人となりを知ってくれた。
で、彼の縄目は、
(部下の過失)
と、即座に、幸村の謝罪と共に解かれ、禍いはかえって、ひとりの知己を得る幸いになった。
それから、紀伊越えの山の割れ目に墜ちた伊織の身を、幸村の配下の者も、力を協せて探してくれたが、杳として、きょうまで、生死も知れなかった。
断層の谷間に、死骸は見あたらないので、
(生きている)
とは、確信していたものの、それだけでは、やがて、師の武蔵にあわせる顔もない。
以来、権之助は、近畿をたずね歩いていた。
稀々、巷間には、近く武蔵と細川家の巌流とが、一戦の約を果すとか、もっぱら噂もあって、武蔵が京あたりにいるらしい事も察したが、何しろ、合せる顔もないとして、権之助はそう聞くほど更に、伊織を尋ねることに焦心っていたのだった。
――と。その武蔵が、愈々、小倉へ向って立つという事を、きのう九度山で聞いた。

（かくては何日か）

と、意を決し、面を冒して会うつもりで、早々、道を急いで来たのだったが、船の時刻が確としないため、一足ちがいとなり、何とも残念至極——と、繰り返して、権之助はいうのだった。

四

光悦は、なぐさめて、

「いや、そうお悔みなさるには当るまい。次の便船までには数日の間があろうが、陸路を追って行かれれば、小倉表で武蔵殿に会うなり、長岡家を訪れて、伊織殿とご一緒になるなりすれば——」

いうと、権之助は、

「元より、すぐ陸路を参るつもりでは御座いますが、小倉へ着くまでの間でも、先生とひとつにいて、お身廻りの事でも勤めたかったのでござります」

と、衷情を述べ、

「それに、今度の御発足は、怖らく先生にとっても、生涯の御浮沈かと思われます。平常、ご修行にひたむきな武蔵様の事ゆえ、万が一つにも、巌流に敗れをとるような儀はあるまいとは思われますが——勝敗はわかりません。あながち、修行を積んだ者が勝ち、驕者は負けるとも限りません。——そこに人間力を超えたものも加わるのが、勝負の運、又、兵家の常ですから」

「けれど、あの沈着ぶりなら、自信がありそうです。お案じには及びますまい」

「と、思いはしますが、聞くところに依ると、佐々木巌流というものは、真に稀れな天才らしゅ

うございます。殊に、細川家に召抱えられてからは、朝暮の自戒鍛錬は一通りでないとも聞き及びました」

「驕慢な天才と、凡質を孜々と研いた人と、いずれが勝つかの試合ですな」

「武蔵様も、凡質とは思われませんが」

「いや決して、天禀の才質ではありますまい。その才分を自ら恃んでいる風がない。あの人は、自分の凡質を知っているから、絶えまなく、研こうとしている。人に見えない苦しみをしている。それが、何かの時、鏘然と光って出ると、人はすぐ天禀の才能だという。――勉めない人が自ら懶惰をなぐさめてそういうのですよ」

「……いや、おおきに」

権之助は、自分がいわれている気がした。そしてそういう光悦の、のどかで間の広い横顔をながめながら、

(この人も)

と、思い合される所があった。見るからに悠閑の逸人らしい。何の険も針もない眸も、ひとたび彼の生む芸術へかかった時の光はこうではあるまいと思われた。汀にさざ波一つない日の湖と山雨を孕んだ時の湖とぐらいな相違があるのではなかろうかと。

「光悦どの。まだお帰りになりませんか」

その時、若い身を法衣につつんでいる男が、茶屋をのぞいていった。

「オ。又八さんか」

光悦は、床几を離れ、

「――では、連れが待っていますから」
と、権之助へ、挨拶を残すと、権之助も共に起って、
「いずれ、大坂まで」
「そうです。間に合えば、夜船ででも、淀川から帰りたいと思いますが」
「――では、大坂まで、ご一緒に参りましょう」
権之助は、そのまま陸路を豊前の小倉まで行くつもりらしい。
若い妻を連れた灰屋の息子や、細川藩の留守居や、他の人々も、それぞれ一組になって、同じ道を、先へ行くもあり、後から来る者もあった。
又八の現在やら、以前の身の上ばなしなど、その途々、何かと語り種になった。
「どうか、武蔵どのが、首尾よくやればよいが、あれで、佐々木小次郎も、喰えぬ男だし、凄い腕を持っているからな」
又八は、時々、憂わしげに呟いた。小次郎の恐るべきことを、彼はよく知っていたからである。
黄昏――
三人はもう大坂の人混みを歩いていたが、気がつくと、いつのまにか、又八が、連れの中から見えなくなっていた。

五

「どこへ行ったのやら？」

光悦と権之助とは、道をもどって、連れの姿を、夕方の往来にさがした。
又八は、と或る橋の袂に、ぼんやり立っていた。
「何を見て？　……」
と、怪しみながら、彼の様子を二人が遠くから見まもっていると、又八の眼は、河原にあって、夕方の仕掛に忙しい鍋釜だの、野菜物だの、玄米だのを洗っているこの附近の長屋女房のかしましい群に、じっと注いでいるらしいのである。
「はての、あの容子は」
凡事でないその面持を遠方からも察したので、わざと二人は、しばらく彼の意のままに措いて、言葉をかけずに待っていた。
「……ああ、朱実だ。……朱実にちがいない」
又八は、独り、そこに佇んでうめくように唇から洩らした。
河原の女房たちの中に、その朱実のすがたを、彼は見出していたのだった。
偶然——という気もしたが、偶然でない気も一層強くした。
かりそめにも、江戸表の芝の長屋では、女房とよんだ女である。その時は、宿世のふかい縁などとは元より思いもしなかったが、時経て、まして黒衣に身をつつんで後は、そうした戯れ事に似た事も、戯れ事とはなし限れない、罪業を胸に詫びていた。
——が、朱実の姿は、はなはだしく変っていた。
その変った姿を、通りすがりの橋の上からひと目見て、すぐ、
（あっ、朱実）

と、胸打つほどのものは、恐らく自分だけしかあるまいと思う。偶然ではない、生命と生命との交流は、同じ土に息づいている以上、いつかこうあるのが本当である。

それはさて措き。

変り果てた朱実には、つい一年余ほど前の色も姿態もなかった。汚い負紐で、背なかには、二歳ばかりの嬰児を背負っていた。

朱実の産んだ児！

又八の胸には、まずそれがどきっと響いたにちがいない。

朱実の面も、見ちがえるほど、痩せている。それに、髪も埃のままの束ね髪で、木綿筒袖の、見得も風もないのを裾短に着、腕には重たげな手籠をかけ、口達者な長屋女房の揶揄半分な囀りのなかに、物売りの腰を低めているのだった。

手籠の中には、海草だの、蛤や鮑などが売れ残っていた。背なかの児が、時々泣くので、籠を下へ置いては、子をあやし、子が泣きやむと、女房たちへ向って、商いをせがんでいるふうだった。

（……あ。あの児は？）

又八は、両手で、自分の頬をぎゅっと抑えた。胸の裡で、歳月をかぞえた。二歳としたら？ああ江戸の時分になる。

――と、すれば。

数寄屋橋の原で、奉行所衆の割竹の下に、莚をならべて、共に百叩きに会ったあげく、西と東に放たれたあの時は――もう彼女の肉体に、今の子どもは胎内にあったわけである。

「………」
夕方の薄ら陽が、河原の河水から又八の顔に揺らいで、顔じゅうが溢れる涙みたいに見えた。
うしろを忙しい往来が流れているのも彼は忘れていた。やがて、何も知らない朱実が、売れない手籠の物を腕にかけて、又、とぼとぼと、河原の先へ歩き出してゆくのを見ると、彼は、何もかも打ち忘れて、
「おういっ」
手を揚げて、走りかけた。
光悦と権之助とは、そこで初めて、駈け寄りながら、
「又八どの。何じゃ。どうなすったのだ?」
と、呼びかけた。

六

又八は、はっと振向いて、連れの者に、心配をかけていた事を、初めて気づいたかの如く、
「あっ。すみませんでした。……実はその」
実は――といったものの、その実をひとに伝えるには、急場の言葉では分って貰えそうもない。
殊に、今ふと、胸によび起した彼の発心は、彼自身でも、説明にむずかしかった。
勢い、いうことは、そこで唐突にならないわけにゆかない。又八は、喉につかえる交々な感情の中から、最も手っとり早いことだけいった。
「――すこしその、理がありまして、急に私は、還俗しようと思い立ちました。もっとも、ま

だ、和上から、ほんとの得度もうけていない身ですから、還俗するといっても、いわなくても、元々、ありのままなんですが」
「え……還俗する？」
又八は、辻褄合っているつもりだが、平静に聞く者には、ひどく辻褄が合わなすぎた。
「それは又、どういう仔細かな。どうもご容子がちと変だが」
「詳しい事は、いえませんし、いっても、他人には馬鹿げていますが、以前、一緒に暮していた女にそこで会いました」
「ははあ。昔なじんだ女子に」
呆れ顔する二人に、しかも彼は生真面目であった。
「そうです。その女子が、嬰児を負ぶっているので——。年月を繰ってみると、どうも自分の生ませた子に違いありません」
「ほんとですか」
「ほんとに子を負ぶって、河原を物売りして歩いていたんで」
「いやいや、落着いて、よく考えてごらんなさい。いつ別れた女子か知らぬが、ほんとに、自分の子かどうか」
「疑ってみるまでもありません。いつの間にか、てまえは父になっていたのです。……知らなかった。済まなかった。……急に今、胸を責めつけられました。てまえはあの女に、あんな惨めな物売りはさせては置かれません。又、子に対しても、父らしい務めをしなければなりません」
「…………」

光悦は、権之助と、顔を見合わせて、多少の不安を覚えながらも、
「……では、浮いたはなしではないのじゃなあ」
と、つぶやいた。
又八は、法衣を解き、数珠と共に、光悦の手に託して、
「まことに、憚りですが、これを妙心寺の愚堂様に、ご返上申してください。そして恐れ入りますが、今のように仰っしゃって、又八は大坂でひとまず父になって、働くと伝えて下さいませぬか」
「いいのかな。そんな事で、これをお返し申して」
「和上様は、常々てまえにいっていました。町へ帰りたかったらいつでも去れよと」
「ふうむ……」
「又。修行は寺でもできぬ事はないが、世間の修行が難事。汚いもの、穢れたものを忌み厭うて、寺にはいって浄いとする者より、嘘、穢れ、惑い、争い、あらゆる醜悪のなかに住んでも、穢れぬ修行こそ、真の行であるともいわれました」
「むむ、いかさまの」
「で、もう一年の余も、お側におりますが、てまえにもまだ、法名も下さいません。きょうまで、又八、又八で済ましていました。――後で又、いつでも、自分でわからない事ができたら、和上様の御門へ駈けこみます。どうぞ、そうお伝え置きくださいまし」
いい終ると、又八は河原へ駈け下り、もう夕霧に仄暗い人影を、あれかそこかと追って行った。

待宵舟

一

旗のような、紅い夕雲がひときれ飛んでいる。凪いだ海の底を、蛸の這うのも見えるほど、水も空も、この夕方は澄んでいた。

その飾磨の浦の川尻に、午ごろから小舟をつないで、やがて迫る黄昏に、佗しい炊煙をあげている一艘の世帯がある。

「寒うはないかの。……風が冷とうなって来たが」

七厘の火に、柴を折り燻べながら、お杉ばばは、舟底へいう。

そこの苫の陰には、船頭の妻とも見えぬ嫋かな病人が、つかね髪を木枕にあてて、白い面をなかば、夜具の襟にかくして寝ていた。

「……いいえ」

病人は、微かに頭を振る。

そして、少し身を擡げ、粥を煮る米を洗って七厘へ仕掛けているばばの姿をそこから伏拝むように、

「ばば様、あなたこそ、先頃からお風邪ぎみではございませんか。——もう余り、わたしの事で

ご心配なさらないで……」
と、いう。
「なんの」
ばばは、振顧って、
「そなたこそ、そのようにいちいち気がねしてたもるな。……のうお通よ。やがて待つ人の船も見えようほどに、粥なと食べ、力をつけて、待ったがよい」
「ありがとう存じまする」
お通は、ふと、涙をうるませ、苫の陰から、沖をながめた。
蛸釣舟や、荷舟や、幾つかの舟影は見えたが、彼女の待つ堺港から立った豊前通いの便船は、まだ帆影すら見えて来ない。
「……………」
ばばは、鍋をかけ、火口をのぞいている。粥はやがてくたくたと煮えて来た。
徐々に、雲は暗くなる――
「はて、遅いのう。遅くも夕方までには着こうとの事じゃったが」
波の障り、風の障りもない海なのに――と、ばばも、待つ船を、頻りと待ちあぐねて、沖を見てはつぶやいた。
いうまでもなく。
この夕方、ここに寄る予定の便船というのは、つい昨日、堺港を出た太郎左衛門船の事で、それには、小倉へ下る宮本武蔵が便乗したと――早くも山陽の街道筋には知れ渡っていた。

うわさを、聞くと同時。
姫路藩の青木丹左衛門の子息城太郎は、すぐ使いを走らせて、讃甘の本位田家へ知らせた。
知らせをうけたばばは、その吉報をたずさえて、又すぐ、村の七宝寺へ駈けた。お通は、そこに病を養っていた。

去年の秋の末頃、暴風雨の夜、佐用山の窟へ、おばばを救いに行って、却っておばばの酷い打擲にあい、気を失ってしまったあの時の明け方から——ずっと続いて、意識は元に蘇えっても、体のぐあいは、前のようにすぐれなかった。

（ゆるして下されや。腹の癒ゆるまで、このばばをどんなにもして——）

その後のばばは、彼女の顔を見るごとに、懺悔の涙をながしていう。

お通は又、

（勿体ない）

と、それをしも、かえって苦痛にして、自分の体には、以前からどこことなく、こうした持病の芽があったので、決して、ばば様のせいではないとなぐさめる。

事実。お通には、そうした病の経歴がなくはない。数年前、京都の烏丸光広の館にいた頃も、幾月かを病に臥した事があり、その折と今度と、朝夕の容態も、よく似ていた。

夕方になると、微熱が出て、軽い咳がともなった。目に見えぬほどずつ、体は瘦せてゆき、その麗しい容貌は、よけい麗しさを増し、むしろその美はあまりに研がれ過ぎて来て、対語する者をして、ふと憂えしめるほどだった。

二

しかし——
彼女のひとみは、いつも欣びと希望にみちていた。
欣びとしては。
(おばば様が、自分の心を分って下すったのみか、同時に、武蔵様やすべての人達へも、御自身の過ちへお気がついて、生れ変ったような、優しいばば様になって下された——)
と、いう事実を眼に見、又、生きている希望としては、
(近いうちに)
と、何がなし、心待ちの人と会う日も、近い心地を、覚えていた。
ばばも亦、あれ以来は、
(きょうまでの、わしが罪と、心得違いより、そなたを不幸にした償いには、きっと、武蔵どのへ、ばばが両手をついて詫びても、そなたの身を、よいように頼んで進ぜるぞよ)
そういって、一族の者は元より村の誰彼へも、お通と又八との、かつての古証文は、きれいに破棄して、やがてお通の良人たる人は、武蔵でなくてはならないと、自分の口からいうほどに変っていた。
武蔵の姉のお吟は、ばばがまだこういう気持にならない前には、彼女を呼び出すために嘘をいって、佐用村の附近にいるようなことをいったが、事実は、武蔵が出奔後、播磨の縁類へ一時身を寄せ、そこから他家へかたづいたとかいうのみで、その後の消息は、伝わっていなかった。

で——。七宝寺に戻って、以前からの知辺といえば、やはり誰よりもおばばとが濃い仲だった。そのおばばは又、朝晩に七宝寺を見舞って、

（薬は服んだか。——食物は。——きょうの気分は？）

と、真心のありたけを傾けた、看護の世話をしてくれたり、又、心を力づけてくれるのだった。

又、ある時はしみじみと、

（もし、いつか窟で、そなたがあのまま、蘇えらなんだら、わしもその場で、死ぬ気であった）

ともいった。

偽りの多い人だったから、彼女も初めは、ばばの懺悔に、又いつ、変化が来まいものでもないと思っていたが、日がたつほど、かえってばばの真情は、濃く厚く、細やかになるばかりだった。

時には、

（こんなにも好いお方とは思わなかった）

と、お通ですら、以前のばばと今のお杉とが、同一に考えられない程だったから、本位田家の親しい者も、村の人々も、

（どうして、あんなに変りなさったか）

と、皆いい合った。

その中に、誰よりも、幸福を知って来たのは、おばば自身であった。

会う者、ことばを交わす者、身近の者——すべてが、自分に対して、以前とは、まるで変って来たからである。にこやかに迎え、にこやかに迎えられ、よい老婆と敬われる幸福を、六十を越

えて、彼女ははじめて知ったのである。

ある者は、ぶっつけに、

（ばばさんはこの頃、お顔までよいお顔になんなすったのう）

と、正直にいった。

（そうかも知れぬ）

と、ばばはそっと、鏡を取り出して、自分の相を見入った。

しみじみ、歳月を覚えた。故郷を立った頃には、まだまだ半分以上も、交じっていた黒い髪も、一毛のこらず真っ白になっていた。

心の相も。

顔かたちも。

純一で、白いものに、立ち回っているように、自分の眼にも見えた。

三

（堺港を出る朔日の太郎左衛門船で、武蔵どのは、小倉へ赴くそうな）

かねて、武蔵が通過する節はすぐ知らせるといっていた姫路の城太郎から、斯くとの知らせに、

（どうしやる？）

問うまでもないが、お通へ心を訊くと、お通は、元より、

（行きます）

と、いう。
夕方はいつも、微熱が出て、大事に夜具へ身を容れているが、歩けぬほどな病気ではない。
(さらば)
と、直ぐ七宝寺を立ち、途中はお杉がわが子のように見まもって、一夜を、青木丹左衛門の屋敷に休み、
(豊前通いの便船なら、飾磨へは必ず寄る筈。一夜は、積荷を下ろすため、泊りとなろう。藩の人々も、出迎えに行くが、そなた達は、人目につかぬように、川尻の小舟にいたがよい。——会う機は、わしら父子が、よいように作って進ぜる)
と、丹左衛門のことばに、
(なにぶん)
と、その日、午ごろ飾磨の浦につき、川尻の舟に、お通をやすめ、以前、お通の乳母なる人の家から、何かと物など運ばせて、太郎左衛門船がはいるのを、今か今かと待ちかねていたのだった。
ちょうど、その乳母なる人の染屋の垣の近くには、べつに、武蔵の通過を、かねてから待って、彼のために、壮途を祝し、一夕の宴をもうけて、又、彼の人間をも見ようとする姫路藩の人人が、二十余名も、駕籠までもって、迎えに出ていた。
その中に、青木丹左衛門も居、青木城太郎もいた。
姫路の池田家と武蔵とは、その郷土的にも、亦、武蔵が若年時代の記憶にも浅からぬ縁がある。
(当然、彼は光栄とするだろう)

迎えに出ている池田家の藩士たちは、皆、そう意識していた。
丹左衛門も、城太郎も、その見解に変りはなかった。
けれどただ、お通の姿をその人たちに見せて、誤解を招いてはいけない。武蔵も迷惑とするかもしれない。——そう考えたので、わざと彼女とお杉だけは川尻の小舟へ遠のけておいたのだった。

——が。どうしたのか。
海は暮れ、夕雲の茜はうすれ、いつとはなく宵明りが青黒くただよって来るのに、まだ、船の影は見えても来ない——
「遅れたのかな？」
誰かが、一同を顧みる。
「——そんな筈はないが」
と、自分の責任のように答えたのは、京都の藩邸にいて、武蔵が船便で朔日に立つと聞くと共に早馬で知らせて来た藩士だった。
「船の出る前、堺の小林へ使いをやり、朔日立ちと、確かめても来たのだから」
「風もないきょうの凪、そう遅れるわけはないからやがて見えよう」
「その風がないから、帆走りはよほどちがう。遅れたのは、そのせいじゃよ」
立ちくたびれて、砂に坐る者もある。白い夕星が、いつか、播磨灘の空をつつんでいた。
「ア！　見えた」
「見えたか」

「――あの帆影らしい」
「おお。なるほど」
ようやく、人々は、騒めき立って、浜の船着のほうへ、ぞろぞろ歩いて行った。
城太郎は、その群を、そっと走りぬけて、川尻へ駈けて行き、下の苫船へ向って大声で告げた。
「――お通さん。ばば殿。見えたぞ。武蔵様の乗っている船の影が」

四

こよい寄る堺の太郎左衛門船。待ちかねていた武蔵の乗っている便船。それらしいのが今沖から見えて来たとの知らせに小舟の苫は、
「えっ。……見えてか」
と、揺れうごいて、
「何処に」
と、ばばも起つ。
お通もわれを忘れていう。
「――あぶない」
ばばはあわてて、舷へ縋り立とうとするお通を、抱き支えた。
そして共に、身を伸ばし、
「おお、あれかの？」

息をのんで見まもった。
宵凪の海づらを、星明りに黒い翼を張って、一艘の大きな帆船が——見まもる二人のひとみの中へ辷り込んで来るように、見ている間に、近づいてくる。
城太郎は、岸に立って、指さしながら、
「あれだ……あれだ」
「城太どの」
ばばは、確と。——離せば萎えて、そのままほろりと、小舟の縁から落ちてしまいそうな、お通の体を抱きしめて、
「済まぬが、急いで、この小舟の櫓を把って、あの便船の下へ漕ぎ寄せてたもらぬか。——少しも早う、会わせたい。ものいわせたい。お通を連れて武蔵どのへ」
「いや、ばば殿。そう急いたところで、致し方はない。今、藩の方々が、彼方の浜に立ち並んで待ちうけておられるし、早速に、船手の者が一名、早舟を漕ぎ出して、武蔵様を迎えに行った」
「ではなおさらの事。そう人目をはばかってばかりいては、お通を会わせる遑もあるまいに。——わしがどうなと、人前はいい繕おう。家中の衆に囲まれて、お客として持って行かれぬまに、一目でも先に会わせてやりたい」
「困りましたなあ」
「だから、染屋の家に、待っていた方が好かったに、おぬしが、藩の衆の人目ばかり恐れるので、このような小舟に潜み、かえってどうもならぬではないか」
「いやいや、そんな事はありませぬ。世上の口はうるさいもの、大事な場所へ赴かれる矢先に、

あらぬ噂でも流れてはと、父の丹左衛門が案じるので、取計らったまででござる。……ですから、父とも計らい、後刻、隙を見て、武蔵様をここへお連れ申して参りますゆえ、それまで、窮屈でもここに待っていて下さい」
「ではきっと、これへ武蔵どのを、案内して来て下さるかの」
「迎えの小舟から、武蔵様が上がりましたら、ひとまず、染屋の縁を借りて、家中どももご一緒に休息となりましょう。……その間に、ちょっとお連れ申します」
「待っていますぞよ。固くたのんだぞ」
「そうして下さい。……お通どのも、その間、そっと寝んでおられたがよい」
いい捨てて、城太郎は遽に気も忙しげに、元の浜辺のほうへ駈け去った。
ばばは、お通をそっと、苫の陰の臥床へ抱えて、
「寝ていやい」
と、労った。
木枕に、面を伏せると、お通はしばらく咽せているのだった。今、急激に身を動かしたのが悪かったか、あまりに潮の香が強いためか――
「また咳が出るのう」
ばばは、彼女の薄い背をさすって与えながら、その病苦を紛れさせようとしてか、頻りに、武蔵がここに見えるのも、もう僅かな間と、うわさした。
「ばば様。もう何ともございません。ありがとう御座います。勿体ない、どうぞお手を休めて」
咳がやむと、彼女は、髪のみだれを撫であげて、ふと、わが姿を顧みた。

五

かなり時が経った。だが、待つ人はなかなか来なかった。

ばばは、お通ひとりを舟に残して、岸へ上がった。城太郎が案内して来る筈の武蔵の影を、そこに佇んで待ちあぐねている様子——

お通は。

やがて、武蔵がここへ来るかと思うと、人知れず動悸が打って、静かに身を横たえてもいられないらしい。

木枕や臥床を、苫の隅へ押しやって、襟をあわせたり帯の結びを直したりした。恋を覚えそめた十七、八の年頃の動悸も、今の動悸も、彼女には少しも変って来たふうがない。

小舟の舳には、篝火が吊ってあった。夜の江口にその火は照りはえて、お通の胸にも赤々と燃えさかった。

彼女は今、病を忘れていた。小舟の縁から白い手をのばし、櫛をぬらして髪を撫であげた。そして掌に少しの白粉を溶き、それとも知れぬほど淡く顔を粧った。

彼女は人にも聞いている。

侍ですら、深い眠りをとった直ぐ後とか、体のすぐれぬ時などに、やむなく君前に出たり人と会う時は、手水をつかう間にそっと手早く、頬に隠し紅を粧って、はればれしく対語するとか——いう心懸を。

「……だが、何といおう」

お通は又、武蔵と会った上のことが心配になった。
語れば、生涯はなしても、尽きないほどなものはある。
けれど、いつもいつも、会えば何もいえなかった。
何のために！
と、かの人は又怒るかもしれないと惧れる。
折も折である。
世上にも聞え渡って、天下の衆目の中を今、佐々木小次郎との試合にゆく途中とあれば、彼の気性、彼の信念、おそらく自分と会うことなど、楽しい事とは思うてもくれまい。
が——それだけに、彼女にとっては、なおさら一期の折であった。相手の小次郎に武蔵が敗れるとは思えなかったが、不測な敗北がないとは又、いえない気もする。いやいや、いずれが勝つか、という世評では、武蔵が強しとする者、小次郎が優れたりという者、相なかばしているのである。
もし、きょうという折を措いて、万が一にも、このままふたたびこの世で相見ることができないような不幸が——かりにもあったとしたら、悔いは百年の後も消すことができないであろう。
天にあっては比翼の鳥、地に在っては連理の枝とならん——と来世を願った漢帝の悔恨を、胸に歌に繰り返して、泣き死んでも追いつかない事である。
——何と叱られても。
と、彼女は病苦を人へは軽く見せてまで、強い気持でここへは来たのであったが、こうして愈〻、その人と会う時が迫ってみると、胸は痛いほどときめき、心は武蔵がどう思うかを惧れ案

じて、会うての上のことばすら、見つからなかった。

岸へ上がって佇んでいるおばばは又おばばで、こよい武蔵と会ったら、先ず何よりも積年の怨みや誤解を水に流して、心の重荷を解きほぐしたい。又、その証として、彼が何といおうと、お通の生涯は、彼に託されなければならない。手をついて頼んでも、そうしてやらねばお通にもすまない——

などと独り、胸に誓いながら、水明りの宵闇を見まもっていると、

「——ばば殿か」

駈けて来た城太郎の影が、近づきながら呼びかけた。

六

「待ちかねていた。城太どのよ。——して、武蔵どのには、直ぐこれへ見えますかの」

「ばば殿。残念だ」

「え。残念とは」

「聞いてくれ。仔細はこうだ」

「仔細などは、後でよい。いったい武蔵どのには、これへ来るのか、来ないのか」

「来ぬ」

「なに、来ぬと」

ばばは茫然、そういって、お通と共に、昼から待ちぬいていた心の張りを崩して、見るにたえない失望の色を顔にあらわした。

――で、いい難そうに、城太郎がやがて説明していうには。

実はあれから、ややしばし、同藩の人々と共に、便船から上がって来る武蔵の軽舸を待っていたところ、いつになっても、沙汰もなし、軽舸も来ない。

でも、太郎左衛門船の影は、遠浅の沖に泊って、見えているので、何かの都合で、遅れたのであろうかと、噂しながら、一同なお浜辺に立ち並んでいたが、やがて沖へ迎えに行ったお船手の軽舸の者が、漕ぎ戻って来る様子。

やれ、見えた――

と思ったのも束の間、見れば軽舸の上には、武蔵の姿も見えぬ。どうした理か、と訊ねると、

(こんどの船都合は、この飾磨に上がる旅客もなし、少しの積荷は、沖待の船頭から受取ったので、船はすぐここから室の津へ廻し、先を急ぐので)

という便船の者の言葉だとある。

そこで、軽舸の者は又、

(この便船には、宮本武蔵と申さるるお人が乗り合せておる筈。姫路藩の家中の者でござるが、一夜はお泊りと存じ、他の者も大勢、浜までお迎えに参っております。わずかな間でも、ちょっとこの軽舸でお上がりくださるまいか)

そう申し入れたところ、船頭の取次を聞いて、やがて武蔵の姿が艫の舷にあらわれ、下の軽舸へ向っていうには、

(せっかくの御好意なれど、このたびは、御承知のとおり大事の一儀にて、小倉におもむく途中の旁〻、便船もこよいのうち室の津へまわる由。あしからず御一同へお伝えを)

との事に已むなく引き返して来ると、その軽舸が浜へ戻って報告している間に、太郎左衛門船はふたたび帆を張り、今、飾磨の浦から立ったばかり――というのであった。

城太郎は、こう仔細を告げ、

「是非もない儀と、家中の者も一同立ち去った。――だが、ばば殿、此方は何としたものだろう」

と彼も失望の底に落ちたように力なくいうと、

「なんじゃ、ではもう、太郎左衛門船は、この浦を出て、室の津へ向うたというか」

「そうだ。……あれ、ばば殿には見えぬか。今、洲の先の松原を交わして、西へ行く船が、太郎左衛門船。……あの艫には武蔵様が立っているかも知れぬ」

「おう……あの船影か」

「……残念ながら」

「これ城太どの。自体、そなたが落度であろうが。なぜ、迎えの軽舸へ自分も乗って」

「いまさら何を申しても」

「ええまあ、みすみす船の影をそこに見ながら、口惜しいことわいな。……お通に、何というて聞かそうぞ。城太どの、わしにはいえぬ。……そなたから仔細を告げてたも。……したが、よう落着かせてから話さぬと、一層、病気を悪うするかもしれぬぞよ」

七

城太郎が告げに行かなくても、ばばが辛い心を忍んで伝えなくても、そこでの二人の話し声

は、小舟の苫の陰にいて、耳澄ましているお通へはもう聞えていた。

どぶり……どぶり……

舷をたたく川口の静かな夜波に胸を衝かれて、あふれ出る涙をどうしようもなかった。

さはいえ。

彼女はこよいの薄縁を、城太郎のように、ばばのように、遣る方なき残念とはしなかった。

(こよい会えなければ他の日に、ここで語れねば又よその渚で)

と、独りしている十年の誓いに少しも変りはない。

むしろ武蔵様が、降りて途中の土を踏まない気持に、

(さもあろう)

とすら、同じ心が持てるのであった。

聞説。——巌流佐々木小次郎という者は、今では中国九州に亙って人もゆるす達人、その道の覇者。

武蔵を迎えて、雌雄を決しようというからには、人のみか、彼自身、必勝の信念ができているに違いはない。

いかに武蔵でも、こんどの九州行は、決して平安な浪路ではないであろう。——お通は自分を怨む前に、そう思う。——そう思っては又、とめどない涙の中に沈むのだった。

「……あの船に、あの船に武蔵様は」

今、松原の洲先から西へゆく帆影を見まもりながら、滂沱と流るる涙に顔をまかせ、彼女は小舟の縁に身も世もなかった。

——ふと。

彼女は涙の底から、彼女自身も気づかない烈しい力を呼び起していた。

それは、病をも、あらゆる困難をも、亦、長い年月をも、衝き貫いて来た強い一筋の意志だった。

弱い——肉体も、情にも、姿も見るからに弱々しい、彼女のどこに、そんな強固なものが潜んでいるのかと怪しまれる程、それは今、屹と胸を衝いて彼女の頬にほの紅く血を上せて来たのだった。

「ばば様。——城太さん」

ふいに、彼女は舟から呼んだ。

二人は、岸のすぐ上へ、近づいて来て、

「お通どの」

何と話そう。思い惑って、くもり声で城太郎が答えた。

「聞きました。船のご都合で、武蔵様がお見えにならない事は、今、お二人のおはなしで……」

「聞かれたか」

「はい。嘆いても及びませぬ。又、徒らに悲しんでいる時でもございません。この上は、いっその事、小倉表まで参りとう存じます。そして、試合のご様子を見届けたいと思います。——もしもの事が全くないとは、どうしていい切れましょう。その時にはお骨を拾うて戻る覚悟でございまする」

「——でも、その病体では」

「病……」

お通はその時まったく、自分が病人である事は忘れていた。しかし城太郎にそう注意されても彼女の意志は肉体を超えて、はるかに高い健康な信念の中に呼吸していた。

「お案じくださいますな。……もう何ともございません。いいえ、少しぐらいな事はあっても、試合の御先途を、見届けるまでは……」

死にはしません！

いいかけた終りの一言は、胸に抑えて、すぐ懸命に身づくろいを直し、舟の小縁に縋りながら、這うように岸へ自分で上がって来た。

「…………」

城太郎は、両手で顔を抑えたまま、後ろを向いてしまい、ばばは、声をもらして、泣いていた。

鷹と女と

一

以前、慶長五年の乱までは、勝野城といい、毛利壱岐守勝信の居城だった小倉には、その後、新城の白壁や櫓が増築されて、城の威容は、ずっと整って来た。

細川忠興、忠利と、もう小倉城も二代にわたる国主の府となっていた。
巌流佐々木小次郎は、ほとんど隔日に登城して、忠利公をはじめ、一藩の者に指南していた。
——富田勢源の富田流から出て、鐘巻自斎を経、彼に至って、自己の創意と、二祖の工夫とを合一して成った——巌流とよぶ一派の剣法は、彼が豊前へ来てから、幾年ともたたぬまに、藩の上下に行われ、九州一円を風靡し、遠くは四国中国からも、風を慕って、城下に来て一年も二年も遊学し、彼の門に師礼を執って印可を得て帰国しようとする者がずいぶんと多かった。
彼の肩に、衆望があつまると共に、主君の忠利も、
「よい者を召抱えた」
と、よろこんでいる。
又、家中の上下が、挙って、
「人物だ」
といった。
定評となってきた。
氏家孫四郎は、新陰流をつかい彼が赴任して来るまでの、師範役であったが、巨星巌流のひかりに孫四郎の存在は、いつか有るか無きかになってしまった。
小次郎は、忠利公に願って、
「孫四郎殿をも、何とぞ、お見捨てなきように。地味な剣法にはございますが、それがしなど若年の剣よりも、どこかに一日の長もあるように存じますれば」
と、称揚して、指南の勤務も、氏家孫四郎と、隔日という事に、彼の口から提議した。

又。ある時、

「小次郎は、孫四郎の剣を、地味なれど一日の長があるという。孫四郎は、小次郎の刀法を、所詮自分などの及ばぬ天稟の名手という。いずれが然るか、いちど手合せしてみい」

と、忠利のことばに、

「かしこまってござりまする」

いなやなく、双方、木剣を把って、君前でたたかった折に——小次郎は機を見て、

「恐れ入りました」

と、先に木剣を措いて、孫四郎の足下に坐し、孫四郎も亦あわてて、

「いや、御謙遜。所詮、てまえなどの敵たる其許ではござらぬ」

と、互いに、勝ちをゆずり合った事などもあった。

こうした事々が、いよいよ、

「さすがは、巌流先生」

「おえらいもの」

「奥ゆかしい」

「底の知れぬお方じゃ」

と、衆の信望をあつめて、今では彼が、隔日に、馬上七名の供に槍を立たせて登城の途中でも、その姿を仰ぐ者は、わざわざでも馬前へ寄って来て、礼を施してゆくくらい、尊敬の的になっていた。

——だが。

それほどな、寛度を、落ち目の氏家孫四郎に示す彼も、ひとたび、
（——武蔵も近頃は）
と、不用意にかたわらの者が、宮本とか武蔵とかを口にして、その近畿や東国に於ける世評のよい事を伝えると、
（ああ、武蔵か）
と、巌流の語気はたちまち冷やかなる狭小人の陰口に似たものとなり、
（あれも、近頃は、小賢しく世にも知られ、二刀流とか自称しておるそうな。元来、器用な力のある男で、京大坂あたりでは、ちょっと立ち対える者もあるまいからな）
などと、誹謗するともつかず、賞めるともつかず、その顔色にも何か出すまいとするものを抑えていうのが常であった。

二

時には又、巌流の萩之小路の屋敷をたずねる遍歴の武芸者が、
（まだ一度も、会ってみた事はないが、武蔵どのの名は、名ばかりでなく、上泉塚原以後、柳生家の中興石舟斎をのぞいては、まず当今の名人——名人といっては過賞なら、達人といってもさしつかえあるまいと、もっぱら称揚する仁が多いようでござるが）
と、彼と武蔵との、宿年の感情をわきまえずに、図に乗っていいでもすると、
（そうかな。ははは）
小次郎の巌流は、その面の色をかくすによしなく、苦々しく冷笑して、

「世間は盲千人と申すからなあ。彼を、名人という者もあろう。達人と称す人もなくはあるまい。……だが、それほどに、実は世上の兵法というものが、質において低下し、風においては廃れ、ただ売名に長けた、小賢しき者のみが、横行する時代である事を、証拠だてておるのではなかろうかな。——人は知らず、この巌流の眼から見れば、彼がかつて、京都で虚名を売った——吉岡一門との試合、わけて、十二、三歳の一子までを、一乗寺村で斬り捨てたごときは、その残忍、その卑劣——卑劣といったのみでは分るまいが、あの時、彼は一人、吉岡方は大勢だったに違いないが、何ぞ知らん、彼は逸早く逃げていたのだ。——その他、彼の生立ちを見、彼の野望する所を見ても、唾棄すべき人物と、それがしは見ておるが。……ははは、兵法世渡りが達人というなら賛同できるが、剣そのものの達人とは、それがしには思えぬ事だ。世間は甘いものでなあ」

　なお。

　議論する者が、それ以上にも、突っ込んで、武蔵を称めれば、巌流は、それ自体が、自身を嘲蔑する言葉かの如く、面を朱にしてまでも、

（武蔵は、残忍にして、しかもたたかうに卑屈。兵法者の風上にもおけぬ人物）

と、相手の者をして、是認させてしまわないうちは、歇まないほどな、反感を示した。

　これには、彼を、

（一箇の人格者）

　とまで、尊敬を払っている家中の人々も、ひそかに、意外としていたが、やがて、

（武蔵と、佐々木殿とは、何か積年の怨みのある間だそうだ）

と、伝える者のはなしや、又ほどなく、
（近く、君命で、二人の間に、試合が決行される）
とかいわれ出してから、さては、と従来の不審もうなずかれて、一藩の耳目は、ここ数ヵ月、その試合の期日と成行きとに、そそがれていたのであった。同時に。
かくと城内城下に噂がひろまってから、萩之小路の巌流のやしきへ何かにつけ、朝夕、足しげく通って見える人は、藩老のひとり岩間角兵衛であった。
江戸表詰の頃、彼を、君公に推挙した関係から、今では殆ど、一族の交わりをしているその角兵衛。
きょうも。
四月のはじめ。
もう、桜は八重も、散りしいて平庭の泉石の陰を綴って、つつじが真っ紅に咲いていた。
「在宅か――」
と、おとずれ、案内の小侍について奥へ通って来ると、
「おう。岩間どのか」
居間は、陽影のみで、主の佐々木巌流は、庭に立っていた。
鷹を拳に据えて。
そして、よく馴れている鷹は、彼が嘴の先に出している掌の上の餌を、おとなしく喰べていた。

三

主君忠利の命で、武蔵との試合が決定してからほどなく、君公の思いやりもあり、岩間角兵衛のとりなしもあって、――当分の間、隔日の御指南の儀、登城に及ばず。

と、それまでの、心静かな休養をゆるされて、毎日、屋敷に閑を楽しんでいる彼であった。

「巌流どの。きょうな、いよいよ御前で、試合の場所の評議がきまった。――で、さっそく、お耳に入れに来たが」

角兵衛は、立ったままいう。

小侍が、書院の方から、

「どうぞ」

席を設けて、すすめている。角兵衛はそれへ、ウムと頷いたきりで、

「初めは、聞長浜にしようか、紫川の河原にしようか、などと所々、御評議にのぼったが、とても左様な手狭な場所では、たとい矢来を結い繞らそうとも、おびただしい見物の混雑はふせぎきれまいとの事でな……」

「なるほど」

巌流は、拳の鷹に、餌を喰ませながら、その眼や嘴の様に見入っていた。

世間のさわぎや、そんな評議などには、超然として、関心もないように。

――折角、わが事のように、耳に入れに来たものをと、角兵衛は、やや張合いぬけしながら、

「立話もなるまいて。ま、あがらぬか……」

と客である彼の方からうながした。
「しばらく、お待ちを……」
と、巌流は、なお他念なく、
「掌の上の餌だけ、喰べさせてしまいますから」
「御拝領の鷹じゃの」
「されば、去年の秋、御鷹野のみぎりに、お手ずから戴きました天弓と名づくる鷹で、馴れるにつれ、可愛いものでなあ」
掌に残された餌を捨て、朱房の紐を手繰りかえして、
「辰之助、鷹小屋へ入れておけ」
と、うしろにいる年少の門人を顧みて、拳から拳へ、鷹を渡した。
「はい」
辰之助は、鷹を持って、鷹小屋のほうへ退がって行く。邸内はかなり広く、築山の彼方は松に囲まれていた。塀の外はすぐ到津の川岸で、附近には藩士の屋敷も多かった。書院に坐して、
「失礼を」
巌流がいうと、
「いやいや、内輪じゃ、ここへ来れば、わしも、身内か息子の家のように思うておるのだ」
角兵衛は、かえって、打ちくつろぐ。
そこへ、妙齢の小間使いが、楚々たる風情で、茶を汲んで来た。
ちらと、客を見あげ、

「粗葉でござりますが」
角兵衛は、首を振って、
「やあ、お光か。いつもあでやかな」
茶碗を取ると、お光は、襟あしまで紅くして、
「――おたわむれを」
逃ぐるように、客の眼から退がって、襖の陰にかくれた。
「馴れれば鷹も愛らしいものだが、性は猛鳥だ。……天弓よりはお光のほうが傍に置くにはよかろう。彼女の身についても、いちど其許の胸を篤と聞いておきたい事もあるが」
「岩間どののお屋敷へ、いつかそっと、お光めがうかがった事がありはしませぬか」
「内密に――というていたが何も隠しておる要もあるまい。実はわしへ相談に見えた事があるが」
「女め。――それがしに口を拭いて今日まで何も申しおりません」
巌流は、白い襖を、ちらと睨めつけていった。

四

「怒るな。むりもない」
岩間角兵衛は、そう宥めて、巌流の眼が柔らぐのを見てから、
「――女の身としては、むしろ案じるのが当然じゃろ。其許の心を疑うのではないが、このままで、どうなるのかと、行末の身を、考えるのは、誰でもの事」

「ではお光から、すべての事、お聞き取りでござろうが……。いや、面目もない事情で」
「なんの――」
巌流が、やや恥じるのを、角兵衛は打ち消して、
「男女の間、ありがちな事じゃ。いずれ其許も、然るべく妻帯もし、家庭らしゅう、一戸の体も立てねばならぬ。大きな屋敷に住み、多くの門人召使も持ったからには」
「しかし、いちど小間使いとして、屋敷においただけに、世間のてまえも」
「というて、今更、お光を捨去るわけにもなるまい。それも妻として不足な女なら又、考えようじゃが、血すじも正しい。しかも聞けば江戸表の小野治郎右衛門忠明の姪じゃという事ではないか」
「そうです」
「お身が、その治郎右衛門忠明の道場へ、単身、試合に出向いて、忠明をして、小野派一刀流の衰退を、覚醒せしめたとかいう事件のあった折――ふと、親しくなったとの事だが」
「相違ございませぬ。お恥かしい儀でござるが、恩人たる貴方へ、隠しだてしては心苦しい。いつかは自分からお打明けしようと思っていました事。……仰っしゃる通り、小野忠明殿と試合して、その帰るさ、もう宵となりましたので、あの小娘が――その頃はまだ叔父の治郎右衛門忠明の傍に仕えておりました今のお光が――小提燈をもって、皀莢坂の暗い道を、町まで送ってくれました」
「ウム。……そんな話だな」
「何げなく、まったく、何のふかい量見もなく、その途中、戯れに申した言葉を真実に取って、

その後、治郎右衛門忠明が、出奔の後、自分を訪ねて参りましたので」
「いや、もうよい。……事情はそのくらいでな。ははは」
角兵衛は、あてられたという顔して、手を振った。
しかしそれから間もなく、江戸表の芝の伊皿子を引き払って、この小倉へ移って来るまでも、そういう女性が彼の陰にいた事などは、角兵衛はつい先頃まで知らずにいたので、自分の迂闊に呆れると共に、巌流小次郎のその方の才気や腕や周到なる要意のほどにも、実は舌を巻いたのであった。
「まあ。その事は、わしにまかせておくとせい。いずれにしても、ここの所では、遽かに妻帯の披露もおかしい。——首尾よく、大事の試合を仕果した上のはなしに」
角兵衛はいって、ふと、その方の要談を思い出した。
角兵衛に取っては、相手の武蔵の如きは、巌流に比して、何者でもない気がした。むしろ巌流の地位、名声をして、いよいよ、大ならしめるための試錬——とすら自負しきっていた。
「先ほどいった、御評議の上で決した試合の場所じゃが、それは、前にもいった通り、御城下の地では、所詮、混雑はまぬかれまいとの見越から、いっそ海上がよかろう、島がよいとなって、赤間ヶ関と門司ヶ関との間の小島——穴門ヶ島とも、又の名を船島ともいう所でする事と決定いたした」
「ははあ、船島で」
「そうじゃ。——で、武蔵が着かぬうちに一度、よくそこの地の利を踏んでおく方が、何分でも、勝目を取るというものではあるまいか」

試合の前に、試合場所の地の利を知っておくことは、有利にちがいなかった。
当日の進退に、足拵えに、又、附近の木立の有無とか、太陽の方向によって、どっちへ敵を立たせて迎えるかなど、尠くもいきなり行って勝負にかかるよりは、作戦上にも心の余裕にも差があろう。

五

岩間角兵衛は、明日にでも、ひとつ釣舟でも雇って、船島へ下見に行ってみてはと、巌流にすすめたが、巌流がいうには、
「兵法ではすべて、早速の機というものを尊ぶ。こちらに備えあるも、敵が備えを破るに備えの裏を掻いて来る場合は、かえって、こちらが出鼻の誤算を取ってしまうような例が往々ある。臨機に自由にありのままな心をもって臨むに如かずです」
角兵衛は（尤もな意見）と、うなずいて、船島の下見は、もうすすめなかった。
巌流はお光をよんで酒の支度を吩咐けた。それから宵にかけて打解けて二人は杯に親しんだ。
岩間角兵衛にしてみれば、自分の世話した巌流が、今日かくの如く名声を得、君寵も厚く、大きな邸の主ともなってくれて、その邸でこうして一杯の酒の馳走にでもなるという事は、世話がいがあったという気持から、人生の欣しい事の一つを杯の一口一口に舐めているような顔つきだった。
「もう、お光を置いて、いうてもよかろう。ともかく、試合が済んだら、国元から年寄身寄りの近親も呼び、婚儀も披露し、剣道への執心は、勿論よいが、ひとまず家名の土台を固める事だ

な。そこまでの事がすめば、角兵衛の世話も、まず……というものじゃが」
親代りになっている気の彼は、ひとりで上機嫌だったが、巌流はしまいまで酔わなかった。
一日ごとに、彼は無口だった。試合の日が近づくにつれ、急に、人出入りが多くなった。隔日の登城がない代りに、接客にわずらわされて、静養の意味はなくなった。
そうかといって、彼は、門を閉じて客を謝絶する気にもなれなかった。巌流殿は門を閉めて人にも会わぬ――といわれるのは、何か卑怯めいて聞えやすい。そういう所に彼は割合に気を遣った。
「辰之助。鷹を出せ」
野支度して、天弓を拳に据え、朝早くから彼は屋敷を出ることに極めた。これはいい思案であったと自分も思った。
気候のよい四月の上旬を、拳に鷹をすえて野山を歩くことは、歩くだけでも大いに気を養った。
琥珀色の眸を、油断なく研ぎすまして、獲物を空に追う鷹の姿を、巌流の眼が又、追っていた。
獲物を、鷹が爪にかけると、チラチラと、鳥の毛が空から降って来た。――巌流は息もしなかった。自分が鷹になりきって見ていた。
「……よし。あれだ」
彼は、鷹を師として、悟るところがあった。一日ごとに、彼の面上に、自信の色がついて来た。

が、夕方屋敷に帰ってみると、いつもお光の眼は、泣き腫れていた。それを粧い隠しているだけ巌流の胸が傷んだ。だんじて、武蔵に敗れは取らぬと、かたい自信がありながら、お光のそんな姿を見ると、

（……おれに別れたら）

などと、ふと死後の事が考えられたりした。それからまた妙に、常には考えもしない亡き母の事なども思い出された。

（もう、あと幾日もない）

と思って眠る夜ごとに、彼の瞼には、琥珀色の鷹の眼と、憂いに腫れているお光の眼とが、交〻に見えて、その間に、母の姿が明滅していた。

十三日前

一

赤間ケ関もそうである。門司ケ関、小倉城下はもちろんの事だった。この数日のあいだに、旅客の去る者はすくなく、留る者は多く、どこの旅舎もいっぱいで、旅籠の前には必ずある駒繋ぎの棒杭さえ、馬と馬で混み合っていた。

布令申す事

ひとつ。
来る十三日辰之上刻、豊前長門之海門、船島に於て、
当藩士巌流佐々木小次郎儀、試合仰せ被付。
相手方、作州牢人宮本武蔵政名也。
又、ひとつ。
当日、府中火気厳禁の事。
双方のひいき、助太刀の輩共一切、渡海の事かたく禁制。
遊観の舟、便船、漁舟等も同様、海門往来止たるべし。
　ただし辰下刻までの事。以上。

慶長十七年四月

各所に、高札が建った。
船着に。辻に。高札場に。
そこにも旅人がたかっていた。
「十三日といえば、もう明後日じゃな」
「遠国から、わざわざ来る衆も多いそうな。逗留してみやげばなしに、見て行こうか」
「ばかな、一里も沖の船島の試合、見ゆるわけはない」
「いや、風師山へ登れば船島の磯の松すら見える。確とは分らいでも、その日の御船手の固めや、豊前、長門の両岸の、物々しい有様を見るだけでも」
「晴ならよいが」

「いや、このあんばいでは、雨にはなるまいて」

巷の声はもう、十三日の噂ばかりだった。

見物舟や、その他も、海上の往来は、辰の下刻まで停止と布令が出たので、船宿は失望したが、それでも旅客は、当日の景観だけでもと、見晴しの地を心あてに、待ちぬいていた。

十一日の午頃である。

門司ケ関から小倉へはいる城下口の一膳飯屋の前を、乳呑み児をあやしながら、行きつ戻りつしている女がある。

つい先頃、大坂の河端で、ふと見かけた又八が、後を追って行き会った。朱実であった。

旅の空が、嬰児も淋しくてか、泣きやまないので——

「ねむたいか。ねんねしや。ねんねしや。オオ、よち、よち、よち……」

乳ぶさを啣ませ、足拍子を取って、見得もない、粧いもない、子があるばかり。

変れば変るもの——と、以前の彼女を知る者は思うであろう。だが彼女自身には、この変化も、今の生態も、何の不自然もない姿だった。

「おお、坊や、寝たか、まだ泣いているのか。——おい朱実」

飯屋の中から出て来て、こう呼んだのは又八だった。

法衣を返して、俗になったのもついこの間の事。やがて髪を蓄えるつもりの道心頭を、頭巾で巻いて、渋染の袖無。あれからすぐ夫婦して大坂を立ち、道中の路銀とてないので飴売りの胴乱をかけて、子の乳となる妻の糧を、一銭二銭と働きながら、きょうやっと、小倉まで辿り着いた所だった。

「さ。おれがかわって、抱いてやる。はやく御飯をたべて来い。乳が出ないというじゃないか。たくさん喰べて来いよ。たくさん」
抱き取って、又八は、飯屋の外をうろうろと、子守歌をうたっていた。
すると、通りすがりの旅の田舎武士が、
「おや？」
と、又八を見まもって、後へ戻って来た。

二

子を抱いた、又八も、
「お、お……？」
立ち止った旅の武士へ、眼を返して見守ったが、誰だか、何処で会った顔か思い出せなかった。
「数年前、京の九条の松原で会った一ノ宮源八でござるよ。その折は、六部の姿でござったから、お見忘れもむりはない」
田舎武士は、そういった。
それでもまだ又八には、明確な記憶をよび起せなかったが、一ノ宮源八が、ことばを重ねて、
「その時、貴公は、小次郎殿の名を騙り、偽小次郎となって、所々、徘徊しておられたのを、拙者は真の佐々木小次郎殿と信じ……」
「ああ、あの時の！」

思い出して、大きくいうと、
「そうじゃ。その時の六部でござる」
「それは、どうも」
お辞儀をしたので、せっかく、眠りかけていた嬰児が泣きだした。
「オオ、ヨシヨシヨシ。泣くな、泣くな。ばア——」
話は、それで飛んでしまい、一ノ宮源八は先を急ぐふうで、
「時に、当御城下にお住居の、佐々木殿のおやしきは、どの辺か、ご存じないか」
「さあ、分りませんね。てまえも実は、今ここへ着いたばかりで」
「ではやはり、武蔵との試合を見届けに？」
「いえ。……べつにその」
一膳飯屋を出て来た仲間二人が、通りすがりに、源八へ、
「巌流様のおやしきなら、紫川のすぐ側で、わしらの御主人のお屋敷と同じ小路でさ。そこへ行くなら、案内してあげましょうぜ」
「やあ、かたじけない。……では又八氏、おさらば」
源八は、あたふた、仲間たちに尾いて行ってしまう。
その旅装いの、垢や埃のひどさを見送って、
「はるばる、上州から、やって来たのかしら？」
と、何とはなく明後日に迫る今度の試合が、いかに隈なく諸国に聞えているかが思いやられた。

それと、数年前――

あの源八がさがし歩いていた中条流の印可目録を手に入れて、偽小次郎となってうろついていた頃の自分の姿が――今になると、浅ましくもあり、何たる懶惰な、破廉恥など、身ぶるいが出るほど苦く思い出された。

その頃の自分と。そして、今の自分と。

考えてみれば、そう気づくだけの進歩はあった。

（おれでも……こんな凡くらでも、眼がさめてやり直せば、少しずつでも、変るんだなあ）

御飯をたべるまも、子の泣き声が耳にあって、いそがしげに、飯屋のめしを喰べて来た朱実は、そこの軒から駈けて来て、

「すみません。――負ぶいますから、背にのせて下さいませ」

「もう、乳はいいのか」

「眠たいのでしょう。背なかにのせれば、寝そうですから」

「そうか。……よいしょ」

又八は、子を、彼女の背なかへ渡した。そして、彼は、飴売りの胴乱を肩にかけた。

仲のよい夫婦飴屋。往来の眼が皆ふり向いて行く。自分たちのそれが皆、満足にゆかないのが多いので、たまたま、路傍でこういうけしきを見ると、羨望にたえないらしい。

「よいお子じゃのう。お幾歳じゃ。……ほう、笑っておるがの」

歩み歩み、後から尾いて来た品のよい切下髪の老婆が、朱実の背をのぞいてあやした。よほど子好きな刀自とみえ、供の下男にまで、この愛らしい笑い顔を見よ、というのだった。

三

どこか安い木賃へでもと、子づれの又八と朱実が、裏町へ曲りかけると、
「そちらへか」
と、うしろについて来た上品な旅の老婆は、にこやかに別れの会釈を送り、事のついでと思い出したように、
「あなた方も、旅の衆らしいが、佐々木小次郎の住居は、どこの辺りか、ご存じはないかの」
と、たずねた。
それならたった今、先に尋ねて行ったお侍がある。紫川の側とかいう事——と又八が教えると、老婆は軽く、
「かたじけない」
と、供の下男をうながして、まっすぐに立ち去った。
又八は見送って、
「……ああ。おれのおふくろ様も、どうして御座るやら？」
しみじみ、つぶやいた。
子を持って、彼も初めて、この頃わかりかけて来たここちがする。
「——あなた、行きましょう」
背の子を揺りあやしながら、朱実はうしろで待っていた。だがなお、又八は茫然と、彼方へ行く同じ年頃の老婆を見送っていた。

きょうは鷹も小次郎も、屋敷の内にいた。夜来からの来客は、庭内を埋めている。まさか主人が鷹野にも出られなかった。

「何しろ、欣ぶべき事だ」

「巌流先生の名声も、これで否やなく、一決する」

「めでたいといってもよかろう」

「そうだとも。曠世の御名誉にもなることだ」

「しかし、敵も武蔵。そこは十分、御自重していただかぬと」

大玄関にも、脇玄関にも、遠来の客のわらじで満ちていた。

はるばる、京大坂から来たというもの。又、中国筋の者、遠いのでは、越前の浄教寺村からという客もある。

家人では手が足りないので、岩間角兵衛の家族が来てもてなしている。又、家中の侍で、平常、巌流に師事している人々も、入り代り立ち代り、ここに詰めて、明後日の十三日を待っているのだった。

「明後日というても、もう明日一日だからのう」

およそここにいる縁故や門流の顔ぶれを見ると、武蔵の人物を、知ると知らないに関らず、何かの気持から、武蔵を敵視していない者はない。

わけて、吉岡の門流を汲む者は、諸国へ亙って、非常な数であるから、今もって、一乗寺下り松の怨みは、その人々の胸にある。

その他、武蔵が十年の纏らな生活の間に武蔵自身も知らぬ敵が、ずいぶん出来ていた。その全部でなくても、一部の人間は、何かの機縁から、武蔵の反対側にある小次郎の門をぐっていく。

「上州から、お客でござる」

若侍が、又一名の客を玄関から大勢のいる広間へ連れて来た。

「自分は、一ノ宮源八と申す者で――」

と、質朴な客は、大勢へ向って、挨拶し、知らぬ顔の中に交じって、慎んでいた。

「ほ。上州から」

と、人々は、その遠路をねぎらうように、源八を見まもった。

源八は上州白雲山のお神札をうけて来たから、これを神棚へ上げておいて下さいと門人へ渡した。

「御祈願までして――」

と、並居る者は、その奇特なこころざしに、いよいよ意を強うして、

「十三日は、晴天じゃろう」

と、廂ごしに、空を見た。その十一日もはや暮れかけて、夕焼が真っ赤だった。

四

広間に詰めている大勢の客のうちの一人がいう。

「あいや、上州からお越しの、一ノ宮源八どのとやら。巌流先生のため、勝祈までなされて、遙

遙とお出でとは、御奇特な事。――して先生とは、どういう御縁故でござるのか」

問われて、源八は、

「てまえは、上州下仁田の、草薙家の家来でござる。草薙家の亡主天鬼様は、鐘巻自斎先生の甥御でござった。――で、小次郎どのとは、御幼少から存じておるので」

「あ。巌流先生には、少年の頃、中条流の鐘巻自斎の許におられたそうだが」

「伊藤弥五郎一刀斎。あのお方とは、同門でございました。その弥五郎どのより、小次郎どのの太刀のほうが、烈しい烈しいと、手前などもよく聞いていたもので」

源八は又それから、小次郎が師の自斎の印可目録も辞して、独自独創の流儀を立てる大志を早くから抱いていた事だの、少年時代の負けぬ気だった逸話だのを、問わるるまま物語していると、

「先生は？　……。先生はここにはお見えなさいませぬか」

取次の若侍が、そこへ来ていった。若侍は、大勢のなかを物色したが、見当らないので、他の座敷へ探しに行きかけると、客たちが、

「何じゃ、何か用か」

と、訊ねた。

「はい。岩国から来たが、小次郎に会わせてくだされと――お身寄りの方らしい御老婆が、ただ今、玄関に見えられましたので」

取次役は、いそがしげに、いう事だけをいうと、足を移して、次の間をのぞき、又、次の間をさがし、小次郎の姿を求めて行った。

「はて、お居間にも見えぬが」
つぶやいていると、そこを片づけていた小間使のお光が、
「鷹小屋にいらっしゃいます」
と、教えた。

五

やしきに満ちている客をよそに、巌流はひとり鷹小屋にはいって、止り木の鷹と、もくねん、むかい合っていた。
餌をやったり、抜け毛を取ってやったり、拳に乗せて、撫でたりなどして。
「先生」
「——誰だ」
「玄関の者でございます。ただいまお表へ、岩国から御老母様が、はるばる、訪ねておいでなされました。小次郎に会えばわかる者——とおっしゃるのみで」
「老母が。……はてのう？　わしの母はもうこの世にいない人だ。母の妹にあたる叔母御であろう」
「どこへお通しいたしましょうか」
「会いたくないなあ。……かような時には、人には誰とも会いとうない。……だがまあ、叔母御とあれば、ぜひもなかろう。わしの居間へご案内いたしておけ」
取次が立ち去ると、

「辰之助」
と、外へ呼んだ。
彼の小姓同様に、常に側にいる内弟子の辰之助は、
「はい。御用ですか」
小屋の内へはいって、彼のうしろに片膝を折り敷いた。
「きょうは十一日。いよいよ、明後日の事になったな」
「近づきましてございます」
「明日は、久しぶりに登城、殿様に御あいさつ申しあげ、心静かに、一夜を待ちたいものだ」
「それにしては、あまりにご来客が混みあいまする。明日は、一切、お客とお会いを避けて、静かに、時刻も早目に、お寝みなされますように」
「そうしたいものだ」
「広間のお客衆は、ひいきの引倒しというものでございます」
「そういうな、かの衆も、巌流の肩持する気で、近郷や遠国から来ておる人々だ。……がしかし、勝敗は時の運。――運ばかりではないが、兵家の興亡も同じこと。もし巌流亡き後は、わしが手文庫のうちの遺書二通。一通は岩間殿へ、一通はお光へ、そちの手から渡してくれ」
「御遺書などとは……」
「武士のたしなみ。あたりまえな事だ。又、当日の朝は、介添一名の同行はゆるされておるから、船島まで、供をして、そちも行け。――よいか」
「冥加なお供、ありがとう存じまする」

「天弓も」

と、止り木の鷹を見て、

「そちの拳にすえて、島まで、連れて参ろうな。――海の上一里もある船の中、慰みにもなるで」

「心得ました」

「では、岩国の叔母御に、あいさつして来ようか」

巌流は出て行った。しかし、そうした人と会うことは、今の心境は、いかにも億劫らしく見えた。

岩国の叔母は、もうきちんと坐っていた。夕焼雲は、焼刃金の冷めたように黒くなって、室内には、白い灯しが燈っていた。

「やあ、これは」

末座にさがって、巌流は頭を低く下げた。母の亡い後は、ほとんど、この叔母の手で育てられたのだった。

母には、子にあまい所もあったが、この叔母には、みじんもそういう所はなく、ただひたすら、姉の子であり又、佐々木家の家名を担う小次郎巌流に対して、よそながらでも、絶えずその将来を見まもっていたただ一人の身寄りであった。

六

「小次郎どの。聞けばこの度は、いよいよ、生涯の大事にのぞむそうな。岩国の故郷元でも、えらい噂。じっとして居るにも居られず、お許の顔見に出て来ました。――ようまあ、ここまで立

派に出世して御座ったの」
　伝家の一刀を負って故郷を出た少年の頃の彼のすがたと、今の堂々たる一家の風貌を備えた彼とを思い比べて、今昔の感にたえないように岩国の叔母はそういった。
　巌流は、低頭して、
「十年の久しいあいだ、お便りもせず無音の罪、おゆるし下さい。人目には、出世と見ゆるか存ぜぬが、まだまだ、小次郎の志望は、これしきの事に、満足するものではございませぬ。——それゆえに、つい故郷へも」
「いや何。お許の消息は、風の便りにもよう聞えて来るほどに、便りはのうても、息災は知れてある」
「それほど、岩国でも、何かと風評にのぼっておりますか」
「おるどころではない。この度の試合も夙く知れ渡り、武蔵に敗れては、岩国の恥辱ぞ、佐々木を名乗る一族の名折れぞと、たいそうな肩持じゃ。わけて、吉川藩お客分片山伯耆守久安様など、御門下衆を大勢連れ、小倉表まで立たれるそうな」
「ほ。試合を見に」
「したが、高札に依れば、明後日は一切、船出しはならぬ、というお布令。さだめし落胆している衆も多かろうの。……おお余事ばかりいうて忘れていたが、小次郎どの、お許に上げたい土産ひとつ、貰うてくだされ」
　旅包を解いて叔母は折畳んだ一枚の肌着を出した。それは白晒布の地に、八幡大菩薩、摩利支天の名号を書き、又、両の袖に、必勝の禁厭という梵字を、百人の針で細かに縫った襦袢であっ

た。
「ありがとう存じます」おしいただいて、
「おつかれでしょう。取り混んでおりますゆえ、このままこの部屋で、ご自由におやすみ下さい」
巌流は、それを機に、叔母をのこして、他の間へ立った。すると、そこにも客はいて、
「これは、男山八幡のお神札でござる。当日、懐中にお持ちあって」
と、贈ってくれる者もあるし、わざわざ鎖帷子を届けてくれる者だの、又、台所へは、大きな鯛や酒菰が何処からか運ばれて来るし、巌流は身の置所もなかった。
そういう声援者は皆、彼に勝たせたいと念じている者には疑いないが、十中の八、九まで、巌流の勝ちを信じ、巌流の立身を見込み、彼との将来の好誼に自分の望みをも幾分か賭けている人人だった。
（もし、おれが牢人だったら）
と、巌流はふとさびしい気もした。しかし、かくまで、自分を信頼させた者は、誰でもない、自分自身だった。
（勝たねばならない）
と彼も思った。そう思う事はすでに、試合にのぞむ心の邪げとは知りつつ、やはりいつのまにか胸の底で、
（勝たねばならん！　勝たねばならん！）
人知れず——いや自己さえ意識なく、風騒ぐ池の面の小波のように絶え間なく胸に繰返してい

た。

宵になった。

誰が探り、誰が報らせて来たか広間に集まって、酒を酌んだり飯を食べたりしている大勢の間に、

「きょう、武蔵が着いたそうだ」

「門司ヶ関で、船より上がり、御城下へ姿を見せたというが」

「では多分、長岡佐渡のやしきへ落ち着いた事だろう。誰か後で、佐渡のやしきの様子を、ちょっと探って来てはどうか」

などという声が、今宵にも大事が到来しているように、物々しく、しかし密々と伝えられていた。

馬の沓

一

――すでに厳流のやしきへは、早耳に伝わっていた通りに、

武蔵の姿は、同日の夕方には、もう同じ土地に見出すことができた。

武蔵は、海路の旅を経て、それより数日前に、赤間ヶ関へ着いていたらしいが、誰あって彼を

彼と知る者はなく、又、彼自身も、何処かへ引籠ったまま、身を休めていたらしい。
その日、十一日には、向う陸の門司ケ関へ渡り、やがて小倉の城下に入り、藩老長岡佐渡のやしきを訪れ、到着の挨拶を述べ、又、当日の場所、時刻、承知の旨を一応答えて、すぐ玄関で帰るつもりであった。
取次に出た、長岡家の家士は、彼のことばを受けながらも、この人がさては武蔵であるのかと、額ごしに、まじまじ見ていたが、
「まことに、行届いた御挨拶。主人はまだお城よりお退りはございませぬが、はや、間もなくと存じます。——どうぞお上がりくだされて、ご休息でも」
「忝うござるが、ただ今のご伝言さえ願えれば、それにて、他にべつだんの用も御座らねば」
「でも、せっかくのお越しを。……後にて主人がいかばかり残り惜しゅう思われるかもしれませぬ」
と、取次の家士は、自分の一存だけでも、帰したくないように引き止めて、
「では、しばらくお待ちください。佐渡様にはご不在ですが、一応奥へ」
と、いい残して、急いで奥へ告げに行った。
すると、廊下を。
ばたばたっと駈けて来る跫音がした。——と思う途端に、
「先生っ」
式台から飛び降りて、武蔵の胸へ抱きついた少年がある。
「オオ、伊織か」

「先生……」
「勉強しているか」
「ええ」
「大きくなったなあ」
「先生」
「なんだ」
「先生は、わたくしが、ここにいることを知っていたのですか」
「長岡様の手紙で知った。そして又、廻船問屋の小林太郎左衛門の宅でも聞いた」
「だから、驚かなかったんですね」
「むむ。……当家のお世話になっておれば、そちのためには、この上もなく安心だからの」
「…………」
「何を悲しむ」
と、頭を撫でて、
「ひとたびお世話になったからには、佐渡様のご恩を忘るるでないぞ」
「はい」
「武道のみでなく、学問もせねばならぬぞ。平常は何事も、朋輩衆よりも控え目に、事ある時は、人の避ける事も進んでするようにな」
「……はい」
「そちにも、母がない、父もない。肉親のない身は世の中をつめたく見、ひがみ易い。……そう

なってはならぬぞ。あたたかい心で人のなかに住め。人のあたたかさは、自分の心があたたかでいなければ分る筈もない」
「……え、え」
「そちは又、利発のくせに、くわっとすると野育ちの荒気が出る。慎まねばならぬ。まだ若木のそちには、長い生涯があるが、それにせよ、生命を惜しめよ。——事ある時、国のため、武士道のため、捨てるために、生命は惜しむのだ。——愛しんで、きれいに持って。いさぎよく——」
彼の顔を抱いて、そういう武蔵の言には、どこか、名残もこれ限りのような、切実なものがあった。鋭敏な少年は、さなきだに、胸がいっぱいだった所へ、生命という言葉が出たので、遽かに、声をしゃくって武蔵の胸で嗚咽し出した。

二

長岡家に養われてからは、なり振りも小綺麗に、前髪もきちんと結って、伊織は、奉公人らしくなく、足袋まで白いのを穿いていた。
武蔵は、それを見ただけで、彼の身については、安心した。そこを見届けた以上、よけいな事はいわねばよかったと、軽く悔いて、
「泣くな」
と、叱ったが、伊織は、泣きやまなかった。武蔵の着物の胸は、彼の涙で濡れるばかりだった。
「先生……」
「人がわらうぞ。何を泣く」

「でも、先生は、明後日になれば、船島へ行くのでしょう」
「参らねばなるまい」
「勝ってください。これっきり会えなくては嫌です」
「はははは。伊織、そちは明後日の事を考えて泣いているのか」
「でも、多くの人が、巌流殿には敵うまい。武蔵も、よしない約束をしたものだと、皆いいます」
「そうであろう」
「きっと、勝てましょうか。先生、勝てるでしょうか」
「案じるな、伊織」
「では。大丈夫ですね」
「敗れても、きれいに敗れたいと念じるのみだ」
「勝てないと思ったら、先生、今のうちなら、遠い国へ行ってしまえば」
「世間の声には、真実がある。まこと、そちのいう通り、よしない約束事ではある。――だが、事ここになってしまうと、逃げては、武士道が廃る。武士道の廃りを示しては、わし独りの恥ではない。世人の心を堕落させる」
「でも先生、生命を愛しめと、わたくしへ教えたでしょう」
「そうだったな。――しかし、そちに武蔵が教えた事は、皆、わしの短所ばかり。自分の悪い所、出来ない所。至らないで悔いている事ばかりを――そちには、そうあって貰いたくないために教えておるのだ。武蔵が船島の土になったら、なおさらわしをよい手本に、よしない事に生命は捨てるなよ」

果てしない心地に、彼自身も囚われそうに覚えたので、伊織の顔を強いて、胸から押しのけ、
「お取次へも頼み上げておいたが、佐渡様がお帰りになったら、くれぐれも、よろしくお伝えを頼むぞ。いずれ、船島で御拝姿申すとな」
門の方へ、辞し去ろうとすると、伊織は師の笠をつかまえて、
「先生っ……。先生」
——何もいえない。
ただ俯向いて、片手に師の笠を離さず、片手を曲げて顔から離さず、じっと、いつまでも、肩をふるわせていた。
すると、横の中門の木戸が、少し開いて、
「宮本先生でござりますか。てまえは、当家の若党、縫殿介と申しまするが、伊織どのが、お別れを惜しむ様子。無理ならぬ気がいたしまする。——他へお急ぎの儀もござりましょうが、せめて一夜お泊り下さいますわけには行きますすまいか」
「これは——」
と会釈を返して、
「ありがたいお言葉ですが、船島の土になるやも知れぬ身に、一夜二夜の宿縁を、ここかしこに残しては、去る身も、後の人々も、かえって煩わしいと思われますれば」
「御斟酌が過ぎまする。お帰し申しては、手前どもが、主人より叱言をうけるやも知れませぬ」
「委細、又、書中にいたして、佐渡様まで改めて、申し上げます。——きょうは到着の御挨拶までにうかがった事。よろしゅうお伝えを」

と、武蔵は門を出た。

三

おういーっ。
と、呼ぶ者がある。
間を措いて又、誰かが。
おおういっ……
今、長岡佐渡の邸へ、挨拶をすまして、侍小路から伝馬河岸へ出、到津の浜の方へ降りて行った武蔵のうしろ姿へ――その声の主は、手を振っていた。
四、五名の武士。
細川家の藩士とすぐ分る。そして皆、よい年配だ。白髪の老武士も中に見える。
武蔵は気づかない。
黙然と、波打際に立っていた。
陽は、うすずきかけて灰色の漁船の帆が、昼がすみの中に、静止していた。この辺から海上約一里という船島は、すぐ側のそれよりは大きい彦島の陰にかすかに見える。
「武蔵どの」
「宮本氏ではないか」
年配な藩士たちは、駈け寄って来て彼のすぐ後ろに立った。
遠くから呼ばれた時、武蔵はいちど振向いて、その人達の来るのは知っていたが、皆見覚えの

ない者ばかりなので、自分とは思わなかったのである。

「……はて？」

小首を傾げると、中でも年長の老武士が、

「もうお忘れじゃろ。われらに、見覚えがないのもむりはない。それがしは内海孫兵衛丞。元、其許の郷里、作州竹山城の新免家で、六人衆といわれた者どもじゃよ」

つづいて、次の者が、

「自分は、香山半太夫」

「わしは井戸亀右衛門丞」

「船曳杢右衛門丞」

「木南加賀四郎」

と、名乗って、

「いずれも、御身とは同郷の者ども、そして又、この中の内海孫兵衛丞と、香山半太夫の二老人は、其許の父上、新免無二斎どのとは、至って親しい友達でもござった」

「……おお、では」

武蔵は、親しみを笑靨に見せて、その人々へ、会釈をし直した。

なるほど、そう聞けば、この人々には、特有な訛りがある。しかもその訛りはすぐ自分の少年時代を思い出させるなつかしい郷里の土の香まで持っている語音だった。

「申しおくれました。おたずねの通り、拙者は宮本村の無二斎の伜、幼名武蔵と申した者にござりますが。……どうして又、郷里の方々が、かくお揃いで此処にはおいでなされましたか」

「関ヶ原の御合戦の後、知っての通り、主家新免家は滅亡。われらも牢人して、九州落ち。……この豊前へ来て、一時は、馬の草鞋など作って、露命をつないでいたものじゃが、その後、倖せあって、当細川家の先殿様、三斎公のお見出しに預り、今では当藩にみな御奉公いたしておる身じゃ」

「さてさて、左様でござりましたか。思わぬ所で、亡父の御友人達にこうしてお目にかかろうとは」

「こちらも意外。お互に懐かしいことよ。……それにつけ、その姿を、一目なと、亡き無二斎どのに見せたかったなあ」

半太夫、亀右衛門丞などの人々は、相顧みて、又しげしげと、武蔵の姿を見直していたが、

「オオ、用談を忘れた。実は今程、御家老のお邸へ立ち寄った所、おぬしが見えて、すぐ帰ったとの事。これはいかんと、慌てて追うて来たのじゃ。――というのは、佐渡様とも申しあわせ、御身が小倉へ到着したら、ぜひ一夜、われら等も交じえて、一夕の宴をと、待ちもうけていたのじゃ」

杢右衛門丞がいうと半太夫も、

「それをばさ。すげのう、お玄関で挨拶だけして立帰るという法があるものでない。さあ御座れ。無二斎の倅どの」

手をひかんばかりだし、父の友人という格から、有無をいわさぬ口吻で、もう先へ歩き出した。

四

拒みかねて、つい武蔵も、ともども歩き出したが、

「いや。やはりお断りいたしましょう。ご好意を無にいたすようでござるが」

立ち淀んで、辞退すると、人々は口を揃えて、

「なぜじゃ。折角、われら同郷の者が、御身を迎えて、大事の門口を、祝おうというのに」

「佐渡様の思し召もそうじゃ。佐渡様にも悪しかろうに」

「それとも、何ぞ御不服か」

すこし感情を害したらしく、わけて無二斎とは生前莫逆の友だったという内海孫兵衛丞などは、

「そんな法やある」

といわんばかりな眼である。

「決して左様な心底ではございませぬが」

慇懃に詫びたが、慇懃だけでは済まさず、理由はと、たたみかけられて、武蔵は是非なく、

「——巷のうわさ、取るに足らぬ事ですが、この度の試合をもって、細川家の二家老、長岡佐渡様と岩間角兵衛様とを対立して見、そうふたつの勢力に拠って、一藩の御家中も対峙しておる。そして一方は巌流を擁して、いよいよ君寵のお覚えを恃み、長岡様にも亦彼を排し、御自身の派閥を重からしめんとしておるなどと、あらぬ事を、道中などにても聞き及びました」

「ほほウ……」

「おそらくは、巷の風説。俗衆の臆測でございましょう。——しかし、衆口は怖ろしい。一介の牢人の身には、障る所もござりませぬが、藩政に御関与なさるる長岡様、岩間様には、寸毫でも、左様な疑いを領民に抱かせてはなりませぬ」

「いやあ、なるほどの！」
老人達は、大きく答えて、
「それで、御身には、御家老のお邸へ、わらじを解くことを、憚って参られたのか」
「いや、それは理窟で」
武蔵は、微笑に打消し、
「実のところは、生来の野人、気ままにおりたいのでござる」
「お心もち、よく相分った。深く思えば、満更、火のない煙ではないかも知れぬ。われらには覚えなくとも」
武蔵の深慮に人々は感じた。しかし、このまま立ち別れるのも残念と、一同は額をよせて何やら話しあっていたが、やがて木南加賀四郎が、一同に代って、次のような希望を述べた。
「――実は毎年、きょうの四月十一日には、吾々どもの寄りあう会合がござって、十年来、欠かした事もないのでござる。それには、同郷六名と、人数も限り、人を招かぬ会でござるが、貴殿なれば、同じ国者、わけてお父上無二斎殿の御親友もここにはおるので、よかろうではないかと、ただ今、評議したのでござるが、御迷惑は察し入るが、その方の席へでも、お越し下さるまいか。――そこなれば、御家老のお邸とは事ちがい、世間の眼もなし、うわさの的になる筈もござらぬが」
なお、つけ加えて。
最前は又、もし貴方が、すでに長岡家へ見えられていたら、自分らのその会合は先へ延ばすつもりで、念のため同家へ寄って訊ねてみたのであるが、いずれにしても長岡家へお泊りを避ける

お心なら、曲げて今夜は、こっちの会合へ臨んでもらいたい――というのであった。

武蔵も、今は断りかねて、

「それほどまでの仰せなら」

と、承諾すると、人々は非常によろこんで、

「では早速にも」

と、即座に何かと打合せ、武蔵のそばには、木南加賀四郎ひとりを残し、後の者は、

「然らば、いずれ又後刻、寄合の席にてお目にかかる」

と、その場から各〻、一度家路へと帰って行った。

五

武蔵と加賀四郎とは、そこらの茶店先で日の暮るるを待合せ、やがて宵の星空の下を、加賀四郎の案内で、町から小半里ほどある到津の橋の袂まで導かれて行った。

ここは城下端れの街道筋で、藩士の邸宅などもなければ、酒亭なども見あたらない。橋袂には、街道の旅人や馬方相手の、見るからにひなびた居酒屋や木賃の灯が、軒端も草に埋もれて見えるだけだった。

不審な所へ？ ――

と、武蔵は疑わざるを得なかった。ともあれ、最前の人々は、香山半太夫、内海孫兵衛丞をはじめ、その年配なり重々しさから見ても、皆、然るべき位置の藩士達であるのに、年に一度の寄合という会場の席を、こんな不便な、田舎びた所まで、わざわざ持って来るとはおかしい。

——ははあ、さてはそういう口実の下に、何ぞ謀んでいるのだろうか。いやいや、それにしては、あの人々に何の邪気も殺気も感じられないが。

「——武蔵どの。もう皆、見えております。どうぞ此方へ」

彼を橋袂へ佇たせておいて、河原を覗いていた加賀四郎は、そういいながら、堤の細道を探して自分が先へ降りて行く。

「あ。席は船の中か」

自分の行き過ぎた疑いに苦笑を覚えながら、彼も後から河原へ降りて行ったが、何の事、船などもそこらには見当らない。

だが、加賀四郎を加えて、六名の藩士たちは、すでに来ていた。

見れば、席というのは、河原へ敷いた二、三枚の莚でしかない。その莚の上に、最前の香山、内海の二老人を頭に、井戸亀右衛門丞、船曳杢右衛門丞、安積八弥太など、膝も崩さず坐っていた。

「かような席へ、失礼じゃが、折もよし、年に一度のわれらの寄合へ、同郷の武蔵どのが来会わされたのも、何かの御縁じゃろう。……まずまず、それへ御休息を」

と、彼へも一枚の莚をすすめ、さっき浜辺では見えなかった安積八弥太を紹介わせ、

「これも、作州牢人のひとり——今では細川家の馬廻役をいたしておるもので」

と、慇懃な事は、床の間や銀襖をひかえた客間の応対と変りもなかった。

武蔵は、いよいよ、不審にたえない。

風流の趣向なのか。何か又、人目を避けてする必要のある会合なのか。——とにかく一枚の莚

に招かれても客は客であるから、武蔵は慎んで坐っていると、やがて年長者の内海孫兵衛丞が、
「あいや客人。お膝をおくずしくだされい。——そして、やがて持参の折や酒などもござるが、それは後で開くといたして、われらの会合の仕来りだけを、先へ致しておく事にいたすゆえ、長うはかからぬが、暫時それにてお待ちねがいたい」
と、いった。
そして一同、袴を割って、一緒に胡坐をくんで坐り直すと、銘々が携えて来たらしい一把の藁束を解ぐして、馬の沓を作り始めたのであった。

六

作っているのは、馬の沓であるが、それを作る藩士たちの様子は口もきかず、わき目もふらず、謹厳であり又、おそろしく敬虔であった。
手に唾し、藁を素ごき、掌と掌を合わせて綯う力にも、何か傍目にも分る熱意がこもっていた。
「……？」
武蔵は、不審に打たれていたが、人々のする事を、おかし気に見たり、疑ってみたりする気には毛頭なれなかった。
だまって、謹んで見ていた。
「作れたかな」
やがて、香山半太夫老人がいって、他の者を見まわした。

老人はもう、一足の沓を作り上げていた。
「出来まして御座りまする」
次に、木南加賀四郎。
「てまえも」
と、安積八弥太も、作り上げた一足を、香山老人の前に、さし出した。
順々に、積んで、六足の沓ができた。
そこで人々は、袴のチリを払い、羽織を着直して、六足の馬の沓を、三方にのせて、六人の中ほどに据えた。
又、べつな三方には、用意して来た杯が乗せられ、側の盆には銚子も供えて、
「さて、御一同」
と、年長の内海孫兵衛丞から、改った挨拶が述べられた。
「——われらにとって忘れ難い慶長五年、その関ケ原の役より、はや十三年になり申す。お互に思わざる生命を長らえ、今日、かくある身は、偏に、藩主細川公御庇護に依るところ。御恩のほど、子孫まで忘れては成り申さぬ」
「はい……」
一同は、やや俯し目に、孫兵衛丞のことばを、襟を正して聞いていた。
「——とはいえ、今は亡びたりといえ、旧主新免家の代々の御恩も、忘却してはならぬ。——なおなお、われらこの地に流浪の日には、落魄れ果てていた事をも、喉元すぎて、忘れては身に済まぬ。……そう三つの事を、忘れぬための、例年の会。まず今年も、息災に打揃うて、お互に祝

着に存ずる」
「されば、孫兵衛丞どの、御挨拶のとおり、藩公の御慈愛、旧主の御恩、零落のむかしに変る今日の天地の恩。——われら日常も忘れは措きませぬ」
一同して、そういった。
司会者格の孫兵衛丞は、
「では、御礼を」
「はっ」
六名は、膝を正し、両手をつかえて、そこから見える——夜空にも白く仰がれる——小倉城へ向って、頭を下げた。
次に、旧主の地。又各〻の祖先の地——作州の方角へ向って、同様に礼をした。
最後に、自分たちで作った馬の沓へ、両手をつかえて、それをも真心こめて伏し拝んだ。
「武蔵どの。一同これより、この河原の上の氏神の社まで、参詣して沓を納めて参る。——それにて式事は済むのでござる。済めば大いに飲みもし話もいたそう程にもう暫時、それにてお待ちを」
一人は、馬沓をのせた三方を捧げて先へ進み、五名は後に従って、氏神の境内へ上って行った。馬沓は、街道に向っている鳥居前の木に括しつけ、拍手を打って、一同はすぐ元の河原の莚へ帰って来た。
そして、酒もりが始まった。
——というても、芋の煮たのや、木の芽味噌の筍や、せいぜいが干魚ぐらいな、この辺の農

家の馳走ぐらいな質素ではあったが。
しかし、豪笑快語、酒と話は、はずんで来た。

七

打ちとけて、酒と話がはずんで来たので、武蔵は初めて、
「お睦じい、そしてふしぎなご会合に、折よく来合せて、拙者も共に興に入り申した。——しか
し最前からの事々、馬沓を作ったり、それを又、三方にのせて伏し拝み、郷土やお城へ向って、
改めて礼をなされたり——これは一体どうした事でござるのか」
訊ねると、
「よう訊いて下された、御不審は御もっともじゃ」
と、内海孫兵衛丞は、待っていたように、こう話した。
慶長五年。関ヶ原の戦に敗れた新免家の侍たちは、あらかた九州へ落ちて来た。
こう六人の者も敗残者の一組だった。
元より衣食の途はつかず、というて、身寄り頼りに縋って、さもしい頭も下げきれず、又、渇
しても盗泉の水はくらわず——と頑固に持して、一同、この街道の橋袂に、貧しい納屋一軒借り
うけ、槍だこに鍛えられている手で、馬の沓を作っていた。
ここ三年が間は、往来の馬子に、自分らで作った馬沓を売り鬻いで、細々ながら喰べていた
が、
(あの衆は皆、どこか変っているぞ。凡者ではなかろう)

と、馬子たちの噂が、やがて藩に聞え、当時の君公、三斎公の耳にはいった。
調べてみると、旧新免伊賀守の臣で、六人衆といわれた士たちと分り、不愍の者、召抱えてつかわせと、沙汰された。
交渉に来た細川藩の臣は、
「思し召をうけて参ってござるが、禄のほどは仰せもなく、われら重臣どもの協議で、六名に対し千石を給したいと存ずるがいかがであろうか」
と、いって帰った。
六名の者は三斎公の仁慈に感泣した。関ヶ原の敗亡者とあれば、当然、追い立てられても、まだ寛大としなければならない所である。それを、六人に千石も給されるというので否やもなかった。
ところが、井戸亀右衛門丞の母が、
(お断りせい)
という意見をいいだした。
亀右衛門丞の母がいうには、
(三斎公様のお仁慈は、涙のこぼれるほど欣しい。一合のお扶持といえ、馬の沓を作る身には、勿体のうて、否応いえたことではない。——したがおん身達は、落魄れてこそおれ、新免伊賀守様の旧臣、藩士の上に坐りなされたお人達じゃ。それが一纏め千石で、欣んでお召抱えに応じたと聞えては、馬の沓を作っていた事が、真からさもしい事になろう。又、三斎公様の御恩にこたえて、不惜身命の御奉公をなさる覚悟でもなければならぬ事。お救い米のような、六人一括げの

扶持はそれゆえおうけいたされぬ。お身たちは出仕しなさろうとも、倅は出されませぬ)

で、一致して、断ると、藩の者はありのまま、君公へ伝えた。

三斎公は、聞いて、

(長老の内海孫兵衛丞に千石。余の者には一名二百石ずつと、改めて申しやるがよい)

と、命じた。

六名出仕と極って、いよいよ、お目見得の登城となったが、その折、六名の貧乏ぶりを目撃して来た使者の者が、

(少々はお手当を先に遣さぬと、登城の服装なども、おそらく持ち合すまいと察しられますが)

気を配ったつもりでいうと、三斎公はわらって、

(だまって見ておれ。折角の士どもを迎えながら、こちらが、求めて恥を掻くにもあたるまい)

案のじょう。馬の沓は作っていても登城して来た六名は糊目正しい衣服を着、大小も皆、それぞれ、ふさわしいのを差していた。

八

以上、孫兵衛丞のはなしを、武蔵は興ぶかく聞き入っていた。

「――まず、そういう仕儀で、われら六名、お召抱えになったわけじゃが、思うにこれ皆、天地の恩じゃ。祖先の恩、君公の恩は、忘れんとしても忘れようもないが、一頃、露命をつないだ馬の沓の恩は忘れそうじゃと、後々誡め合うて、細川家へお抱えとなった今月の今日を、毎年の

寄合い日と決め、こうして蕪の莚に、昔をしのび、三つの恩を胸に新たにしながら、貧しい酒もりを、大きく歓びおうている次第でござる」

孫兵衛丞は、そういい足してから、武蔵へ杯を向けて、

「いや、われらの事のみいうて許されい。酒は貧しくも、肴はなくも、心ばえは、かような者ども。――明後日の試合には、どうぞ潔うやって下されよ。骨は、わしらが拾う。はははは」

杯を押しいただいて、

「かたじけのうござる。高楼の美酒にもまさるお杯。お心ばえにあやかりますように」

「滅相もない。われ等ごときにあやかったら、馬の沓を作らねばならぬぞ」

小石まじりの土が、堤の上から少しばかり、草間を辷ってくずれて来た。人々が振り仰ぐと、ちらと、蝙蝠のような人影がかくれた。

「誰だっ」

木南加賀四郎は、おどり上がって行った。押っとり刀で又一人つづいた。

堤の上に出て夜霞の遠くを見ていたが、やがて大きく笑いながら、下の武蔵や友達へ向って告げた。

「巌流の門人らしい。こんな所へ武蔵どのを招いて、われらが首を集めているので、助太刀の策でも密議していると、変に取ったのじゃあるまいか。あわてて、駈け去って行き申したが」

「あははは。その疑い、先方にしてみれば無理もない」

ここの人々は、あくまで磊落であったが、こよいあたり、城下の空気がどう動いているか、武蔵には、ふと考えられた。

――長座は無用。同郷の縁故があるだけに、なおさら心しなければならない。かかる武士たちへ、よしなき累を及ぼしては済まぬ。武蔵はそう考えついて、十分に人々の好意を謝し、一足さきに、楽しい河原の莚を辞して飄然と去った。

飄然――

いかにもそういったふうな武蔵の去来だったのである。

翌日。

すでに十二日である。

当然、武蔵はどこか、小倉城下に泊って、待機しているものと思い、長岡家では、彼の宿所を、手分けして探していた。

「なぜ引き留めて置かなかった」

と、用人も取次も、後では主人の長岡佐渡に、かなり叱られたこと間違いない。

昨夜、到津の河原へ武蔵を迎えて飲んだという六名の仲間も、佐渡にいわれて探し歩いていた。

が、分らなかった。

杳として、武蔵の姿は、十一日の夜から行先が知れないのであった。

「こまった事！」

明日を前にして、佐渡は白い眉毛に焦躁をたたえていた。

巌流は、その日。

久しぶりに登城して、藩公から懇篤なことばと、お杯をいただいて、意気揚々、騎馬でやしき

へ退がっていた。
城下には、夕刻頃、武蔵について種々な浮説が伝えられていた。
「臆して、逃げたのだろう」
「逃亡したに違いない」
「どう探しても、皆目、姿が見つからないそうだ」
と、いうのである。

日出づる頃

一

逃げたろう？　――
逃げたに相違ない。
ありそうな事だ。
見えぬ武蔵の姿に対して、紛々たる噂のなかに、十三日の夜は明けた。
長岡佐渡は眠らなかった。
よもや？　――とは思うものの、そう思われない人間がよく事の間隙に豹変する。
「――御主君のてまえ」

彼は、切腹すら考えた。

武蔵を推挙した者は自分である。藩の名を以て、試合となった今日、その武蔵が行方を晦ましたなどという事がもし起ったら、自決の道を執るしかない。真面目に、切腹を考えながら、佐渡は、きょうも澄みきった朝の晴天を迎えた。

「……自分の不明か」

あきらめに近い呟きをもらしながら、室内の清掃ができる間、伊織をつれて庭を歩いて来た。

「ただ今戻りました」

その武蔵の居所を、昨夜から探しに出ていた若党の縫殿介が、疲れた顔色を横門から現した。

「どうだった？」

「分りませぬ。皆目、それらしい者も、御城下の旅籠には」

「寺院など、訊いてみたか」

「府中の寺院、町道場など、武芸者の立ち寄りそうな箇所へは、安積様、内海様などが、手分けして調べて参るといっておりましたが、まだあの六名がたは」

「戻らぬが……」

佐渡の眉には、愁いが濃い。

庭木を透いて、紺碧な海が見える。白いしぶきの浪がしらが、彼の胸まで打って来るのだった。

「…………」

梅若葉のあいだを、佐渡は黙々と行きつ戻りつしていた――

「わからぬ」
「どこにも見えぬ」
「こんな事なら、一昨夜別れる時に、確と行先を聞いておくであったに」
井戸亀右衛門丞、安積八弥太、木南加賀四郎など、夜来、歩き通していた人々も、やがて、げっそりした顔を揃えて帰って来た。
縁に腰かけて、人々はとかくの評議にいきり立っていた。時刻は迫るばかりなのだ。――今朝、佐々木小次郎の門前をよそながら見て通ったという木南加賀四郎の話によれば、昨夜来、そこには約二、三百名の知己門人が詰めきって、門扉を開き、大玄関にはりんどうの紋のついた幕をめぐらし、正面に金屏風をすえ、早朝には、城下の神社三ヵ所へ門人たちが代参して、きょうの必勝を期している――という旺んな様子であったという。
それにひきかえて！
と口には出さぬが、人々は惨たる疲れをお互いの顔に見合った。一昨夜の六名にしてみても、武蔵の生国が、自分らと同じ作州であるというだけでも、藩へも世間へも、顔向けがならない気がするのだった。
「もうよい。……今から探しても間にあうまい。御一同、お引き揚げ下さい。慌てれば慌てるほど見苦しい」
佐渡は、そう告げて、人々に無理に引き取らせた。木南加賀四郎や安積八弥太などは、
「いや、見つける。たとえ今日が過ぎても、あくまで見つけ出して、斬り捨ててくれる」
昂奮して帰って行った。

佐渡は、清掃された室内に上がって、香炉に香を焚いた。それはいつもの事ながら、
「……さてはお覚悟を」
と、縫殿介は、胸を衝かれた。すると、まだ庭先に立ち残って、海の色を見ていた伊織が、ふと彼へいった。
「縫殿介さん。下関の廻船問屋、小林太郎左衛門の家を訊ねてみましたか」

二

大人の常識には限界があるが、少年の思いつきには限界がない。
伊織のことばに、
「そうだった。……おお」
佐渡も縫殿介も、的確に目標を指さされた心地がした。或は？　――いやいやこの上は、武蔵のいそうな処としては、其処以外には考えられない。
佐渡は、眉を開いて、
「縫。不覚じゃったな。慌てぬようでも、慌てて居るわい。――すぐ其方参ってお迎えして来い」
「はっ、承知いたしました。伊織どの、よう気がついたな」
「わたしも行く」
「旦那さま。伊織どのも、一緒にと申しますが」
「ウム。行って来い。――待て待て。武蔵どのへ一筆書くから」

佐渡は手紙をしたためた。そしてなお口上でもいいふくめた。

試合の時刻、辰の上刻までに、相手方の巌流は、藩公のお船をいただいて、船島へ渡ることになっている。

今からなら時刻もまだ十分。尊公にも、自分のやしきへ来て支度をととのえ、船も、自分の持船を提供するゆえ、それへ乗って、晴の場所へ臨んでは如何。

佐渡のそうした旨を受けた縫殿介と伊織は、御家老の名を以てお船手から藩の早舟を出させた。

ほどなく下関へあがる。

下関の廻船問屋、小林太郎左衛門の店はよく知っている。店の者に訊ねてみると、

「何か知らないが、先頃からお住居の方に、お若いお武家が一人、泊っていることはいるようです」

と、いう。

「ああ、やはり此家に」

縫殿介と伊織とは、顔見合せてにことした。住居はすぐ店の浜納屋つづきである。主の太郎左衛門に会って、

「武蔵様には当家に御逗留でございましょうか」

「はい、お在でになります」

「それを聞いて、安心いたしました。昨夜来、御家老にも、どれほど、御心配なされていたか分りませぬ。早速、お取次を願いとうござるが」

太郎左衛門は、奥へはいって行ったが、すぐ戻って来て、
「武蔵様は、まだお部屋で、お寝みになっておりますが……」
「えっ？」
思わず、呆れ顔して、
「起して下さい。それどころでは御座らぬ。いつもこう、朝は遅いお方でござるか」
「いえ。昨夜は、てまえとさし対いで、深更まで、世間ばなしに興じておりましたので」
召使いを呼んで、縫殿介と伊織を、客間へ通しておき、太郎左衛門は、武蔵を起しに行った。
間もなく、武蔵は、二人の待っている客間へ姿を見せた。十分、熟睡をとった彼のひとみは、嬰児の眼のようにきれいだった。
その眼元に、微笑を寄せながら武蔵は、
「やあ、お早く。――何事でござりますか」
と、いって坐った。
その挨拶にも、縫殿介は、力ぬけを感じたが、すぐ長岡佐渡の書面をさし出し、又、口上でも、いい足した。
「それはそれは」
武蔵は、手紙へ頭を下げて、封を切った。伊織は、その姿を、穴のあくほど見つめていた。
「……佐渡様の思し召、ありがたい事に存じますが」
武蔵は、読み了えた手紙を巻きながら、ちらと、伊織の顔を見た。伊織はあわてて俯向いた。眼から涙があふれかけたので――。

三

武蔵は、返事をしたためて、
「委細、書中にいたしましたれば、佐渡様へは、よろしゅうお伝えを」
との事だった。
そして、船島へは、自身、頃を計って出向くゆえ、お気遣いなく——ともいった。
やむなく、二人は、返書を持ってすぐ辞した。——帰るまで、伊織は遂に何もいえないでいた。武蔵も一言もことばをかけてやらないのである。しかし、無言の中に、師弟の情と、言葉以上のものは尽きていた。
二人の戻りを、待ちかねていた長岡佐渡は、武蔵の返書を手にして、まずほっと眉をひらいた。
文面には、

私事、お許様御舟にて、船島へ遣さる可旨、仰せ被聞、重畳お心づかいの段、辱なくぞんじ奉候

然れどこの度、私と小次郎とは敵対の者にて御座候。しかるに小次郎は君公の御舟にて遣され、私は其許様お舟にて遣され候旨に御座候処、右、御主君に被対、如何わしく存じ奉候。この儀、私にはお構いなされず候て然る可とぞんじ奉り候

此段、御直に申し上可とぞんじ候えども、御承引なさるまじく候に付、わざと申しあげず、爰元へ参り居候（中略）

爰元の舟にて、能き時分参り申すべく候間、左様に思し召さるべくそろ。以　上

四月十三日　　　　宮本　武蔵

佐渡守様

と認めてあった。

「………」

佐渡は、黙然と、読後の文字をなお見入っていた。

謙虚の美。ゆかしい思い配り。何にしても行届いた返書。と心を打たれている容子だった。

それと又、佐渡は、昨夜からの自分の焦躁が、この返書に対して、面映ゆくあった。謙虚な心の持主に対して、少しでも疑ったことが自ら恥じられた。

「縫殿介」

「はっ」

「武蔵どのの、この御書面を携えてすぐ、内海孫兵衛丞どのや、その他の衆に、廻状いたして来い」

「承知いたしました」

退がりかけると、襖の陰に控えていた用人が、

「御主人様。御用がおすみ遊ばしたら、今日のお立会のお役目、はやお支度を遊ばしませぬと」

と、うながした。

佐渡は落着いて、

「心得ておる。じゃが、まだ時刻には早かろう」

「お早くは御座りまするが、同じく今日のお立会役、岩間角兵衛様にはもはや御船を仕立てられ、今し方、浜をお離れなされましたが」
「人は人。あわてずともよい。——伊織、ちょっとこれへ来い」
「はい……御用ですか」
「そちは、男だの」
「え、え」
「いかなる事があっても、泣かぬという自信があるか。どうじゃ」
「泣きませぬ」
「然らば、わしの供をして、船島へ行け。——じゃが、次第に依っては、武蔵どのの骨を拾うて帰るかも知れぬのだぞ。……行くか。……泣かずにいられるか」
「行きます。……きっと、泣かないで」
奥の声をうしろに。
縫殿介は門の外へ駈け出していた。すると、塀の陰から彼を呼ぶ見すぼらしい旅の女があった。

四

「お待ち下さいませ。……長岡様の御家来さま」
女は、子を負っていた。
縫殿介は、気が急いている。しかし、旅の女の風態に、怪しみの眼をみはって、

「何じゃ。お女中」
「ぶしつけでは御座いまするが、かような身なりの者、お玄関へ立つ事も憚られまして」
「では、御門前で待っていたのか」
「はい……今日に迫った船島の試合に、きのうから、武蔵様が逃げたとやら……町の噂に聞きましたが、それは本当でございましょうか」
「ば、ばかな事！」
ゆうべからの鬱憤を、いちどに吐いて、
「左様な武蔵どのか、武蔵どのでないか、辰の刻になれば分る。――たった今、わしは武蔵どのにお会いして、御返書までいただいて来たところだ」
「えっ……。お会いなされましたか。して、何処に？」
「其方は？　……何じゃ」
「はい」
さし俯向いて、
「武蔵様とは、知る辺の者でござりますが」
「ふム。……ではやはり根もない噂に案じていたのか。では、これから急ぐ出先だが、武蔵どのの御返書を、ちょっと見せて上げる。心配なさるな、これこの通りに――」
縫殿介がそれを読み聞かせてやっていると、彼のうしろへ立ち寄って、共に、涙の眼をもって、偸み読みしている男があった。
縫殿介が、ふと気づいて、自分の肩を振り向くと、男は間が悪そうにお辞儀して、あわてて、

眼をふいた。
「誰だ？　……おぬしは」
「はい。その女房の、連れの者でございます」
「なんだ、御亭主か」
「有難うございました。武蔵どのの、懐かしい文字を見て、何だか、会ったもおなじ気がしました。……なあ女房」
「ほんに、これで安心いたしました。――欲には、遠くからでも、試合の場所を、拝んでいとうございます。たとえ、海を隔てても、私たちの心がそこに働きますよう」
「オオ、それなら、彼の海沿いの丘へ上って、遙かに、島の影なと見ていなされ。――いやいや、きょうは、ばかに晴れているから、船島の渚あたりは、かすかに見えるかも知れぬぞ」
「お急ぎのところ、足をお止めして、済みませんでした。――では、御免なされませ」
子を負った旅の夫婦者は、城下端れの松山をさして、足を早めかけた。
縫殿介も、急ぎかけたが、あわてて呼び止めた。
「もしもし。お前たちの、名前は何という人か。さし閊えなければ聞かしておいてくれ」
夫婦は、振り返って、又ていねいに遠くからお辞儀をした。
「武蔵どのと同じ作州の生れ――又八と申します」
「朱実といいまする」
縫殿介は、うなずくと、もう一散に、使い先へ駈けて行った。
ややしばらく見送っていたが、眼を見合すと、二人は口もきかず、城下の外へ急いだ。小倉と

門司ケ関のあいだの松山へ、喘ぎ喘ぎ、登って行った。
真正面に、船島が見える。幾つもの島影も見える。いや海門の彼方、長門の山々の襞まで今日はあざやかに見える。
二人は、たずさえている菰を敷き、海へ向って、並んで坐った。
ざあ、ざあっ……と断崖の下の潮音は、親子三人の上に、松の葉を降りこぼした。
朱実は、子を降ろして、乳ぶさに抱え、又八はじっと、膝に掌をむすんだまま、口もきかず、子もあやさず、一念、海の青を見入っていた。

彼の人・この人

一

縫殿介は、いそいで来た。
主人の長岡佐渡が、今朝、船島へ出向くまでに間に合うようにと。
吩咐けられた六名の屋敷を、それぞれ駈け廻って、武蔵の返書と次第を告げ、どこでも茶ものまず引っ返して来た途中なのである。
「あっ、巌流の……？」
彼は、そのいそぐ足をも止めて、思わず物陰にたたずんだ。

そこは、御浜奉行の役宅から半町ほど先の海辺だった。
そこの岸からは、早朝よりたくさんな藩士が、きょうの試合の立会や、検視や、又、不慮の場合の警備だの、試合場の準備だのとして、番頭以下足軽組まで——幾組にもわかれて、ぞくぞくと船島をさして先発していた。
——今も。
御船手の藩士が、一艘の新しい小舟を寄せて、待っていた。舟板から水帚やもやいの棕梠縄まで卸したばかりの真新しい舟だった。
縫殿介は一目見て、それは藩公から特に巌流へくだされた舟と知った。
舟に、特徴はないが、そこらに佇んでいる百名以上の人々の顔ぶれが、皆、日ごろ巌流と親しい者か、或は見馴れない顔ばかりなので、すぐ知ったのである。
「おお、お出でになった」
「見えられた」
人々は、舟の両側に立って、おなじ方角を、振り向いていた。
磯松の陰から、縫殿介も、彼方を見ていた。
御浜奉行の休み所に、乗って来た駒を繋いで、佐々木巌流は、しばらくそこに休息を取っていたものとみえる。
そこの役人達にも見送られ、巌流は、日頃の愛馬を、託していた。——そして供として、内弟子の辰之助一名を連れ、砂を踏んで此方の舟のほうへ歩いて来た。
「…………」

人々は、巌流の姿が、近づいて来るにつれ、粛として、自ら列を作し、彼の道を開いていた。

それと人々は、その日の巌流の晴の扮装に恍惚として、自分達までが武者振いのようなものを覚えた。

巌流は、浮織の白絹の小袖に、眼のさめるような、猩々緋の袖無羽織をかさね、葡萄色の染革の裁附袴を穿いていた。

足拵えは、もちろん、草鞋――すこし潤してあるかに見える。小刀は日頃の物であったが、大刀は、仕官以後は遠慮して差さなかった例の無銘――しかし肥前長光ともいわれている――愛刀物干竿を、久しぶりに、その腰間に、長やかに横たえていた。

その刀は、三尺余もあるので、見るからに業刀と思われ、送りの人々の眼をみはらせたが、より以上、その長剣がすこしも不似合でない彼の優れた骨がらと、猩々緋の真っ紅なのと、色の白い豊頬な面と、そして眉もうごかさない落ちついた態度の美に――何か荘重なものを見ていた。

波音と、風に紛れて、縫殿介がいる辺りまでは、人々の声も、巌流のことばも、聞えては来なかったが、巌流の面には、これから生死の場所へ臨む者とは見えぬ和やかな笑みが、遠くからでも明るく見えた。

彼は、その笑みを、能うかぎり、知己朋友に、万遍なくふり撒いて、やがて、どよめく声援者につつまれながら、新しい小舟へ乗った。

弟子の辰之助も乗った。

船手方の藩士が、二人乗りこんで、一名は舳に腰かけ、一名は櫓をにぎる――
それと、もう一つの供のものは、辰之助の拳に据えて来た鷹の天弓である。小舟が岸を離れると一斉に歓声を送った人々の声に愕いたのであろう。天弓は、パッとひとつ、大きく翼を搏った。

二

浜辺に立って見送っている人々は、いつまでも立ち去らなかった。
それへ応えて、巌流も、舟の中から、振り向いていた。
櫓を漕ぐ者も、殊更、舟を迅く行ろうとはせず、大きく弛く、波を切っていた。
「そうだ、時刻が迫った。おやしきの旦那様にも早……」
縫殿介は、われに回って、たたずんでいる磯松の陰から、急に帰りかけた。
その時、ふと気づいたのであった。彼が姿を倚せていた松から六、七本目の同じような磯松の陰に、ひたと身を寄せて、独り泣いている女がある。
遠く小さく――海の青に溶けてゆく小舟を――いや巌流の姿を、見送っては又、よよと木陰に泣いていた。
それは巌流が、小倉に落ち着いてからの浅い年月、巌流のそばに仕えて来たお光であった。
「………」
縫殿介は、眼を反らした。そして彼女の心を愕かさぬように、足音を忍ばせて、浜から町の道へ出て行った。
ふと、気になるまま、

「——誰にも、裏と表はあるもの。晴の姿の陰には、愁いに傷む人のあるもの……」
と、つぶやいて、人目を離れて悲しむ一人の女性と、もう沖へ、うすれて行く巌流の舟とを、もう一ぺん、振りかえってみた。
浜辺の人々は、三々五々、もう波打際から散らかっていた。口々に巌流の落ちつきぶりを称え、きょうの試合の必勝を、彼の上に期待しながら——。

「辰之助」
「はっ」
「天弓を、これへ」
巌流は、左の拳をさし伸べた。
辰之助は、自分の拳にすえていた鷹を、巌流の手へ移して、少し退がった。
舟は今、船島と小倉との間を漕いでゆく。海峡の潮流は、ようやく急であった。空も水も、澄みきった好晴の日であったが、浪はかなり高かった。
舷から水玉のかかるたびに、鷹は逆毛を立てて、凄愴な姿態を作った。今朝は、飼い馴れたこの鷹にも、戦気があった。
「お城へ帰れ」
巌流は、鷹の足環を解いて、鷹を拳から空へ放った。
鷹は、常の狩場の的のように、空へ翔けると、逃げる海鳥へかかって、白い羽毛を降らした。
しかし再び飼主が呼ばないので、お城の空や、島々の翠をかすめて、やがてどこかへ見えなくな

った。
巌流は、鷹の行方を見ていなかった。鷹を放つと、巌流はすぐに、身に着けている神仏の御札やら手紙の反古やら、又、岩国の叔母が、心をこめて縫って来た梵字の肌着までを――すべて元来の自己以外の物は――みな投げて、潮へ流してしまった。
「さっぱりした」
巌流はつぶやいた。
今の絶対的なものへ向って行く彼の気持には、彼の人、この人と、思い出さるる、情や絆は、すべて心の曇りになると思った。
自分に勝たせようと祈ってくれる、大勢の人々の、好意も重荷であった。神仏の御札さえ、邪げと彼は思ったのである。
人間。――素肌の自己。
これ一箇しか、今は、恃むもののない事を、さすがに悟っていた。
「…………」
潮風は、無言の彼の面をふいた。その眸に――船島の松や雑木の翠が、刻々に、近づいていた。

三

一方――
同じ準備は、対岸の赤間ヶ関にある武蔵のほうにも、当然の事、はや迫っていたわけである。

早朝。
長岡家の使いとして、縫殿介と伊織のふたりが、武蔵の返書を携えて、立帰って行ったあと。
——彼の身を寄せている廻船問屋の主、小林太郎左衛門は、浜納屋の露地づたいに、店頭へ姿を見せ、
「佐助。佐助はいないか」
と、探していた。
佐助というのは、大勢の雇人の中でも、よく気のつく若い者で、住居の方でも重宝に使い、暇があると店のほうを手伝っていた。
「おはよう御座います」
主人の姿を見て帳場から降りて来た番頭は、まず朝の挨拶をして、
「佐助をお呼びで。——はい、はい、今しがたまで、そこらにおりましたが」
と、他の若い者へ向い、
「佐助を探しておいで、佐助を——。大旦那がお召しだ。いそいで」
と、いいつけた。
それから番頭は何か、店の事務について、荷物の回漕やら船配りなどについて、さっそく、主人に報告的なおしゃべりを始めたが、太郎左衛門は、
「後で。後で」
耳たぶの蚊を払うように顔を振り——それとはまったく関りのないことを訊ね出した。
「誰か、店のほうへ、武蔵様を訪ねて見えた者があるかね」

「へ。ああ、奥のお客様のことで。――いや今朝がたも、訪ねて見えたお人がございましたが」
「長岡様のお使いだろう」
「左様で」
「その他には」
「さあ？……」
と、頬を抑えて、
「てまえが会ったのでは御座いませんが、昨晩、大戸を卸してから、穢い身なりをした眼のするどい旅の男が、樫の杖をついて、のっそり這入って来て――武蔵先生にお目にかかりたい。先生には下船以来、当家に御逗留と承るが――といって、しばらく帰らなかったそうでございますよ」
「誰がしゃべったのだ。あれほど、武蔵様の身については口止めしておいたのに」
「何しろ、若い衆たちは、きょうの事がございますので、ああいうお方が、御当家に泊っているという事は、何か自分たちの自慢のように、つい口へ出てしまうらしいので――てまえも厳しく申し聞かせては御座いまするが」
「そして、ゆうべの、樫の杖をついた旅の人とかはどうしたのか」
「総兵衛どのが、言訳に出まして、何かのお聞き違いで御座いましょうと――どこまでも武蔵様はいない事に押し通して、やっと、帰したそうで御座います。――誰かその時、大戸の外にはまだ二、三人も――女子の影も交じって佇んでいたとやらいうておりましたが」
そこへ。

船着の桟橋の方から、

「佐助でございます。大旦那、何か御用でございますか」

「おお佐助か。べつに、他の用じゃないが、お前には今日、大役を頼んである。念を押すまでもないが合点だろうな」

「へい。ようく心得ております。こんな御用は船師一代のうちにもない事だと思いまして、今朝はもう暗いうちから起きて、水垢離をかぶり、新しい晒布で下っ腹を巻いて待っておりますんで」

「じゃあ、ゆうべも吩付けておいたが、舟の支度も、いいだろうな」

「べつに、支度といって、何もございませんが、たくさんな軽舸の中から、脚の迅い、そして穢れのないのを選って、すっかり塩を撒いて、船板まで洗って置きました。――いつでも、武蔵様のほうさえ、お支度がよければ、お供をするようになっております」

四

太郎左衛門は又、

「そして、舟は、どこへ繋いでおいたか」

と、たずねた。

佐助が、いつもの船着の岸に――と答えると、太郎左衛門は考えていたが、

「そこでは、お立ちの際、人目につく。――どこまでも、人目だたぬようにというのが武蔵様のお望み、どこぞ、他の場所へ廻しておいてもらいたいのう」

「かしこまりました。では、どこへ着けておきましょうか」
「住居の裏より、二町ほど東の浜辺――あの平家松のある辺りの岸なら、往来も稀だし、人目にもそうかかるまい」
そう吩付けている間も、太郎左衛門は、自分までが、何やら落着かぬ様子だった。
店も、平常とちがって、今日はめっきり暇だった。子の刻過ぎまで、海門の船往来が止められているせいもあろうし、又、対岸の門司ケ関や小倉と共に、その長門領一帯でも、すべての者が、船島のきょうの試合を、心がかりにしているせいもあろう。
そう思って往来を眺めると、どこへ指して行くのか夥しい人出であった。近藩の武士らしい人々、牢人、儒者風の者、鍛冶、塗師、鎧師などの工匠たち、僧侶から雑多な町人や百姓までが――その中には被衣だの市女笠だのの女のにおいをも蒸れ立てて――おなじ方角へ、流れて行くのだった。
「はよう、来やい」
「泣くと、捨てて行くぞよ」
漁師の女房たちであろう、子を背負ったり、手に曳いたり、今が今にも、何事かあるように、わめいて通るのもあった。
「なるほど、これでは……」
と、太郎左衛門も、武蔵の気もちが分る気がした。
識者顔する者の、毀誉褒貶さえかなり耳うるさいところへ、この人出の埃は、他人の死ぬか生きるかを、勝つか負けるかを、ただ興味として、見物に駈けて行く――

しかもまだ、時刻までには、幾刻か間もあるのに。

そして、船止めとなっているからには、元より海上へは出られず、遠く陸地とは絶縁されている船島の現地が、たとえ山や丘へ上っても、見える筈もあり得ないのに。

しかし、人が行く。そして、人が行くと、家にいられない人々が、わけもなく、そろそろと行くのだった。

太郎左衛門は、ちょっと往来へ出て、一巡そんな空気に触れながら、やがて、住居へ戻って来た。

彼の居間も、武蔵の寝ていた部屋も、もうすっかり、朝の掃除が終っていた。

開けひろげた浜座敷の天井の木目に、ゆらゆらと、波紋の渦がうごいていた。すぐ裏がもう海だった。

波から刎ね返る朝の陽が、ふわ、ふわ、と光の斑になって、壁にも障子にも遊んでいる。

「お帰りなさいませ」

「お。お鶴か」

「どちらへお出でになったのかと彼方此方、さがしていましたのに」

「お店の方にいたのだよ」

お鶴のついだ茶を取って、太郎左衛門は、静かに見入っていた。

「…………」

お鶴もだまって海を見ていた。

太郎左衛門が、眼に入れても痛くないほど可愛がっているこの一人娘は、先頃まで泉州堺港の

出店にいたが、ちょうど武蔵が来る折、同じ船で、父の許へ帰っていた。――お鶴はかねて伊織をよく世話した事もあるので、武蔵が疾く伊織の消息に詳しかったのは、船中で、この娘から、何かのはなしを聞いていたのかも知れなかった。

五

又。こうも想像される。

武蔵が、ここの小林太郎左衛門の住居へ、先頃から身を寄せたのも、そうした縁から、伊織の世話になった礼をのべるためにも、下船後、太郎左衛門の家へ立ち寄り、太郎左衛門と親しくなった事からではあるまいか。

が――何はともあれ。

武蔵が逗留中は、父のいいつけで、お鶴が彼の身のまわりを世話していた。

現に、昨夜なども、武蔵が父と夜更くるまで、話しこんでいるあいだ、彼女はほかの部屋で、頻りと縫物などしていた。それは武蔵が、

（試合の当日は、何も支度は要り申さぬが新しき晒布の肌着と下帯だけは整えておきたく思います）

と、何かの折にいったので、肌着のみならず黒絹の小袖も帯紐も新しく縫って今朝までに、しつけ糸を抜けばよいように、すべて揃えてあるのだった。

仮に――

ほんの、かりそめに、太郎左衛門だけの親心であったが、

（娘は、あの人に、淡い思いを寄せているのではあるまいか。——もし、そうだとしたら、今朝のお鶴の心は）

と、ふと、そんな思い過しもしてみるのだった。

いや、思い過しでないかもしれなかった。お鶴の今朝の眉には、どことなく、そうした心の色がただよっている。

今も。

父の太郎左衛門に茶を汲んでから、父が黙然と海を見ているると、彼女も、いつまでも黙って、物思わしく、海の青を凝視していた。そして、その眸までが、海のあふるる如く、涙になりかけた。

「お鶴……」

「はい……」

「武蔵様は、どこにお在でか。朝の御飯は、さし上げたか」

「もう、お済みでございます。そして、あちらのお部屋を閉めて」

「そろそろ、お支度中か」

「いいえ、まだ……」

「何をしていらっしゃるのだ」

「画を描いていらっしゃるようです」

「画を……？」

「はい」

「……ああ、そうか。心ないおねだりをした。いつぞや、画のはなしが出た折、なんぞ一筆でも、後の思い出にも――と、わしが御無心しておいたので」
「きょう船島まで、お供をしてゆく佐助にも、一筆遺物に描いてつかわすと、仰っしゃっておいでになりましたから……」
「佐助にまで」
太郎左衛門はつぶやいて、急に自分が落ちつかない気もちにせかれた。
「――もう、こうしている間にも、時刻は迫るし、見えもせぬ船島の試合を、見ようと騒いでゆくたくさんの人たちも、ああして往来を押し流して行くのに」
「武蔵様は、まるで、忘れたようなお顔をしていらっしゃいます」
「画などの沙汰ではない。……お鶴、お前が行って、どうぞもう、そのような事は、お捨て措き下さいと、ちょっと申し上げて来い」
「……でも、わたしには」
「いえないのか」
太郎左衛門は、その時、はっきりとお鶴の気持を覚った。父と娘とは、ひとつ血である。彼女の悲しみも傷みも、そのまま、太郎左衛門の血にひびいていた。
が男親の顔は、さり気なかった。むしろ叱るように、
「ばか。何をめそめそと」
そして自分で――武蔵のいる襖のほうへ立って行った。

六

そこは、ひそと、閉めきってあった。

筆、硯、筆洗などをおいて、武蔵は、寂として坐っていた。

すでに描き上がっている一葉の画箋には、柳に鷺の図が描いてあった。

——が、前に置いてある紙には未だ一筆も落してなかった。

白い紙を前にして、武蔵は、何を描こうかと、考えているらしい。

いや、画想をとらえようとする理念や技巧より前に、画心そのものに成りきろうとする自分を静かにととのえている姿だった。

白い紙は、無の天地と見ることができる。一筆の落墨は、たちまち、無中に有を生じる。雨を呼ぶことも、風を起すことも自在である。そしてそこに、筆を把った者の心が永遠に画として遺る。心に邪があれば邪が——心に堕気があれば堕気が——匠気があれば又匠気のあとが蔽い隠しようもなく遺る。

人の肉体は消えても墨は消えない。紙に宿した心の象はいつまで呼吸してゆくやら計りがたい。

武蔵は、そんな事もふと思う。

が、そんな考えも、画心の邪げである。白紙のような無の境に自分もなろうとする。そして筆持つ手が、我でもなく、他人でもなく、心が心のまま、白い天地に行動するのを待っているような気持——

「………」

その姿に、狭い一間は寂としていたのである。

ここには往来の騒音もなければ、きょうの試合もよそ事のようだった。

ただ中庭の坪の女竹が、ときおり、かすかな戦ぎを見せるだけで——。

「……もし」

音もなく、いつか、彼のうしろの襖が少し開いていた。

主の太郎左衛門であった。そっと、そこを窺ったものの、あまりに静かな彼の姿に、呼びかけるのさえ、憚られて、

「……武蔵様。もし……せっかくお楽しみのところを、お邪魔いたして恐れ入りますが」

彼の眼にも、武蔵のそうしている容子は、いかにも画に楽しんでいる姿に見えたのだった。

武蔵は、気がついて、

「おう、亭主どのか。……さ、這入られい、そのように閾際で、なにを御遠慮」

「いえ、今朝はもう、そうしても居られますまい。……やがて、お時刻が迫りまするが」

「承知しています」

「お肌着や、懐紙、手拭など、お支度の物も取揃えて、次の部屋に置きましたゆえ、どうぞいつなりとも」

「かたじけのうござる」

「……そして又、てまえどもへくださるための画でございましたなら、どうぞもうお捨て置きくださいまして。……又、首尾よう船島からお帰りの後にはゆるゆると」

「お気づかいなさるな。どうやら今朝は、すがすがしゅう御座るゆえ、かような時に」
「でも、時刻が」
「存じています」
「……では、お支度にかかる時には、お呼びくださいまし、あちらで控えておりますから」
「恐れ入るのう」
「どういたしまして」
かえって、邪魔をしてもと、太郎左衛門が退がりかけると、
「あ。亭主どの――」
と、武蔵のほうから呼び止めて、こう訊ねた。
「この頃の、潮の満干は、どういう時刻になっておろうか。今朝は、引潮時でござるか、上潮時でござろうか」

七

潮の満干は、太郎左衛門には、店の商売上と、直接の関係があるので、問われると、言下に、
「はいこの頃は、明けの卯之刻から辰のあいだに、潮が干きりまして――左様、もうそろそろ潮が上げ始めている頃あいでござりまする」
と、答えた。
武蔵は、うなずいて、
「左様か」

と、つぶやいたきり、又、白い画箋に向って、もくねんとしていた。
太郎左衛門は、そうっと、襖をしめて、元の座敷へ退って行った。——他人事でなく、気にはかかるが、どうしようもなかった。
元の位置に、自分も落ちつくつもりで、しばらく坐ってみたが、時刻が、時刻が、と思うと、坐ってもいられなくなる。
つい立って、浜座敷の縁へなど出てみた。海門の潮は今、奔流のように動いていた。浜座敷の下の干潟へも、見ているうちに、ひたひたと潮は上げて来る。
「お父さま」
「お鶴か。……何をしているのじゃ」
「もうお出ましも間もないかと、武蔵様のお草鞋を、庭口のほうへ廻して参りました」
「まだだよ」
「どうなされましたか」
「まだ、画を描いていらっしゃるのだよ。……よいのかなあ、あんなに御悠りしていて」
「でも、お父さまは、お止めしに行ったのじゃないのですか」
「——行ったのだが、あの部屋へ行くと、妙に、止めるのもお悪い気がしてなあ」
——すると、何処かで、
「太郎左衛門殿っ、太郎左衛門殿っ」
声は、家の外だった。
庭先の下の干潟へ、細川藩の早舟が一艘、漕ぎ寄せていた。その早舟の上に突っ立っている侍

て、
縫殿介は、舟から上がらなかった。縁に太郎左衛門の姿が見えたのを幸いに、そこから仰向いが呼んだのだ。
「おう、縫殿介様で」
「武蔵どのには、もはや、お出ましなされたか」
と、訊ねた。
太郎左衛門が、まだ——と答えると、縫殿介は早口に、
「では、少しも早く、ご用意をととのえて、お出向き下さるよう、お伝え下さい。——すでに相手方の佐々木巌流どのにも、藩公のお舟にて、島へ向われたし、主人長岡佐渡様にも、今し方、小倉を離れましたれば」
「かしこまりました」
「くれぐれも、卑怯の名をおとりなさらぬよう、老婆心までに一言を——」
いい終ると、先を急くように、早舟はすぐ櫓を回して、漕ぎ去った。
——が。太郎左衛門もお鶴も、奥の静かな一間を振り向いたのみで、そのまま、わずかな時間を長い気持で、縁の端にならんで待っていた。
けれど、いつまでも、武蔵のいる部屋の襖は、開こうともしなかった。物音らしい気配も洩れて来なかった。
二度目の早舟が又、裏の干潟に着いて、一人の藩士が駈けあがって来た。こんどの使いは、長岡家の召使いではなく、船島から直かに来た藩士であった。

八

襖の音に、武蔵は目を開いていた。――で、お鶴が声をかけるまでもなかった。二度まで、催促の便が、早舟で来た由を告げると、武蔵は、
「そうですか」
ニコと、ただうなずく。
だまって、どこかへ出て行った。水屋で水音がする。一睡した顔を洗い、髪でも撫でつけているらしい。
その間、お鶴は、武蔵がいたあとの畳へ眼を落していた。さっきまで、白紙だった紙には、どっぷり墨がついている。一見、雲のようにしか見えないが、よく見ると、破墨山水の図であった。
画はまだ濡れていた。
「お鶴どの」
次の間から武蔵がいう。
「――その一図は、御主人に上げてください。又、もう一図は、きょう供をしてくれる船頭の佐助に後でお遣わし下さい」
「ありがとう存じます」
「意外なお世話に相成ったが、なんのお礼とてもできぬ。画は遺物がわりに」
「どうぞ、きょうの夜には又、ゆうべのように、お父さまと共に、同じ燈火の下でお話ができま

すように」
お鶴は、念じていった。
次の間では、衣の音がしていた。武蔵が身支度しているものと思われた。襖ごしの声がしなくなったと思うと、武蔵の声は、もう彼方の座敷で、父の太郎左衛門と何か二言三言、話している様子だった。
お鶴は、武蔵が支度していた次の部屋を通った。彼の脱いだ肌着小袖は、彼自身の手で、きちんと畳まれて、隅のみだれ箱に重ねてあった。
いい知れぬ寂しさが、お鶴の胸をつきあげた。お鶴は、まだその人の温みを残している小袖の上に顔を投げ伏せた。
「……お鶴。お鶴」
やがて。
父の呼ぶ声だった。
お鶴は、答える前に、そっと瞼や頬を指の腹で撫でていた。
「……お鶴っ。何をしておる。お立ちになるぞ。はや、お立ちになるぞ」
「はいっ」
われを忘れて、お鶴は駈け出して行った。
——と見れば、武蔵はもう草鞋を穿いて、庭の木戸口まで出ている。彼は、あくまで人目立つのを避けていた。そこから浜づたいに少し歩けば、佐助の小舟が、疾くから待っている筈だった。

店や奥の者、四、五人が、太郎左衛門と共にそこへ出て、木戸口まで見送った。お鶴は、何もいえなかった。ただ武蔵のひとみが、自分のひとみを見た機に、だまって、皆と一緒に、頭を下げた。

「――おさらば」

最後に、武蔵がいった。

頭を下げ揃えたまま、誰も頭を上げなかった。武蔵は柴折の外へ出て、静かに柴折戸を閉め、もう一度いった。

「では、ご機嫌よう……」

人々が、頭を上げた時は、もう武蔵の姿は彼方を向いて、風の中を歩いていた。

振向くか――振顧るか――と太郎左衛門を始め、取り残された人々は、縁や庭垣から見まもっていたが、武蔵は振向かなかった。

「あんなものかなあ、お侍というものは、なんと、あっさりしたものじゃろう」

誰か、つぶやいた。

お鶴は、すぐ、そこに見えなくなっていた。太郎左衛門もそれを知ると、共に奥へ姿を隠した。

太郎左衛門の住居の裏から浜辺づたいに一町ほど歩むと、巨きな一つ松がある。平家松とこの辺りで呼ばれている松――

先に小舟を廻して、雇人の佐助は、今朝夙くからそこに待っていた。武蔵の姿が今、その辺り

まで近づいたかと思うと、誰か、
「おおう！　……先生ッ」
「武蔵どの」
ばたばたっと、足もとへ転び伏すばかりに、駈け寄って来た者があった。

九

一歩――
閾を踏んで出た武蔵には、今朝はもう何も頭になかった。
多少の思いは、皆、真っ黒な墨にこめて、白紙の上へ、一掃の水墨画として吐いてしまった感じである。――その画もわれながら、今朝は気もちよく描けたと思う。
そして、船島へ。
潮にまかせて、渡ろうとする気もちには、なんら常の旅立ちと変った所はなかった。きょう彼処へ渡って、再びここの岸へ帰れるか、帰れないか。今の一歩一歩が、死の府へ向っているのか、なお、今生の長い道へ歩んでいるものか――そんな事すら思ってもみなかった。
かつて二十二歳の早春、一乗寺下り松の決戦の場所へ、孤剣を抱いて臨んだ時のような――あした満身の毛穴もよだつような悲壮も抱かなければ感傷もない。
さればといって。
あの時の百余人の大勢の敵が強敵か。きょうのただ一人の相手が強敵かといえば、烏合の百人よりもただ一人の佐々木小次郎のほうが、遙かに惧るべきものである事は勿論だった。武蔵に取

っては生涯またとあるかないかの、今日こそは大難に違いなかった。一生の大事に違いなかった。
――が、今。
自分を待つ佐助の小舟を見て、何気なく急ぎかけた足元へ、自分を先生と呼び、又、武蔵どのと呼びかけて、転び伏した二人の者を見ると、彼の平静な心は、一瞬、揺れかけた。
「おお……権之助ではないか。ばば殿にも。……どうして此処へは？」
不審そうにいう彼の眼の前に、旅垢にまみれた夢想権之助とお杉ばばとは、浜砂の中に埋まるように坐って、手をつかえていた。
「きょうの試合。一期のお大事と存じまして」
権之助のことばに次いで、ばばもいった。
「お見送りにのう。……そして又、わしは其方にきょうまでの詫言をしに来ました」
「はて。ばば殿が、この武蔵に詫言とは」
「ゆるしてたも！　……武蔵どの。長い間の、ばばが心得ちがいを」
「……えっ？」
むしろ疑うばかりに、武蔵は彼女のそういう面を見まもって、
「ばば殿、それは又、どういう気持でわしへ仰っしゃるのか」
「何もいわぬ」
ばばは胸に、両掌を合せて、今の自分の心の相を、象に見せた。
「――過ぎ来し方の事々。一つ一ついうたら、懺悔申すにも懺悔しきれぬ程あるが、すべてを水と流してたも。武蔵どの、ゆるしてたも。皆……子ゆえに迷うたわしの過ちであった」

「………」

じっと、その相を見入っていた武蔵は、あな勿体なしといわぬばかりに、遽かに膝を折って、ばばの手を取って伏し拝み、しばらく顔も上げ得なかったのは——胸もつまって涙がつきあげそうになって来たからであろう。

ばばの手もわなわな顫え、彼の手も微かに戦いていた。

「ああ、武蔵に取って、今日はなんたる吉日でしょうか。それ聞いて、今死ぬも、悲いなき心地がしまする。はっきりと、何か真実のものが観て取れた欣び——ばば殿のおことばを信じまする。そして今日の試合には、一層、すがすがしい心で臨めると存じまする」

「では、ゆるして下さるか」

「なんの、左様に仰せられましては、武蔵こそ、遠い以前にさかのぼって、ばば殿の前に幾重にも詫びせねばなりませぬ」

「……欣しや。ああこれで、わが身は心まで軽うなった。じゃが、武蔵どの、もうひとり世にも不愍な者、ぜひにも、其方に救うてもらわねばなりませぬぞい」

ばばは、そういって、武蔵の眼を誘うように、振り向いた。

——と見れば、彼方の松の木陰に、さっきからじっとうずくまったまま、顔も上げずに咲いている露草のような、弱々しい女性の姿があった。

十

——いうまでもない。それはお通であった。お通は、遂に、ここまで来た。遂に来たという姿

であった。
手に市女笠を持って。
杖と、病を持って。
なお、燃ゆるばかりのものを抱いていた。その烈しい炎の如きものもしかし、驚くばかり窶れた肉体に抱かれていた。——武蔵が見たとたんにも、真っ先にそれをはっと感じた。
「……ああ。お通……」
凝然と、彼は彼女のまえに立っていた。そこまで、黙々と運んで来た脚をすら忘れていた。彼方に置き残された権之助もばばも、わざと寄って来なかった。むしろ身を消して、この浜辺を、彼と彼女との二人だけのものにして遣りたい気持すら抱いた。
「お通……さんか」
それだけの嘆声が、武蔵にも精いっぱいな言葉だった。
この年月の空間を、単なる言葉でつなぐには、あまりにも多恨であり過ぎた。
しかも、問うにも語るにも、今はそうしている時刻の余裕すらも既にないのである。
「からだが快くないようだが……。どんなだな」
やがていった。ぽつりと、前後もない言葉だった。——長い詩のうちの一句だけを摘んでつぶやくように。
「……ええ」
お通は、感情に咽せて、武蔵の面へ、眸さえ上げ得なかった。——が、生別となるか死別となるか、この大事な一瞬を、徒らに取乱したり、空しく過してはならないと、自ら誡めているらし

く、じっと、理念の中に、自分を努めて冷ややかに守っていた。
「かりそめの風邪か。それとも、もう永い煩いか。どこが悪い？　……そして近頃は何処に。どこに身を寄せておるのか」
「七宝寺に、戻っております。……去年、秋の頃から」
「なに、故郷に」
「……ええ」
初めて、彼女の眸は、武蔵をじっと見た。
深い湖のように、眼は濡れていた。睫毛は、からくも溢れるものを支えていた。
「故郷……。孤児のわたくしには、人のいう故郷はありません。あるのは、心の故郷だけです」
「でも、ばば殿も、今では其女にやさしゅうしてくれる様子。何よりも、武蔵は欣しい。静かに病を養って、其女も幸せになってくれよ」
「今は、幸せでございます」
「そうか。それを聞いて、わしも少しは安んじて行かれる。……お通」
膝を折った。
ばばや権之助の人目を感じるので、彼女は居竦んだまま、よけい身をちぢめたが、武蔵は誰が見ている事も忘れていた。
「痩せたなあ」
と、掻き抱かぬばかり、背に手をのせて、熱い呼吸を弾ませている彼女の顔へ顔を寄せて、
「……ゆるせ。ゆるしてくれい。無情い者が、必ずしも、無情い者ではないぞ、其女ばかりが」

「わ、わかっております」
「わかっているか」
「けれど、ただ一言、仰っしゃって下さいませ。……つ、妻じゃと一言」
「分っておるという口の下に。――いうては、かえって味ないもの」
「でも……でも……」
お通はいつか、全身で嗚咽していた。とつぜん、懸命な力で、武蔵の手をつかんで叫んだ。
「死んでも、お通は。――死んでも……」
武蔵は、もくねんと、大きく頷いて見せたが、細くて怖ろしく強い彼女の指の力を、一つ一つ捥ぎ離すと振り退けるようにして、突っ立った。
「武士の女房は、出陣にめめしゅうするものでない。笑うて送ってくれい。――これ限りかも知れぬ良人の舟出とすれば、なおさらのことぞ」

十一

傍らに人はいた。
けれど、二人のわずかな間の語らいを、邪げる者はいなかった。
「――では」
武蔵は、彼女の背から手を離した。お通はもう泣いていなかった。
いや、強いて、微笑んで見せようとさえしながら、わずかにやっと、涙を怺えとめて、
「……では」

と、同じ言葉で。
武蔵は起つ。
彼女も、蹌りと、起った。――傍らの樹を力に。
「おさらば」
いうと、武蔵は、大股に浜辺の波際へ向って歩みだした。
お通は……喉までつき上げて来た最後のことばを、その背へ、遂にいえなかった。なぜならば、武蔵が背を向けた弾みに、
（もう泣くまい）
と、していた涙が、滂沱となって、武蔵の姿すら見えなくなってしまったからである。
岸に立つと、風がつよい。
武蔵の鬢の毛を、袂を、袴のすそを、潮の香のつよい風が颯々と撲って通った。
「佐助」
そこにある小舟へ呼ぶ。
佐助は、初めて振り向いた。
さっきから、彼は武蔵の来た事を知っていたが、わざと、小舟の中で、あらぬ方へ、眼をやっていたのだった。
「お。……武蔵様。もうよろしいのでございますか」
「よし。舟を、も少し寄せてくれい」
「ただ今」

佐助は、繫綱を解き、棹を抜いて、その棹で、浅瀬を突いた。
翻——と、武蔵の身が、その舳へ跳び移った時である。
「——あっ。あぶない、お通さんっ」
松の陰で、声がした。
城太郎である。
彼女と共に、姫路からついて来た青木城太郎だった。
城太郎も、一目、師の武蔵に——と志して来たのであったが、最前からの様子に、出る機を失って、樹陰のあたりに、やはりあらぬ方へ眼をやったまま——佇んでいたものらしかった。
ところが今。武蔵が、足を大地から離して、舟の人となったかと見えた途端に、何思ったかお通が、水へ向って、驀しぐらに駈け出したので、城太郎は、もしやと直ぐ気をまわして、
（あぶない！）
と、思わず、追いかけながら叫んでしまったものだった。
彼が、彼ひとりの臆測で、あぶないと呶鳴ったために、権之助も、ばばも、すべてがお通の気もちを、咄嗟に穿きちがえたものらしく、
「あっ……どこへ」
「短慮な」
と、左右からあわただしく駈け寄るなり、三人して、確と、抱き止めてしまった。
「いいえ。いいえ」
お通は、静かに顔を振ってみせた。

肩で、息こそ喘いでいるけれど、決して、そんな浅慮なことを——と笑ってみせるように、抱き支えた人々へ、安心を乞うた。

「どう……どうしやるつもりか……？」

「坐らせて下さいませ」

声も静かである。

人々は、そっと手を離した。するとお通は、波打際から遠くない砂地へ、折れるように坐った。

しかし、襟元も、髪のほつれも、きりっと直して、武蔵の舟の舳へ向い、

「お心措きなく……。行っていらっしゃいませ」

と、手をつかえていった。

ばばも坐った。

権之助も——城太郎も——それに倣ってぴたと坐った。

城太郎は遂に一言も、この際を、師と語ることもできなかったけれど、その時間だけ、お通に分け与えたのだと思うと、悔む気もちは少しも起らなかった。

魚歌水心

一

潮は上げている旺(さかり)だった。
海峡の潮路は、激流のように迅(はや)い。
風は追手。
赤間ケ関の岸を離れた彼の小舟は、時折、真っ白なしぶきを被(かぶ)った。佐助は、きょうの櫓(ろ)を、誉れと思っていた。漕ぐ櫓にも、そうした気ぐみが見えた。
「だいぶかかろうな」
行くてを眺めながら、武蔵がいう。
舟の中ほどに、彼は、膝広く坐っていた。
「なあに、この風と、この潮なら、そう手間はとりません」
「そうか」
「ですが――だいぶ時刻が遅れたようでございますが」
「うむ」
「辰の刻は、とうに過ぎました」

「左様――。すると船島へ着くのは」
「巳の刻になりましょう。いや巳の刻過ぎでございましょうよ」
「ちょうどよかろう」
その日――
巌流も仰ぎ、彼も仰いでいた空は、あくまで深い碧さだった。そして長門の山に白い雲が、旗のように流れているほか、雲の影もなかった。
門司ケ関の町屋、風師山の山の皺も、明らかに望まれた。そこら辺りに群れ上って、見えぬものを見ようとしている群衆が、蟻のかたまりのように黒く見える。
「佐助」
「へい」
「これを貰ってよいか」
「何です」
「舟底にあった櫂の割れ」
「そんな物――要りはしませんが、どうなさいますんで」
「手頃なのだ」
武蔵は、櫂を手に取っていた。片手に持って、眼から腕の線へ水平に通して見る。幾分、水気をふくんでいるので、木の質は重く感じる。櫂の片刃に削げが来て、そこから少し裂けているので、使わずに捨ててあった物らしい。
小刀を抜いて、彼は、それを膝の上で、気に入るまで削り出した。他念のない容子である。

佐助でさえ、心にかかって、幾度も幾度も赤間ヶ関の浜を——平家松のあたりを目じるしに——振り向いた事なのに、この人には、微塵、後ろ髪をひかれる風は見えない。いったい、試合などへ臨む者は、皆、こういう気持になるものだろうか。佐助の町人から観た考えでは、あまりに冷た過ぎるようにさえ思える。

櫂が削り終えたとみえ、武蔵は袴や袂の木屑を払って、

「佐助」

と、又呼ぶ。

「——なんぞ、着る物はあるまいか、蓑でもよいが」

「お寒いのでございますか」

「いや舷からしぶきがかかる。背中へ被けたいのだ」

「てまえの踏んでいる艫板の下に、綿入れが一枚、突っこんでありますが」

「そうか。借りるぞ」

佐助の綿入れを出して、武蔵は背へ羽織った。

まだ船島は、霞んでいた。

武蔵は、懐紙を取り出して、紙縒を作り始めた。幾十本か知れぬほど縒っている。そして又、二本縒に綯い合せて、長さを測り、襷にかけた。

紙縒襷というのは、むずかしい口伝があるものとか聞いていたが——佐助が見ていた所では、ひどく無造作に見えたし、又、その作りかたの迅いのと、襷にまわした手際のきれいなのに、眼をみはった。

武蔵は、その襷に、潮のかからぬよう、ふたたび、綿入れを上から羽織って、
「あれか、船島は」
はや間近に見えて来た島影を指して訊ねた。

二

「いえ。あれやあ母島の彦島でございます。船島は、も少し行かないと、よくお分りになりますまい。彦島の北東に、五、六町ほど離れて、洲のように平たく在るのがそれで――」
「そうか。この辺りに、幾つも島が見えるので、どれかと思うたが」
「六連、藍島、白島など――その中でも船島は、小さい島でございます。伊崎、彦島の間が、よくいう音渡の迫門で」
「西は、豊前の大里の浦か」
「左様でございます」
「思い出した――この辺りの浦々や島は、元暦の昔、九郎判官殿や、平の知盛卿などの戦の跡だの」
こういう話などしていて一体いいものだろうか。自分の漕ぐ櫓に、舟が進んで行くにつれ、佐助は、ひとりでに先刻から、肌に粟を生じ、気は昂まり、胸は動悸してならないのである。
自分が試合するのではなし――と思ってみても、どうにもならなかった。
きょうの試合は、どっち道、死ぬか生きるかの戦である。今乗せてゆく人を、帰りに乗せて帰れるかどうか――。乗せてもそれは、惨たる死骸であるかも知れないのだ。

佐助には、分らなかった。武蔵のあまりにも淡々とした姿が。
空をゆく一片の白雲。
水をゆく扁舟の上の人。
同じようにすら見えるのであった。
だが、佐助の眼にも、そう怪しまれるほど、武蔵は、この舟が目的地へ赴くあいだ、何も考える事がなかった。
彼はかつて、退屈というものを知らずに生活して来たが、この日の、舟の中では、いささか退屈をおぼえた。
櫂も削ったし、紙縒も縒れたし——そして考える何事も持たない。
ふと。
舷から真っ蒼な海水の流紋に眼を落して見る。深い、底知れず深い。
水は生きている。無窮の生命を持っているかのようである。しかし、一定の形を持たない。一定の形に囚われているうちは、人間は無窮の生命は持ち得ない。——真の生命の有無は、この形体を失ってからの後の事だと思う。
眼前の死も生も、そうした眼には、泡沫に似ていた。——が、そういう超然らしい考えがふと頭をかすめるだけでも、体じゅうの毛穴は、意識なく、そそけ立っていた。
それは、ときどき、冷たい波しぶきに吹かれるからではない。
心は、生死を離脱したつもりでも、肉体は、予感する。筋肉が緊まる。ふたつが合致しない。
心よりは、筋肉や毛穴が、それを忘れている時、武蔵の脳裡にも、水と雲の影しかなかった。

「——見えた」
「おお——ようやく、今頃」
船島ではない。そこは彦島の勅使待の浦であった。
約三、四十名の侍が、漁村の浜辺にむらがって、先刻から海上をながめ合っていた。
この者たちは皆、佐々木巌流の門人であり、その大半以上が、細川家の家中であった。
小倉の城下に、高札が立つと直ぐ、当日の船止めの先を越して、島へ渡ってしまったのである。
(万が一にも、師の巌流先生が敗れた時は、武蔵を、生かして島から帰すまいぞ)
と、密かに、盟を結んだ輩が、藩の布令を、無視して、二日も前から、船島へ上がってきょうを待ち構えていた。
だが、今朝になって。
長岡佐渡、岩間角兵衛などの奉行や、又、警備の藩士たちがそこへ上陸するに及んで、すぐ発見され、きびしく不心得を諭されて、船島から隣り島の——彦島の勅使待へと、追い払われてしまったものだった。

三

その日の禁令上、試合に立会う役人側では、そういう処置を取ったものの、しかし、藩士の八分までは、当然、同藩の巌流に勝たせたいと祈っていたし、又、師を思うの余りから、そういう行動に出た門下たちに、肚では同情もよせていた。

で、一応。
役儀上、彼等を船島からは追い払ったものの、すぐ側の彦島へ移っている事なら、不問に済ましておく考えだった。
なお。
試合がすんで――
万一にも、巌流のほうが打ち負けた場合は、それも船島の上では困るが、船島を武蔵が離れてからならば、師の巌流の雪怨という意趣から、どういう行動に出ようとも――それは自分らの関り知った事ではない。
――というのが、処置を取った役人側の偽らぬ肚だった。
彦島へ移った巌流の門下たちは又、それを見抜いている。そこで彼等は、漁村の小舟を狩り集め、約十二、三の舳を勅使待の浦へ着けておいた。
そして、試合の様子を、直ぐここへ報知する伝令を、山の上に立たせておき、万一の場合には、すぐ三、四十人が各〻小舟で海上へ出て、武蔵の帰路を遮り、陸路へ追跡して討ち取るなり、場合によっては、彼の舟を覆して、海峡の底に葬り去ってしまおうとも――誅し合せていたのだ。
「――武蔵か」
「武蔵だ」
呼び交わして、彼等は、小高い所へ駈け上ったり、手をかざして、真昼の陽のぎらぎら反射する海面へ、眸をこらしていた。

「船往来は、今朝から止まっている。武蔵の舟にちがいない」
「一人か」
「一人のようだ」
「つくねんと、何か羽織って坐っておるぞ」
「下へ、小具足でも着けて来たものだろう」
「何せい、手配をしておけ」
「山へ、行ったか。見張に――」
「登っている。大丈夫」
「では、われわれは、舟のうちへ」
いつでも、綱を切れば、漕ぎ出られるように、三、四十名の者達は、どやどやと、思い思いに小舟へかくれた。
舟には、一筋ずつの長槍も伏せてあった。物々しい扮装振りは、巌流よりも、亦、武蔵よりも、その人々の中に見られた。

――一方。

武蔵見えたり！
という声は、そこのみでなく、同じ頃に、船島にも当然伝わっていた。
ここでは。
波の音、松の声、雑木や姫笹の戦ぎも交じって、全島、今朝から人もないような気配だった。
気のせいか、蕭殺として、それが聞えた。長門領の山からひろがった白雲が、ちょうど中天の

太陽を時折かすめて、陽が陰ると、全島の樹々や篠のそよぎが、暗くなった。——と思うと、一瞬に又、くわっと陽が照った。

島は、近寄って見ても、極めて狭い。

北はやや高く丘をなして、松が多い。そこから南の懐が、平地から浅瀬となったまま海面へのめりこんでいる。

その丘ふところの平地から磯へかけて、きょうの試合場と定められていた。

奉行以下、足軽までの者は、磯からかなり距った所に、樹から樹へ、幕を繞らし、鳴りをひそめていた。巌流は藩籍に在る者であり、武蔵は拠る所ない者なので、それが相手方への威嚇にならない程度には、心して控えている陣容だった。

しかし約束の時刻が、もう一刻以上も過ぎている事。

二度も、ここからの飛脚舟で催促をやってある事などで、静粛なうちにも、やや焦躁と反感とを一様に抱いていた所である。

「武蔵どの！　見えましたっ」

絶叫しながら、磯に立って見ていた藩士が、遠い床几と幕の見える方へ駈けて行った。

四

「——来たか」

岩間角兵衛は、思わずいって、床几から伸び上がった。

彼は、きょうの立会人として、長岡佐渡と共に、派遣されて来た役人ではあるが、彼がきょ

うの武蔵を相手とする人間ではない。
しかし、口走った感情は、自然の流露であった。
彼のわきに控えていた従者や下役の者も、皆、同じ眼色を持って、
「お！　あの小舟だ」
と、一緒に起ち上がった。
角兵衛は、公平なる藩役人の身として、すぐその非に気づいたらしく、
「控えろ」
と、周りの者を誡めた。
じっと、自分も、腰をすえた。——そして静かに、巌流のいるほうへ流し目を送った。
巌流のすがたは見えなかった。ただ、山桃の樹四、五本のあいだに、龍胆の紋のついた幕がひらめいていた。
幕のすそには、青竹の柄のついた柄杓を添えた新しい手桶が一箇あった。だいぶ早目に島へ着いた巌流は、相手の来る時刻が遅いので、さっき、水桶の水をのんでいた。そして幕の陰で休息していたが、今は、そこに見当らなかった。
その幕を挾んで、少し先の土坡の向側には、長岡佐渡の床几場があった。
ひとかたまりの警固の士と、彼の下役と、彼の従者として伊織がわきに控えていた。
今——武蔵どのが見えた！　という声を触れながら、磯のほうから一人が駈けて、警備の中にはいり込むと、伊織の顔いろは、唇まで白くなった。
正視したまま、動かずにいた佐渡の陣笠が、自分の袂を見るように、ふと横を見——

「伊織」
と、低声でよんだ。
「……はっ」
伊織は、指をついて、佐渡の陣笠の裡を見上げた。
足もとから顫えてくるような全身のおののきを、どうしようもなかった。
「伊織――」
もいちど、その眼へ、じっといって、佐渡は訓えた。
「よう、見ておれよ。うつろになって、見のがすまいぞ。――武蔵どのが、一命を曝して、そちへ伝授して下さるものと思うて今日は見ておるのだよ」
「…………」
伊織は、うなずいた。
そしていわれた通り、眼を炬のようにみはって、磯のほうへ向けていた。
磯まで、一町の余はあろう。波打際の白いしぶきが、眼に沁むほどだったが、人影といっては、小さくしか見えないのである。試合となっても、実際の動作、呼吸などを、つぶさに目撃するわけにはゆかない。――しかし、佐渡がよく見よと訓えたのは、そういう技の末の事ではあるまい。人と天地との微妙な一瞬の作用を見よといったのだろう。又、こういう場所に臨むもののふの心構えというものを、後学のため、遠くからでもよく見届けておけといったのであろう。
草の波が寝ては起きる。青い虫がときおりとぶ。まだひよわい蝶が、草を離れ、草にすがっては、何処ともなく去ってゆく。

「――ア。あれへ」
　磯の先へ、徐々と、近づいて来た小舟が、伊織の眼にも、今見えた。時刻はちょうど、規定の刻限よりも遅れる事約一刻――巳の下刻（十一時）ごろと思われた。
　しいんと、島の内は、真昼の陽だけにひそまり返っていた。
　その時、床几場のあるすぐ後ろの丘から、誰やら降りて来た。佐々木巌流であった。待ちしびれていた巌流は、小高い山に上って、独り腰かけていたものとみえる。
　左右の立会役の床几へ礼をして巌流は、磯のほうへ向い、静かに、草を踏んで歩み出していた。

五

　陽は、中天に近かった。
　小舟が、島の磯近くへ入ってくると、幾ぶん入江になっているせいか、波は細やかになり、浅瀬の底は青く透いてみえた。
「――どの辺へ？」
　櫓の手を弛めながら、佐助は磯を見まわして訊ねた。
　磯には、人影もなかった。
　武蔵は、被っていた縞入れを脱ぎ捨てて、
「真っ直に――」
　と、いった。

舳はそのまま進んだ、けれど佐助の櫓の手は、どうしても大きく動かなかった。――寂として、人影も見えない島には、鵯が高く啼いていた。

「佐助」

「へい」

「浅いなあ、この辺は」

「遠浅です」

「むりに漕ぎ入れるには及ばぬぞ、岩に舟底を噛まれるといけない。――潮は、やがてそろそろ退潮ともなるし」

「……？」

佐助は答えを忘れて、島の内の草原へ、眼をこらしていた。松が見える。地味の痩せをそのまま姿にしているひょろ長い松だ。――その木陰に、ちらと、猩々緋の袖無羽織のすそが翻めいていた。

――来ている！　待構えている。

巌流の姿があれに。と、指さそうとしたが、武蔵の様子を窺うと、武蔵の眼もすでにそこへ行っている。眸を、そこに向けながら、武蔵は、帯に挟んで来た渋染の手拭をぬいて、四つに折り、頻りに潮風にほつれる髪を撫で上げて鉢巻した。

小刀は前に帯び、大刀は、舟の中へ置いてゆくつもりらしく――そして、飛沫に濡れぬ用意に、蓆を着せて、舟底へ置いた。

右手には、櫂を削って木剣とした手作りのそれを握った。そして舟から起ち上がると、
「もうよい」
と、佐助へいった。
——だが。
まだ磯の砂地までは、水面二十間もあった　佐助は、そういわれてから、二ツ三ツ大きく櫓幅を切った。
舟は、急激に、グググッーーと突き進んで、とたんに浅瀬を嚙んだものとみえる。舟底がどすんと持ち上がったように鳴った。
左右の袴の裳を、高く褰げていた武蔵は、その弾みに、海水の中へ、軽く跳び下りていた。
飛沫も上がらないほど、どぼっと、脛の隠れるあたりまで。
ざぶ！
ざぶ！
ざぶ……
かなり早い足で、武蔵は、地上へ向って歩き出した。
引っ提げている櫂の木剣の切っ先も、彼の蹴る白い水泡と共に、海水を切っている。
五歩。
——また十歩と。
佐助は櫓を外したまま、後ろ姿を自失して見ていた。毛穴から頭のしんまで寒気立って、どうすることも忘れていたのである。

と、その時。
はっと、彼は息づまるような顔をした。彼方のひょろ松の陰から、緋の旗でも流れて来るように巌流のすがたが駈けて来たのである。大きな業刀のぬり鞘が陽を刎ね返し、銀狐の尾のように光って見えた。
……ざ。ざ。ざッ。
武蔵の足は、まだ海水の中を歩いていた。
早く！
と、彼が念じていたのも空しく、武蔵が磯へ上がらぬ間に、巌流の姿は水際まで駈け寄っていた。
しまった――と思うと共に、佐助はもう見ていられなかった。自分が真二つにされたように、舟底へ俯つ伏してふるえていた。

六

「武蔵か」
巌流から呼びかけた。
彼は、先を越して、水際に立ちはだかった。
大地を占めて、一歩も敵にゆずらぬように。
武蔵は、海水の中に踏み止まったまま、いくぶん、微笑をもった面で、
「小次郎よな」

と、いった。
櫂の木剣の先を、浪が洗っている。
水にまかせ、風にまかせ、ただその一木剣があるだけの姿だった。
しかし——
渋染の鉢巻に幾分つりあがった眦はすでにふだんの彼のものではない。
射るという眼はまだ弱いものであろう。武蔵の眼は吸引する。湖のように深く、敵をして、自己の生気を危ぶませるほど吸引する。
射る眼は、巌流のものだった。双眸の中を、虹が走っているように、殺気の光彩が燃えている、相手を射竦めんとしている。
眼は窓という。思うに、ふたりの頭脳の生理的な形態が、そのまま巌流の眸であったであろう、武蔵の眸であったにちがいない。
「——武蔵っ」
「…………」
「武蔵っ！」
二度いった。
沖鳴りが響いてくる。二人の足もとに、潮が騒いでいた。巌流は、答えない相手に対して、勢い声を張らないでいられなかった。
「怯れたか。策か。いずれにしても卑怯と見たぞ。——約束の刻限は疾く過ぎて、もう一刻の余も経つ。巌流は約を違えず、最前からこれにて待ちかねていた」

「…………」

「一乗寺下り松の時といい、三十三間堂の折といい、常に、故意に約束の刻をたがえて、敵の虚を突くことは、抑〻、汝のよく用いる兵法の手癖だ。――しかし、きょうはその手にのる巌流でもない。末代もの嗤いのたねとならぬよう潔く終るものと心支度して来い。――いざ来いっ、武蔵！」

いい放った言葉の下に、巌流は、鐺を背へ高く上げて、小脇に持っていた大刀物干竿を、ぱっと抜き放つと一緒に、左の手に残った刀の鞘を、浪間へ、投げ捨てた。

武蔵は、耳のないような顔をしていたが、彼の言葉が終るのを待って――そしてなお、磯打ち返す波音の間を措いてから――相手の肺腑へ不意にいった。

「小次郎っ。負けたり！」

「なにっ」

「きょうの試合は、すでに勝負があった。汝の負けと見えたぞ」

「だまれっ。なにをもって」

「勝つ身であれば、なんで鞘を投げ捨てむ。――鞘は、汝の天命を投げ捨てた」

「うぬ。たわ言を」

「惜しや。小次郎、散るか。はや散るをいそぐかっ」

「こ、来いッ」

「――おおっ」

答えた。

武蔵の足から、水音が起った。
巌流もひと足、浅瀬へざぶと踏みこんで、物干竿をふりかぶり、武蔵の真っ向へ――と構えた。
が、武蔵は。
一条の白い泡つぶを水面へ斜めに描いて、ザ、ザ、ザと潮を蹴上げながら、巌流の立っている左手の岸へ駈け上がっていた。

七

水を切って岸へ、斜めに、武蔵が駈け上がったのを見ると、巌流は、波打際の線に添って、その姿を追った。
武蔵の足が、水を離れて磯の砂地を踏んだのと、巌流の大刀が――いや飛魚のような全姿が、
「喝ッ」
と、敵の体へ、すべてを打ち込んだのと、ほとんど、同時であった。
海水から抜いた足は重かった。武蔵はまだ戦う体勢になかった瞬間のように見えた。物干竿の長剣が、自己のうえに、ひゅっ――と来るかと感じた時、彼のからだはまだ、駈け上がって来たまま、いくぶんか前のめりに屈曲していた。
――が。
櫂削り(かいけず)りの木剣は、両の手で、右の小脇から背へ隠すように深く、横へ構えられていた。
「……ムむ！」

といったような――武蔵の声なきものが、巌流の面を吹いた。
頂天から斬り下げて行くかと見えた巌流の刀は、頭上に鍔鳴りをさせたのみで、武蔵の前へ約九尺ほども寄ったところで、却って、自身から横へぱっと身を反らしてしまった。
不可能を覚ったからである。
武蔵の身は、巌のように見えた。
「…………」
「…………」
当然、双方の位置は――その向きを変えている。
武蔵は、居所のままだった。
水の中から、二、三歩あがったままの波打際に立って、海を背後に、巌流のほうへ向き直った。
巌流は、その武蔵に直面し――又、前面の大海原に対して、長剣物干竿を諸手に振被っていた。
「…………」
「…………」
こうして、二人の生命は今、完全な戦いの中に呼吸し合った。
元より武蔵も無念。
巌流も、無想。
戦いの場は、真空であった。

が、波騒の外――
又、草そよぐ彼方の床几場の辺り――
ここの真空中の二つの生命を、無数の者が今、息もつかずに見まもっていたに違いなかった。
巌流のうえには、巌流を惜しみ、巌流を信じる――幾多の情魂や禱りがあった。
又、武蔵のうえにもあった。
島には、伊織や佐渡。
赤間ヶ関の渚には、お通やばばや権之助や。
小倉の松ヶ丘には、又八や朱実なども。
その各〻が、ここを見る目もとどかない所から、ひたすら、天を祈っていた。
しかし、ここの場所には、そういう人々の祈りも涙も加勢にはならなかった。又、偶然や神助もなかった。あるのは、公平無私な青空のみであった。
その青空の如き身になりきる事がほんとの無念無想の相というのであろうか、生命持つ身に容易になれない事は当然である。ましてや、白刃対白刃のあいだでは。
「――――」
「――――」
ふと。おのれッと思う。
満身の毛穴が、心をよそに、敵へ対して、針のようにそそけ立って歇まない。
筋、肉、爪、髪の毛――およそ生命に附随しているものは、睫毛ひとすじまでが、みな挙げて、敵へ対し、敵へかかろうとし、そして自己の生命を守りふせいでいるのだった。その中で、

心のみが、天地と共に澄みきろうとすることは、暴雨の中に、池の月影だけ揺れずにあろうとするよりも至難であった。

八

長い気もちのする——しかし事実はきわめて短い——寄せ返す波音の五たびか六たびも繰り返すあいだであったろうか。

やがて——という程の間もないうちにである。大きな肉声は、その一瞬を破った。

それは、巌流のほうから発したものだったが、殆ど、同音になって、武蔵の体からも声が出た。

巌を搏った怒濤のように、二つの息声が、精神の飛沫を揚げ合ったとたんに、中天の太陽をも斬って落すような高さから、長刀物干竿の切っ先は、細い虹をひいて、武蔵のまッ向へ跳んで来た。

武蔵の左の肩が——

その時、前下がりに躱った。腰から上の上半身も、平面から斜角に線を改めた時、彼の右足は、すこし後ろへ引かれていた。そして諸手の櫂の木剣が、風を起してうごいたのと、巌流の長剣が、切っ下がりに、彼の真眉間を割って来たのと、そこに差というほどの差は認められなかった。

「…………」

「…………」

ぱっと、もつれた一瞬の後は、ふたりの呼吸が磯の波よりは高かった。
武蔵は、波打際から、十歩ほど離れて、海を横にし、跳びのいた敵を、櫂の先に見ていた。
櫂の木剣は、正眼に持たれ、物干竿の長剣は、上段に返っていた。
しかし、ふたりの間隔は、相搏った一瞬に、おそろしく遠退いていた。長槍と長槍とでも届かないくらいな間隔にわかれていたのである。
巌流は、最初の攻勢に、武蔵の一髪も斬ることはできなかったが、地の利は、思うように占め直したのである。
武蔵が、海を背にして、動かなかったのは、理由があった事である。真昼の中の陽は海水によく反射して、それに対っている巌流に取っては、はなはだしい不利だったのだ。もし、その位置のまま武蔵の守勢に対して、ぐっと対峙していたら、慥かに、武蔵よりも先に精神も瞳もつかれてしまったに違いないのである。
――よしっ。
思うように、地歩を占め直した彼は、すでに武蔵の前衛を破ったかのような意気を抱いた。
と――巌流の足はじりじりと小刻みに寄って行った。
間隔をつめて行く間に敵の体形のどこに虚があるかを観、同時に、自己の金剛身をかためて行くべく、それは当然な小刻みの足もとだった。
ところが、武蔵は、彼方からずかずかと歩み出して来た。
巌流の眼の中へ、櫂の先を突っ込むように、正眼に寄って来たのである。
その無造作に、巌流が、はっと詰足を止めた時、武蔵の姿を見失いかけた。

櫂の木剣が、ぶんと上がったのである。六尺ぢかい武蔵の体が、四尺ぐらいに縮って見えた。足が地を離れると、その姿は、宙のものだった。

「――あッっ」

巌流は、頭上の長剣で、大きく宙を斬った。

その切っ先から、敵の武蔵が額を締めていた柿色の手拭が、二つに断れて、ぱらっと飛んだ。

巌流の眼に。

その柿色の鉢巻は、武蔵の首かと見えて飛んで行った。血とも見えて、颯ッと、自分の刀の先から刎ね飛んだのであった。

ニコ、と。

巌流の眼は、楽しんだかも知れなかった。しかし、その瞬間に、巌流の頭蓋は、櫂の木剣の下に、小砂利のように砕けていた。

磯の砂地と、草原の境へ、仆れた後の顔を見ると、自身が負けた顔はしていなかった。唇の端から、こんこんと血こそ噴いていたが、武蔵の首は海中へ斬って飛ばしたように、いかにも会心らしい死微笑を、キュッと、その唇ばたにむすんでいた。

九

「――ア。アッ」

「巌流どのが」

彼方の床几場のほうで、そうした声が、さっと流れた。

われを忘れて。
岩間角兵衛も起ち、その周りの者も、悽惨な顔をそろえて、伸び上がった。——が、すぐ側の、長岡佐渡や伊織たちのいる床几場のひとかたまりが、自若としているのを見て、強いて平静を装いながら、角兵衛もその周囲も、じっと、動かない事に努めていた。
が——蔽いようもない敗色と、滅失の惨気が、巌流の勝ちを信じていた人々のうえを包んだ。
「……？」
しかもなお、未練や煩悩は、そこまでの現実を見ても、自分らの眼の過りではないか——と疑うように、生つばをのんで、しばしは放心していた。
島の内は、一瞬の次の一瞬も、人なきように、ひそまり切っていた。
無心な松風や草のそよぎが、ただ遽かに、人間の無常観をふくだけだった。
——武蔵は。
一朶の雲を、見ていた。ふと見たのである、われに返って。
今は雲と自身とのけじめを、はっきり意識にもどしていた。遂にもどらなかった者は、敵の巌流佐々木小次郎。
足数にして、十歩ほど先に、その小次郎は俯つ伏せに仆れている。草の中へ、顔を横にふせ、握りしめている長剣の柄には、まだ執着の力が見える。——しかし苦しげな顔では決してない。その顔を見れば、小次郎は自己の力を挙げて、善戦したという満足がわかる。戦に戦いきった者の顔には、すべて、この満足感があらわれているものである。そこに残念——と思い残しているような陰は少しも見当らない。

武蔵は、斬れ落ちている自分の渋染の鉢巻に眼を落して、肌に粟を生じた。

「生涯のうち、二度と、こういう敵と会えるかどうか」

それを考えると、卒然と、小次郎に対する愛情と、尊敬を抱いた。

同時に、敵からうけた、恩をも思った。剣を把っての強さ――単なる闘士としては、小次郎は、自分より高い所にあった勇者に違いなかった。そのために、自分が高い者を目標になし得た事は、恩である。

だが、その高い者に対して、自分が勝ち得たものは何だったか。

技か。天佑か。

否――とは直ぐいえるが、武蔵にも分らなかった。

漠とした言葉のままいえば、力や天佑以上のものである。小次郎が信じていたものは、技や力の剣であり、武蔵の信じていたものは精神の剣であった。それだけの差でしかなかった。

「…………」

もくねんと、武蔵は、十歩ほどあるいた。小次郎の体のそばに膝を折った。

左の手で小次郎の鼻息をそっと触れてみた。微かな呼吸がまだあった。武蔵はふと眉を開いた。

「手当に依っては」

と、彼の生命に、一縷の光を認めたからである。と同時に、かりそめの試合が、この惜しむべき敵を、この世から消し去らずに済んだかと、心もかろく覚えたからであった。

「……おさらば」

小次郎へも。

彼方の床几場の方へも。

そこから手をついて、一礼すると武蔵の姿は、一滴の血もついていない櫂の木太刀を提げたまま、さっと北磯のほうへ走り、そこに待っていた小舟の中へ跳びのってしまった。

どこへ指して、どこへ小舟は漕ぎ着いたか。

彦島に備えていた巌流方の一門も、彼を途中に擁して師巌流の弔合戦に及んだというはなしは遂に残っていない。

生ける間は、人間から憎悪や愛執は除けない。

時は経ても、感情の波長はつぎつぎにうねってゆく。武蔵が生きている間は、なお快しとしない人々が、その折の彼の行動を批判して、すぐこういった。

「あの折は、帰りの逃げ途も怖いし、武蔵にせよ、だいぶ狼狽しておったさ。何となれば、巌流に止刀を刺すのを忘れて行ったのを見てもわかるではないか」――と。

波騒は世の常である。

波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は歌い雑魚は躍る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水のふかさを。

「宮本武蔵」茶話

後醍院良正

吉川英治氏の「宮本武蔵」は、朝日新聞に昭和十年八月二十三日付夕刊から連載されはじめ、完結したのは昭和十四年七月十一日、実に千十三回という、朝日の小説としては記録破りの大長篇であった。当時社内には小説委員会があり、学芸部長も加わり決定したのだが、吉川氏が「宮本武蔵」を提案したのに対し、一部の批判があった。学芸部長らはジューマの「巌窟王」に匹敵するようなスケールの大きさを望んでいた。題名だけで吉川氏の腹の底まで読みとることができなかったのも、当時としては武蔵があまりポピュラーであるだけに、「吉川武蔵」の雄大な構想に思い及ばなかったといえよう。

連載二日前の予告には、吉川氏は、たれでも知っている武蔵でないことを明言している。「作者の言葉」の一節を引用すると――

僕の宮本武蔵は、読者にはまつたく未知の人間と会ふ気がするであらう。殺伐な時潮を剣を信仰にまであげて生きた偉人の話は、やゝ硬くないかと憂ふる軟派好みの読者もあらうが、どんな時代だつて、女のない社会や恋愛を持たない人生はないし、……肩は凝らせないつもりである。（仮名づかい原文のまま）

武蔵の執筆に当たっては、吉川氏はあらゆる関係書をあさり、特に「五輪書」は反復味読した。すさんだ時代に、少年期、中年期を送り、剣に生涯を託して自己の完成にひたむきな人生遍路を試みた武蔵を中軸に、社会、世相を探究するのが吉川氏の念願であった。またペンに託した吉川氏自身の自己完成への道でもあった。

当時、学芸部の弱輩記者だったわたしは、交渉に出かけた時、従来の夕刊小説の例の通り、社命に従って二百回ぐらいで完結するよう申し入れ承諾を得た。あとは毎日の原稿催促に追われた。出社するや電話で原稿のできる時間を問い合わせ、その時間に原稿係の人がオートバイで取りに行く。時には手ぶらで帰ってくる。と、わたしの神経はいらだち、明日が待てなくなり吉川邸にはしり、応接室で大きなデスクを隔てて対座し強談判におよぶ。おそらくわたしの怒り肩は張っていたであろう。それにひきかえ、小柄な吉川氏はすんなりしたなで肩の力を抜き、にやりと笑って、煙草を何本もくゆらせながらうなずくばかり。勝負にならず引き下がる。

また朝が来る。わたしはまた同じことをくりかえす。「吉川さんはわれわれの一月分の給料を三日ぐらいでかせぐんだぞ」と、同僚とぐちりながらも催促はかかせない。さしえを画く矢野橋村氏が関西在住のため、原稿の余裕が一層必要になる。大阪からの催促、それがわたしの催促にもつながってくる。東京から校了のゲラ刷りを大阪に鉄道便で送る。迫ってくると吉川氏の原稿をコピーして送る。もっとつまると電話で送る。元来新聞社の直通電話はニュース本位に使われるから、暇な時間を見て送ってくれる。字句の説明、句読点、行かえなど丁寧に送るから時間もくい、面倒な仕事である。いやな顔をされるのも無理はなかった。

予定の二百回の日が近かづいた。そのころ、わたしあての手紙には「腹稿二百回までのめどに

書いてゐましたが存外ストオリを辿り遅れ少々はみ出しさうなのでつひ控へてゐました。御都合月末月初では悪しとのこと月を股いで七、八日頃までを御許容うけると二百二十四、五回どころになりこちらは完筆に充分ですが御方策もあるべく思はれますから来月に限るならばテンポを早め御都合の中旬に擱筆します……二三日遅稿コッピーおとりのよし恐縮です明朝一回午後一回追ひつきます」とある。

最初二百回ぐらいの予定が、人気は高まるばかり、わたしは何度か足を運び延ばし延ばしてもらった。この時の足は軽かったが、吉川氏は自分の構想通りに行きそうだと思っていたことであろう。ある日、氏は「文学にはニヒルがなければならないと思うね」といわれたことを今でも記憶しているが、吉川氏は武蔵を書く心中にニヒルがあったのかとも思う。武蔵の心にニヒルがあるとすれば？　ふと浮かぶのがプラトニック・ラブを扱かったお通との関係だが、待てよもっと大きいニヒルに違いない。作者のいう軟派好みの読者の中にある高等学校の教師がいたが、会うと「お通さんはどうなるのだ」と気にばかりしていた。社内では工場の従業員、校閲部員そのほか先を争って読み、中には学芸部のデスクに来て先きを聞きたがる熱心な読者も多かった。外部の声は販売店がキャッチするのが早い。と社の販売部に報告され、販売部は得意になり、回数を延ばせの声も高まってきた。

昭和十一年九月十日付夕刊で「火の巻」は三百二十七回となり、一応前篇を終った。翌日には小説を休み、氏は「随筆一夕」として登場人物を紹介し、矢野橋村氏が扇面の中にすべての人物の顔をそろえて、さしえにしている。氏はこの一文の中で読者に訴えたいところを述べている。

第一の要所は、この小説の主人公は、飽まで絶望を持たないということである。読者と共

に主人公が、常に人生に希望を見つけて歩んでゆく。
にはじまり、息ぐるしい世の中でも、世の中を見かぎらず、自分を捨ててしまわず、よく生きぬいて最後に実をつかむように願っている。また「武蔵を繞って、又八を繞って、女のあるく道も、男の処生や剣の修行以上のあぶなさと難しさを持つのである。」とも述べ、又八の母のお杉婆さんは「盲愛の母であって、偏した母性型ではあるが、幾歳になっても武蔵や又八を一箇の子どもとしか見られない特異な存在」と説明し、城太郎少年は「われわれの少年期の回顧である。」と率直に語っている。翌日から「風の巻」がはじまった。

武蔵連載中に忘れ得ない大事件は昭和十一年の二・二六事件である。青年将校を指導者とする軍隊がクーデターをたくらみ、実行に及んだ。二月二十六日早朝、青山表町の吉川邸の間近かに住む高橋是清蔵相が暗殺された。その前夜ふけてから雪が降っていたが、吉川氏はしじまの中でペンを執り徹夜をしていた。百六十何回目ぐらいの「芍薬の使者」のあたりを書き、朝になって一睡したが、九時ごろ読売新聞社からの電話で起こされ、蔵相の死を知った。この日から吉川家は事件の渦に巻きこまれてしまい、家族の女性たちは、みな郊外の家に避難させ、屋敷には弟さんと書生さんが残った。

晩には電灯はつかず、ろうそくの光を頼りに書庫にこもり仕事をつづける吉川氏であった。
「さういふ中で執筆にだけ没入してゐる一種の自慰感などもあるにはあつたが、しかし困つたのは、電話連絡はついても、また、どつちから使を出すにせよ、原稿送受の方法がまつたく中断されてしまつた事だつた」と氏は追懐している。一方、朝日には二十六日朝、機関銃を構えた軍隊三十名ばかりが襲来し、社の代表者に面会を求め、緒方主筆が玄関で応対し、求めに応じて従業

員全員を退出させた。軍隊は工場に乗りこみ、活字ケースを手当り次第ひっくりかえし、新聞発行の機能を止めた。

翌二十七日の夕方六時ごろ、坂崎学芸部長から市街戦がはじまるかも知れないから、避難する時も行動をともにするようにとの緊急命令が出た。やがて美土路局長が平然として学芸部のデスクに顔を出し、用のある者だけ残るようにいい渡して去った。わたしは朝刊小説のさしえを画いていた岩田専太郎氏宅へ行き、その場でかいてもらった。吉川氏の原稿は僚友の新延君が電話連絡し、警戒線まで社の印をつけた原稿便が出かけ、先方からも原稿持参で出かけてもらい、無事に社に届いた。歩哨も、宮本武蔵の原稿と聞いて快く受け渡しを許した。

二十八日、社内には握り飯と漬物が用意され、籠城気分は濃くなり、武蔵の大阪原稿は吉川氏から直接航空便で送ってもらうことにした。二十九日午後二時ごろ戒厳司令官から鎮定の報告があり、ほっとした。この四日間は吉川氏の筆によると「これは作品上の苦心ではないが、私にも忘れえない深刻な覚えがいまも残つてゐる。」と書き残している。（昭和三三・五「週刊朝日・奉仕版」）

連載中にもう一つ事件があった。経済学者東大教授本位田祥男博士が学生から「又八」とニックネームをつけられ、憤慨し吉川氏へ抗議の一文を寄せた。昭和十一年一月十日から学芸面に「宮本武蔵と私の祖先」の題で三日にわたって載っている。「吉川氏は私の村を本位田村と書いてゐるがそれは誤である。博士の郷里の村と武蔵の生地宮本村とは川を隔てた所にある。「吉川氏は私の村を本位田村と書いてゐるがそれは誤である。此村は古から今も同様に下町村と呼ばれた。」と学者の態度で吉川氏の小説の誤を指摘するのに懸命である。かと思うと「大衆文芸とも思へない細い味がある」と冒頭に書きながらもつぎのように結んでいる。

とも角又八とお杉婆さんは吉川氏の純然たる創作であらう。それにしても全く悪い役割である。初めから武蔵の引立役に道化として引出された以上、好い役割はなからうと思つてゐたが、あれはひどすぎる。昔から一人の英雄豪傑を造り出す為に、出て来る相手は多く弱虫であり悪人である。英雄も悪人も美人も型にはめられ易い。今日の大衆文学もこの講談の亜流であつてよいだらうか。作者以て如何となす。(昭和十一年元旦試筆)

喜ぶはずの元日から怒りはじめとは珍らしいことである。受けて立つべき吉川氏は紙面では反駁していないが、「随筆・宮本武蔵」の中でこれに触れている。「あなたは小説と歴史とを混同してをられる」と述べ、「本位田姓はあの地方に多い特有な姓氏であり、……滅多にない名だけに、すぐおれの祖先を書いて怪しからぬと思はれたのであらうが、僕が大兄の家の系図を覗いた事はないし、古書にもない又八などといふ人物を、幾ら大兄が系図やお手許の古書を探したつて、出てくる筈もない事は凡そわかりきつた事である。」又八は「有りふれた現代の青年の一つの型をとつて慶長の戦国に呼吸させてみた迄の事である。」と氏らしい太刀さばきである。結局この論争は朝日の首脳下村海南博士が両氏のために一席設けて、手を握ることになった。

「宮本武蔵」は六百回で一時休載した。吉川氏は性来胃腸が弱く、この期間に健康に留意し翌十三年一月はじめから稿を改めた。さしえは石井鶴三氏にかわった。その交渉にあたったのは美術担当の同僚遠山君であった。石井氏は同君に対し、お引きうけするが条件がある。原稿は必ず一週間分よこしてもらいたいということだった。はじめのうちは吉川氏もこの条件を守ったが、思うにまかせず、遂には絵組で頼むようになり、画家としては頗る不満、これでは画けないとまで言い出した。遠山君も弱ったが、その都度わたしも吉川氏に事情を伝え、極力筆を進めてもらう

ことを嘆願した。以上のようないきさつもあったが、無事小説は完結し、編集者としてわたしも肩から大きな荷をおろし、何よりも好評に終ったことを心からよろこび、友人とともに盛大に祝杯をあげた。

そのころ阿部知二氏の文章に、文学は「結局落着くところは一番素朴な、人間性の探求だ。事実文学の歴史が示してゐるやうに、そのやうなものだけが、真実の価値として残るのだ。」と述べているが、まこと吉川氏の武蔵は終始人間性を探求し、大衆文学の地位を高め、文学史上を飾る名作となったのである。

「宮本武蔵」は最初、二百回ぐらいの約束で新聞に連載を始めた。それが作者の意気込み、読者、新聞社の熱望で、五年がかり、千余回の大作に発展した。一度スタートした構成を途中から変えることは至難だが、さすがは新聞小説の名手であった。ただし、構成は幾変転しようと巌流島の対決で終局を飾ることは不動の構想であった。作者が結びの筆をおき、十二貫の痩身は、十貫台に落ちていいう。文字通り、鏤骨（るこつ）の名作であった。

定価480円

ISBN4-06-142055-0 C0193 ¥480E (1)